適來道ふ、山僧が四大を借つて榻座とせんと、只山僧が如きは、四大本空、五陰有にあらず、居士什麼の處に向つて坐せん。」坡擬議して答を加ふる能はず、遂に玉帶を解いて大唉して出づ。印却つて ㊃雲山の衲衣を以て之に贈る、坡偈あり、云ふ。

「百千燈作二一燈光一。盡是劫沙妙法王。
是故東坡不二敢惜一。借二君四大一作二禪床一。」

又云ふ、

「病骨難レ堪玉帶圍。鈍根仍落箭鋒機。
會當三乞二食歌姬院一。換得雲山舊衲衣。」

又云く、

「此帶閱レ人如二傳舍一。流傳到レ此亦悠哉。
錦袍錯落渾相稱。乞與徉狂老萬回。」

印二偈を以て、謝して云く、

㊄「石霜奪得裴休笏。三百年來衆口誇。
爭似蘇公留二玉帶一。長和二明月一共無レ瑕。」

の書を通ず、黄龍其人を記せず、仍つて自ら來つて一見せしむ、佛印住持の事を輟めて之に赴けば黄龍既に沒す、此に於て再び吳中に還る。(僧寶傳)

㊁東坡は蜀の人、大天才ありて文に、詩に、書に、畫に、入るとして精妙ならざるなし、而も坎坷を以て終ふ。

㊃東坡居士は、五祖の戒和尚の後身なり、故に常居袈裟を着けて人に接す、故に佛印贈るに、雲山の裙(衲衣)を以てして、相添はしむ。(僧寶傳廿九)

㊄裴休、石霜の諸に謁す。諸笏を拈起して曰く、天子の手中にあつては珪となり、官人の手中にあつては笏となる、老僧の手中に在つては喚んで何となす。裴休對ふる無し、諸乃ち笏を留下す。

又云く、

「荆山卞氏㊀三朝獻。㊁趙國相如萬死回。
至寶只應二天子用一。因レ何留在㊅小蓬萊一。」

㊆楊次公提刑、一日芙蓉楷㊇禪師に問うて曰く、「某と師と相別るること幾年ぞ。」楷曰く、「七年。」楊云く、「者七年參禪するや、學道するや。」楷曰く、「者の鼓笛を打せず。」楊曰く、「與麼なれば、則ち空しく山水に遊んで、百無所成。」楷曰く「相別るゝこと未だ久しからざるに、善く能く高鑑せり。」と楊呵々大笑す。㊈韓魏公夏日來り訪ふ。楷出でゝ接す。韓遂に曰く、「禁足不出、甚に因つて破戒するや。」楷曰く、「官には針をも容れず、私に車馬を通ず。」韓大いに之を喜ぶ。

㊉眞淨禪師、筠の大愚に居るとき、太守錢公弋來り遊び、禪者の驟多を怪む。衆、㊋師に道德あれば、奔隨して至るを以てす。錢公卽ち其の室に入る、未だ以て之を奇とするにあらず。翌日齋を命じ、師席に就く。俄かに犬あつて逸して屏帷の間に入る、師少しく之を避く。錢嘲りて曰く、「大善知識、固に能く龍を降し虎を伏す、豈犬を畏れんや。」師聲に應じて曰く、

㊀卞氏、玉を荆山に獲て、三朝に獻ず、之を和氏璧光の玉と云ふ、後に秦始皇の玉璽となる。

㊁趙の藺相如は秦に使し、璧を全うして還る、是れより此玉を連城の璧とも云ふ。

㊅小蓬萊は金山の別名ならん。

㊆楊次公、楊傑字は次公、無爲居士と號す、臨終の遺偈に曰く、「一生も亦戀ふべからず、死も亦捨つべからず、大虛空中の之乎者也、錯を以て錯に就く西方極樂」と。

㊇芙蓉楷禪師は、投子の青に嗣ぐ、沂水の人、剛勁孤硬なり、徽宗嘗て紫衣禪師號を賜ふ、堅く辭して受けず、徽宗怒つて僧衣を奪ひ綱州に流す。

㊈韓琦、魏公に封ぜらる。

㊉眞淨克文禪師、黄龍南に嗣ぐ、黄龍の法道浩々なり、其餘を嗣ぐもの甚だ多し、就中眞淨、晦堂を白眉となす。

「伏し易きは巖に偃るの虎、降し難きは ㋺護宅の龍。」錢大いに喜ぶ。乃ち居を聖壽に移して道を問ふ。

㋻承天の宗、行脚の時、泉州の棲隱和尚の爲めに、書を馳せて京師に到り、㋻李駙馬の宅に、都尉に相看す。問うて曰く、「甚によつて京師に到れる。」宗曰く、「專ら院門の爲めに馳書す。」尉曰く、「適來一問を伸ぶるを悔ゆ。」宗曰く、「都尉其の便を得るに慣る。」尉便ち喝す。宗曰く、「一著を放過す。」尉云く、「再犯容さず。」宗曰く、「三十年後、大いに人あつて擧するあらん。」尉大いに咲ふ。

興陽㋼剖禪師、初め大陽に在つて園頭となり、瓜を種うる次で、陽問ふ、「甜瓜は何れの時か熟す。」剖曰く、「卽今熟し了れり。」楊云く、「甜底を揀んで摘み來れ。」剖曰く、「摘み來つて、什麽人にか與へて、喫せしめん。」陽曰く、「園に入らざる者に與へて喫せん。」剖曰く、「未審、園に入らざるもの、還つて喫するや、也た無しや。」陽云く、「汝還つて伊を識るや。」剖云く、「然も識らずと雖も、與へざるを得ず。」陽咲つて去る。剖因に病に臥す、陽問うて曰く、「是の身は幻泡の如く、幻泡の中に成辨す、若し箇の泡幻無くんば、大事辨ずるに由なし、若し大事辨ぜんことを要せば、箇の泡幻を識取せよ。

㋷師は眞淨を指す。
㋺護宅の龍は降伏すれば毫を守つて異れない、語路は錢に擬せしなり。
㋻承天の宗、開應嗣宗禪師か、未詳。
㋻李駙馬、駙馬都尉李遵勗は、見地明白の士なり、谷隱聰に謁して投機の偈あり、曰く、「學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判ず」と、病革るとき、慈明と商量、泊然として逝く。(居士分燈) 先覺宗乘に、眞宗の女、萬壽公主に尙す云々。
㋼剖禪師は郢州大陽の警延に嗣ぐ。

作麽生。」剖云く、「猶ほ是れ者邊の事。」陽云く、「那邊の事作麽生。」剖云く、「匝地に紅輪秀で、海底に華を開かず。」陽咲つて曰く、「乃ち爾く惺々なりや。」剖喝して云く、「將に謂へり、我れ忘却すと。」後竟に起たず、㋽陽遂に直綴并に偈を以て浮山の遠に付す。遠後に投子の靑を接して、洞上の一宗を起す。

法雲の㋾圓通秀禪師、初め華嚴を習ふ。一日嘆じて曰く、「吾れ觀るに、善財始め文殊に見え、復た百十城を過ぎ、五十三の善知識に事ふ。又聞く、達磨西來し、老㋿盧南に去つて、敎外別に無上の心印を傳ふと。吾れ豈方偶に止まり、性相の宗に滯らんや。」因つて所業を捨て、束裝南遊す。無爲に至つて㋿懷禪師に謁す。懷問うて曰く、「座主、甚麽の經をか講ずる。」秀曰く、「粗華嚴を習ふ。」懷曰く、「華嚴は何を以て宗となす。」秀曰く、「法界を以て宗となす。」懷曰く、「法界何を以て宗と爲す。」秀曰く、「心を以て宗となす。」懷曰く、「心は何を以て宗となす。」秀答ふる能はず、懷曰く、「毫釐も差あれば、天地懸隔、汝當に自ら肯會して省發あるべし。」後十七日、僧の白兆報慈に問うて云ふ、「情生ずれば智隔たり、想變ずれば體殊なり、情未だ生ぜざる時如何ん。」慈曰く、「隔」と擧するを聞き、師此に於て大悟す。直に方丈に到つて所得を陳す。懷喜んで曰く、「前後の座主、吾を見る者多し、唯汝一人大法を承くるに堪へたり。吾が宗異日汝一人

㋽陽遂に云云、大陽剖を失ひて法道の斷えん事を憂ひ、洞下の蘊奥を以て浮山の遠錄公に托し、以て繼者を求めしむ、浮山は臨濟下なり、故に投子を接するや、己れに嗣がしめずして、大陽に嗣がしむ、靑の下に芙蓉を出し、又丹霞を出して、洞下の宗風大に振ふ。
㋾圓通名は法秀、天衣の壞に嗣ぐ、雲門宗。
㋿惠能姓は盧。方偶は一方の偶なり。
㌀天衣懷禪師は雲門宗の人。

にあつて行はれん。」師遂に服勤すること八年、懐推して上首となす。㊐舒の四面に出世し、後東京の法雲に居る。雲門の正宗、玆より大いに闡く。

芙蓉の楷、投子に在つて典座となる。子一日問ふ、「厨司㋑勾當易からず。」楷云く、「敢てせず。」子云く、「粥を煮るや、飯を蒸すや。」楷云く、「人力は米を淘り、火を著け、行者は粥を煮、飯を蒸す。」子云く、「汝作麽生。」楷云く、「和尚慈悲、佗を放して閑にし去れ。」投子之に駭く。

㋒浮因の㋓成枯木、僧に問ふ、「甚麽の處の人。」僧云く、「西川。」成云く、「幾時か鄉を離る。」僧云く、「前年三月。」成云く、「未だ本國を離れざる一句、作麽生か道はん。」僧云く、「通身是れ口、祇對をなし難し。」成云く、「猶ほ是れ離家失業の句。」僧無語。成打すること一拂子して云く、「枉げて許多の艸鞋を踏破す。」

鼓山の㋔佛心才禪師は閩の人、初め㋕死心に參ず。心問ふ、「鄉里甚麽ぞ。」才云く、「福州。」心云く、㋖「玄沙嶺を出でず、保壽河を渡らず、甚によつて這裡に到る。」才云く、㋗「行によつて掉臂を妨げず。」心云く、「左手に掉ふか、右手に掉ふか。」才兩手を放下して、掉出す。心大いに喜ぶ。挂搭を許すに及び、已に侍僧に擠でらる。云ふ、「才到る處に人

㋒舒の四面云々、白雲端和尚の推薦にて、初めて四面山に出世せしなり、師嘗つて黄龍南を謂つて「此の道者何ぞ能く事をなさん」と云へり。

㋑勾當はきりもりなり。

㋓枯木法成禪師は曹洞下、芙蓉の法子。

㋔佛心法才禪師、靈源清に嗣ぐ、黄龍派。清は晦堂に嗣ぐ、黄龍下。

㋕死心新、晦堂に嗣ぐ、黄龍下。

㋖玄沙は五嶺を出でゝ北せず、保壽は黄河を渡つて南せず。

㋗行によつて云々、足を運ぶ毎に兩手を掉ふ也、今の軍隊式の歩み方なり。

㋘吵は鬧なり、人を騷すを云ふ。

の叢林を㋘吵す、和尚之を留むるを得ざれ。」是に於て心遂に納れず。云ふ、「聞く汝到る處に人の叢林を吵すと、且く他處に往け。」才云く、「大善知識、眼甚麽の處に在るや」と、拂袖して出づ。照默に見ゆ、㋙照默之を納る。未だ幾くならず、遂に黄龍の道に契ふ。照默大法を以て之に任ず。

樂全先生㋚張安道、慶曆中滁州に守たり。一僧舍に至り、㋛梵夾の齊整なるを見て、怪み取つて之を閲するに、乃ち楞伽阿跋多羅寶經なり、恍然として舊物を獲るが如し。細かに筆畫を觀るに、手迹宛然として、自ら書する所の者の如し。悲喜太息し、是れより悟入す。嘗て經首の四偈をもつて心要を發明す。東坡南都を過ぎ、親しく公の說を見る、且つ錢三十萬を以て托して云く、「江淮の間に印施せよ」と。㋜東坡親ら書して、佛印をして石に金山に刻せしむ。故に樂全に贈る詩に、

「樂全居士樂ニ於天一。　維摩丈室空脩然。」

と曰ふ句あり。

雪堂の㋝行は、括蒼の人、少うして上座に登り、因に殺生の者を見て、㋞蘊然として感あり。遂に家を捨て、直に泗州の普照王寺に抵つて出家し、

㋙靈源清禪師、黄龍の照默堂に居る、著に靈源筆語あり。

㋚張方平字安道、樂全と號す。王安石嘗て樂全に問うて曰く、孔子沒して百年、孟軻出づ、而も其後絶えて人無きは何ぞや。樂全曰く、豈に無からんや、又之に過ぐるものあり。曰く誰ぞ。曰く、南岳讓、嵩山の珪、馬祖、石頭、丹霞、無業、雪峰、岩頭之れなり。安石頂然嘆伏す。

㋛梵夾の齊整は、一切經の帙、齊整なるを見しなり。

㋜東坡親ら書すとは、みづから跋文を書せしなり、元豐八年九月九日なり、次に、元祐三年に福州に於て再版せるものあり。

㋝雪堂、佛眼に嗣ぐ、楊岐下。

㋞蘊然は心痛の貌。

塔を掃ふをもつて務となす。既に剃髮し、舒の龍門に往いて、佛眼禪師に依り、侍者となる。一衲寒暑を度り、又且つ ㋑蝨を養ひ、隣肩皆之を厭ふ。毎に殿堂の僻處に於て坐禪す。一日、玄沙脚指頭を築著するの話を看て、大いに發明あり。佛眼は乃ち ㋒川の人、上堂の次で、行、侍立す。戲れて曰く、「川僧は嘉苴、浙僧は瀟洒、諸人若し也た信ぜずんば、山僧が侍者を看取せよ」と。一衆大いに咲ふ。後其の父大常博士より出でゝ ㋓三衢に守たり、行時に母の老いたるを以て來歸す。闇者其の繦褸を見て、再三すれども與に進めず、行乃ち ㋔衣を解いて之に與へ、纔かに通覆す。而して其の母之を聞いて覺えず地に仆れて曰く、「我が兒猶ほ在りや」と。遂に迎へて宅堂に入れ、逼つて換衣澡浴せしむ。浴に及び、其の衣盡く換へ去り、只だ其の新衣を著くるを得。行泣いて曰く、「我れ幾年か他と ㋕眷屬を爲す、豈一旦遽かに相捨てんや」と。卽ち吉祥寺に抵つて宿をなす。次の日、父母兄弟俱に來つて報謁す。而も行、黎明を以て去り、竟に見るに及ばず。但だ壁間に偈を留めて云く、

「莫レ嫌心似レ鐵。自己尙爲レ寃。掃二盡門前雪一。方開二火裡蓮一。萬般休二更問一。一等是忘緣。箇事相應處。金剛種現前。」

㋑蝨を養ふとは、慈悲を以て殺戮せざるを云ふ。
㋒川の人、川は四川なり、浙中の僧、蜀僧の勃窣を罵つて、川慕苴と云ふ。
㋓三衢は山の名、衢州にあり、路三越に通ず、故に三衢と云ふ。(元和郡縣志)
㋔鄉を出でし時、着くる處の衣なり。
㋕父を捨て母を離るゝも、尙ほ此衣と眷屬をなす。

其の母師を憶ふに因つて失明す。行再び括蒼に歸る。其の父逼つて南明に出世せしめ、衢の烏巨に遷り、其の道大いに振ひ、饒の薦福に終ふ。妙喜親しく爲めに語錄の序を撰し、世に流傳す。

典午 ㋖和尙は成都の人、姓は鄭氏、名は天游、本仕族なり。初め郡庠に試みられ、復た梓州に試みらる、二處俱に發す。游敢て承受せず、名を竄して關を出づ。適々 ㋗山谷道人西より還り、其の風骨凡ならず、論議超卓を見るに因つて、迺ち舟を同じうして下り、竟に廬山に往いて剃髮し、舊名を改めず。首めに死心に參じ、契はず、乃ち湛堂に ㋘泐潭に依る。時に妙喜侍者たり、游書司に居り、旦夕相從ふ。後古樂山に往いて、大事を發明し、廬山の小寶峰に出世し、後雲巖に居る。嘗て忠道者の牧牛の頌に和して曰く、

「兩角指レ天。四蹄踏レ地。拽二斷鼻圈一。牧二甚屎尿一。」

㋙初め張無盡、其の坦率事を事とせざるを見て、嘗つて之を慢つて、之を㋚顚游と謂ふ。後妙喜此の頌を持して之を獻ず、無盡几を撫して稱賞す。妙喜曰く、「相公且く道へ、者の頌は是れ甚麼の人の做せし。」無盡曰く、「此れ彌勒大士にあらずんば、安んぞ能く此言を發せん。」妙喜曰く、「此れ乃ち前日の顚游の作る所なり。」無盡曰く、「奇なる哉、奇なる哉、湛堂に乃ち此の兒あるか、臨濟の一宗、其れ此に在り、但だ質庫中に將ち去つて ㋛典ずるも也た

㋖典午、湛堂に嗣ぐ、堂は眞淨に嗣ぐ、黃龍下。
㋗山谷道人黃魯直は、晦堂に參ず、江西の詩祖と稱せらる。
㋘泐潭は、南昌府にあり、石門山あり、其下に寶峰院あり、眞元中、馬祖道一禪師示寂、舍利を得て玆に葬る、眞淨、湛堂皆此院に住す。
㋚顚は狂なり、天と同音。
㋛典とは、物品を質に置くことなり、此の天は、質屋の典とするも、百貫の直打はありと。

一百貫を典じ得ん。商英肉眼別たず、幾ど此の人を蹉過せり」と。遂に香を燒いて雲巖を望んで悔過す。游後に雲巖を退き、廬山の棲賢を過ぐ。長老其の㋺堅老、又且つ川氣あるを見て、挂搭を肯はず。卻けて曰く、「老々大々、正に是れ㋩質庫裡の典牛か。」と、游之を聞いて、乃ち偈を述べて去る。曰く、

㋺「質庫何曾解典牛。　只緣償重實難酬。
想君本領無多子。　爭解能容者一頭。」

因つて武寧に庵すること四十年、身を終るまで出でず。塗毒の之に見えしとき、已に九十三なりき。

佛燈の㋻詢、罵天と號す、湖の安吉の人、佛鑑に嗣ぐ。禾山に住するの日、嘗て上堂す。僧問ふ、「如何なるか是れ賓中の賓。」答へて曰く、「客路天の遠きが如く、候門海の深きに似たり。」云く、「如何なるか是れ賓中の主。」云く、「長へに客を送るの遠きによつて、憶ひ得たり家に別るゝの遠きを。」「如何なるか是れ主中の賓。」云く、「相逢ふて馬より下らず、各自に前程あり。」「如何なるか、是れ主中の主。」云く、「一朝祖令を權る、誰れか是れ出頭の人。」「賓主還つて向上の事ありや也た無きや。」云く、「向上に將ち來れ。」「如何んが是れ向上の事。」云く、「大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」僧禮拜す。詢云く、「此れは是れ詢上座、三十年の學得底、」と。

㋺堅老は、蓋し頑健にして老年の意ならん、川氣は粗糙なるを云ふ。
㋩質庫裡云々は、前の無盡の評語を踏んで云ひしなり。
㋻質庫云々、貧乏質屋の庫にどうして、此牛を質に取ることが出來樣か。
㋻佛燈は佛鑑に嗣ぐ、鑑は五祖演に嗣ぐ。

開福の㋼寧道者は歙州の人、五祖演に參ず。演其の立作高上、識趣超卓なるを見て、毎に衆に當つて之を譽め、復た堂司に入らしむ。同學のもの之を妬んで、夜寧を引いて山行道話し、因つて之を毆つて其の面目を傷く。衆に赴くこと得ず。演之を聞いて、躬ら往いて省問して曰く、「聞く、汝那の一輩に無禮せらると、何ぞ方丈に至つて屈を雪がざる。老僧の汝が爲に趕逐するを聽せよ。」寧竟に顯すに忍びず、但だ云く、「某自ら㋽喫撲傷損す、他の事に干るにあらず」と。演淚下つて曰く、「吾れ忍力汝に如かず、他日豈汝を奈何せん」と。後開福に出世し、五百衆を容る、將に示寂せんとし、預め日時を定めて坐化す。大法を以て月庵の果に授く、果衆底に陸沈し、人能く識るものなし、唯だ圓悟のみ之を知る。後其の出世を㋾成覩す。頌を以て之を送つて曰く、

㋿「歙山老人末後句。　的々親傳四絕堂。
正令已行風凜々。　斗間劍氣燭天光。」

㋿應庵初め蔣山圜悟の會中に依り、㋷此庵の元と友たり。元處の連雲に住するに及び、㋾華虎丘の隆の會中より來る。初めて到るや、便ち首座た

㋼開福寧の下に月庵果を出し、次で月林觀を出し、法嗣綿々たり。五祖法演禪師は、白靈に嗣ぐ、楊岐下。
㋽撲は仆と同じ、倒るゝを云ふ。
㋾成覩は成就なり。
㋿歙山老人は開福を指す、四絕堂は蓋し月庵の住所。
㋿應庵曇華禪師は虎丘に嗣ぐ。
丘は圓悟に嗣ぐ。
㋷此庵元は圓悟に嗣ぐ、護國に住す、相貌甚だ布袋和尚に似たり、故に人呼んで元布袋と云ふ。
㋾虎丘の隆は、威儀頗る柔易なり、人或は圓悟に問ふ、隆首座、柔なること斯くの如し、能く大法を荷擔せんや否やと。圓悟曰く、憂ふる勿れ、睡虎のみ。
㋿立僧は大衆を成立するの義なり、多く大方の尊宿を請して之に充つ。

らしむ。未だ久しからざるに㋐立僧たらしむ。元の上堂に云く、

㋕「西河に獅子あり、連雲に虎兒を出す。親しく猛虎の窟中より來る、文彩爪牙悉く皆備る。未だ群を驚かすに及ばずと雖も、已に食牛の志あり。楊岐の宗之をして地を掃ふが如くならしむるを痛念し、鐵脊梁を竪起して先師の爲めに氣を出す。諸人還つて識るや、兩眼の大いなることは環の如し、當頭立底是なり。」

と。後妙嚴に出世し、虎丘の爲めに香を燒く。自後住すること十年、其の道㋓妙喜と相抗す。㋒李浩侍郎、師と游ぶこと久し、嘗て師の眞に贊して云く、

「平生波々㋑絜々。纔得ニ箇院子一住便打脫。而今又向ニ幀子上一出來。知他是死是活。」

㋐木庵永禪師は、福州童聖者の小師なり。儒を棄てゝ釋に從ひ、法弟安分なるものと友とし、同じく懶庵の需に洋嶼に參じ、皆大發明あり。因に水寬の頌を作つて云く、

「路繞懸崖萬仞頭。　擔レ泉帶レ月幾時休。

㋕西河の獅子は、慈明圓禪師なり、猛虎の窟中とは虎丘より出で來るを云ふ、此上堂應庵を推賞すること至れり、後秀の後進、法幢を光輝ならしむるは、其人群を拔くによると雖も、又先輩の扶掖によらずんばあらず。

㋓妙喜應庵の道、端平嘉熙の間に盛なり、故に之を端嘉の道と云ふ。

㋒正信居士と號す、應安の法嗣。（宗派）

㋑波々絜々は奔波して休まざるなり、絜々又劫々に作る。脫は蟬脫、幀子は掛軸なり。

㋐木庵永安、福州鼓山に住す、懶庵の法嗣、小師は弟子なり。

㋐箇中撥轉す通天竅とは山の絕頂から寬で水を導くを言ふ、人々道の通天竅あり、能く撥轉するや否や。

㋐箇中撥轉通天竅。　人自安閑水自流。」

妙喜之を見て曰く、「鼎需此の兒あり、楊岐の法道未だ寂寥に至らず」と。後鼓山に住す、江浙の兄弟盡く嶺に入る。松源無用息庵の諸老、皆座下に在り、後泉南に終ふ。

㋔直道者は安州の人、初め妙喜に回雁峰下に參ず。喜問うて曰く、「上座何れの人。」直云く、「安州の人。」喜曰く、「我れ聞く、安州の人は、厮撲を會すと、是なりや否や。」直便ち相撲の勢を作す。喜曰く、「湖南の人魚を喫して、湖北の人㋖鯁を著く。」直、筋斗を打翻して出づ。喜曰く、「誰れか知らん冷灰に、粒豆の爆するあるを。」と、竟に喜を辭して江浙を過ぎ、嘗て三衢の陞式二人と同行をなす。後金陵の保寧に住し、妙喜に嗣ぎ、法道大いに振ふ。因に留守陳丞相俊卿、諸山の茶に會する次、陳、「有句無句は藤の樹に倚るが如し」を擧して、諸山に批判せしむ。諸山皆尖言巧語、以て丞相の意を取る。惟師、最後に頌して曰く、

㋒「張打油。李打油。不レ打ニ渾身一。只打頭。」

丞相大いに喜ぶ、未だ幾くならずして、遷つて㋙蔣山に住す。

㋗或庵體和尚は台州黃巖の人、賦性㋜麤糙、事に遇ふて敢爲なり。受業上下、體亂擾と號す。此庵

㋔一庵善直、大嶌に嗣ぐ。

㋖鯁は魚骨也、湖南の人がさしみを食ふたら、湖北の人に骨がたつとの意なり。

㋒張家の油しめ、李家の油しめ、渾身は全身なり。

㋙蔣山は南京にあり、又鐘山と書し、金陵山とも云ふ。

㋗或庵師體禪師は元布袋に嗣ぐ、圓悟下。

㋜麤糙は麤略穢雜の意、敢爲は向ふみず、亂は亂暴の亂、擾は騷擾なり。

の元に護國に參ず。一日羅漢殿に在つて、庫下に行者を毆つて、大叫一聲するを聞いて、豁然として契悟し、走せて元に見ゆ。元曰く、「這の十一郎、今日病に汗を得るが如し。」未だ幾くならず典客に充つ、後塗田を化せしむ。頌をもつて之を送つて曰く、

ノ「豎亞頂門三隻眼。　放開肘後驗人符。
杖頭殺活無多子。　截海須還大丈夫。」

爾後瞎堂に依り、衆に虎丘に首とし、蘇の覺報に出世して、此庵に嗣ぐ、法道大いに振ふ。後に焦山に遷る、オ郡守曾侍郎仲躬、嘗て道を問ふ。師既に入滅、石硯を以て曾に寄す、曾偈を以て弔して云く、

「翩々隻履逐二西風一。　一物渾無布袋中。
留二下陶ク泓一將底用。　老來無三筆判二虛空一。」

體の辭世に云く、

「鐵樹開レ華。　雄鷄生レ卵。　七十二年。　ヤ搖籃繩斷。」

謂つべし、眞に臨濟の種草なりと。

瞎堂のマ遠、初め婺州の金鱗山に住し、復た建下禪寂の請に赴き、道三衢を過ぐ。時に雪堂の行、烏巨に住す、遠往いてケ法眷を講ず。行興に語つて之を奇とし、且つ遠を留めてフ旬欵す。亟かに

ノ三隻眼は、驪睹首羅の三目なり。
オ蓋し天游の弟。
ク陶泓は硯の異名。
ヤ搖籃は小兒を棲ましめて、繩にて垂る籃なり、「ふご」とも云ふ。
マ遠瞎堂は、圜悟に嗣法す、楊岐下。
ケ法眷、遠と行とは從兄弟なり。
フ旬欵は懇ろに款待するなり。

郡中に往いて、コ超然居士に見えて曰く、「師伯圜悟和尚に晩子エ川遠なるものあり、昨山中に至り、將に建上の請に赴かんとす、惜むらくは、其の居處、山深く地僻なるを。居士能く爲めに郡主に稟し、一院を以て之を留めば可ならんか。」超然卽ち郡主に白し、其れをして子湖の定業禪寺に住せしむ。師請を受けて、衆に示して云く、

テ「甘レ分金鱗困守レ株。　誤二他禪寂一遠招呼。
中途再領二賢侯命一。　定業難レ逃住二子湖一。」

未だ幾くならずして報恩に遷る、時に妙喜ア衡陽に居り、師の名を聞いて、法衣幷に偈を以て寄せて曰く、

「這川驀苴。　無レ眞無レ假。　一條白棒。　佛來也打。
更有二一般長所一。　解下向二鉢盂裡一走馬。」

後諸山に歷住し、詔を奉じて靈隱に居る。

サ密庵傑禪師は閩の人、初め嶺を出でゝ婺州の智者に至り、偶々暄を負ふの次、老宿あり、問うて曰く、「上座此の行何の處に去る。」曰く、「四明の育王に。」シ佛智和尚に見え去る。」老宿云く、「世衰へ道喪し、後生家の行脚、例して耳を帶びて眼を帶びず。」傑曰く、「何の謂ぞや。」老宿云く、「今育王一千ス來の衆、長老日に接陪を逐ふて暇あらず、豈工夫の著實に汝輩の爲めに機を

コ趙郡王令矜、字は表之、超然と號す、圜悟に參じて旨を得たり。（居士分燈）
エ蜀道名は驀遠、四川の人、故に川遠と云ふ。
テ金鱗定業川ひ得て巧なり。
ア衡陽は大惠の遷謫地なり。
サ密庵傑禪師、應庵に嗣法す。
シ佛智和尚、圜悟の法嗣、名は端裕、育王住す。
ス來は程と云ふが如し。

發するあらんや。」傑涙を下して曰く、「若し此くの如くならば、某今何の處に往かん。」宿云く、「此を去つて衢州の明果に㋓華嚴頭あり、後生と雖も見識超卓なり、汝宜しく之を見るべし。」傑、教に依つて明果に往いて華に依る。華の家風入り難し、傑辛苦を憚らず、一日室中に問ふ、「如何なるか是れ正法眼。」傑云く、「甚の㋔破沙盆に直らん。」華再追して云く、「虛空消殞の時如何ん。」傑云く、「著々㋕穎脫。」華云く、「㋖罪は重きに科せず。」華卽ち升堂して衆に告げて云く、「大徹堂前崖崩石裂の句あり」と。傑華に依ることの四年にして、千聖の命脈を窮盡す。母老ゆるをもつて鄉に歸る。華偈を以つて送つて曰く、

「大徹投機句。　當陽廓頂門。
徹詰洞無痕。　雖未付鉢袋。
卻把正法眼。　相從經四歲。
切忌便㋗蹂跟。　喚作破沙盆。
後衢の烏巨に出世し、學者雲擁す。上堂に、　吾有末後句。　氣宇呑乾坤。
「從來不唱㋘脫空歌。　把火燒山拾㋙田螺。　此行將省覲。　待歸要汝遵。」

㋓華嚴頭は「しこな」なり、當時體亂擾とか、烏頭とか、宗日頭とか、一糙とか、如十知とか、酒蟲とか、多く「しこな」を用ふること流行す、嚴頭ばしやく子あたまなり。
㋔破沙盆は、破れすりばちなり。
㋕穎脫、毛遂曰く、士の世に處する、錐の囊中に在るが如く、其末立ろに露はると、是れ穎脫なり。
㋖罪は重きに科せず、既は死罪と定まりし上は、其餘の小罪は數に入れぬなり。
㋗蹂跟とは、尻を落ちつけるを云ふ、鄉里に落付いて、飽暖に甘ずる勿れ。
㋘脫空は、虛空の底拔けなり、脫空歌は、法螺の歌と云ふが如し。
㋙田螺は、田にしなり、山上に田螺を拾ふと。

㋚白骼樹頭魚產子。　急水灘頭鳥作巢。㋛」
皆謂ふ、「明果に在つて夜樵者の歌を聞き、因つて漆桶を打破す」と。蓋し師の密機測るなし、前後七たび大刹に住して、太白に終ふ。應庵の道藉つて若く大いに行る。之を信ず、行脚して人を見るには、固に宜しく眼を帶びて耳を帶ぶるなかるべし。㋜雛脚下に箇の漢ありと雖も、須らく驗過して始めて得べし。院子の大小、衆の多寡を以て、㋝趂慣して時を過すべからず。須らく知るべし、此の事若し志を負はずんば、釋迦老子の肚裡より過ぐと雖も、也た只是れ箇の屎橛、擇ばざるべけんや。

㋞且庵の仁和尙は越の上虞の人、少うして天台の敎を習ふ。初め括蒼より雪堂に隨ひ、衢の烏巨を過ぐ。因に雪堂の普說を見る、曰く、「今の兄弟工夫を做す、正に射を習ふが如し。先づ其の足を安じて從つて其の法を習ふ。後には無心と雖も久習を以ての故に、箭發すれば皆中る。」喝一喝して云く、「卽今箭發するや。看よ看よ。」仁覺えず身倒れ、箭を避くるの勢を作し、豁然として大悟す。夏罷んで、母老ゆるを以て鄉に歸り、雪堂を辭す。堂偈を以て之を送つて曰く、

㋟「儼老昔年窮二事相一。　脫レ履南游扣二宗匠一。　石頭路滑不レ辭レ勤。

㋚白骼樹は、骸骨の木なり。白骨の御樹枝に、魚が卵を產み付けたとなり。
㋛雛分面白き境界を拈じたものじや。
㋜雛根の下に、草をむしつて居ても、直に見透す丈けの眼光なくては、役立たぬ。
㋝趂慣は「なれこ」になつて闇熱を趂ひまはすなり。
㋞佛眼下。
㋟藥山惟儼禪師、博く經論に通じ、嚴に戒律を持す、一日發奮南遊して石頭に參じ、又馬祖に參じ、宗旨を發明す。

腦後一槌曾兩當。ヘ仁禪勁志許ニ誰儻一。訪レ我蒼山白練州。
萬浪千波洶湧處。果然呼喚不レ回レ頭。西山積レ老期ニ同住一。
又說重尋ニ越山路一。歸時應是歲華深一。趙州更有ニ爐頭句一。」

仁、是れより梅山に歸つて、庵すること十六年、後ト天童の覺和尚、隰を出でゝ上虞に至り、夜其の庵に宿し、榻を連ねて與に語つて、大いに之を奇とす。既に歸つて、夏末に首座を請せず、主事覺に白す。覺云く、「我が首座早晩來らん」と。乃ち侍者をして越に往いて仁を邀へしむ。仁纔かに至る、卽ち首座寮に請ず、衆之を訝る。未だ幾くならず、秉拂挂牌せしむ、衆服膺す。後二年にして宏智入滅す、妙喜後事を主り、兩班皆布を衣る。唯仁肯て服を成さず、喜怪んで之を問ふ。仁乃ち密に其の事を啓す。妙喜曰く、「元來是れ雪堂に見え來るや」と。後長蘆に住し、法席大いに振ふ。嘗て臺山婆子の話を頌す、學者爭ふて之を誦す。曰く、

「開ニ箇チ燈心皁角鋪一。日求ニ升合一度ニ朝昏一。
只因ニ霖雨連綿久一。本利一空愁倚レ門」

リ顯謨呂公正己、嘗て道を師に問ふ、既に別れて偈を求む、師筆を援いて贈つて曰く、

「君今親切到ニ長蘆一。ヌ抖擻衣衫一物無。此去逢レ人如借問。

ヘ藥山を以て且庵を呼び起す。
ト天童覺、宏智正覺禪師なり、丹霞の淳に嗣ぐ、曹洞下、宏智初め隰州の長蘆に住し、後天童に住す。
チ燈心皁角鋪は、荒物屋なり、又一說に、「きぐすり」屋。
リ顯謨閣學士呂正己、佛法金湯卷十三に傳あり。

但言風急浪華麤。」

ル白楊順和尙は綿州の人、佛照によること數年、普說に傅大士心王の銘を擧して、「水中の鹽味、色裡の膠青、決定して是れ有なるも、其の形を見ず」と曰ふに因つて、豁然として省あり。次の日入室す。照問ふ、「眞佛住して甚麼にかある。」順曰く、「住して不定の處にあり。」照曰く、「既に是れ眞佛、甚によつて不定なる。」順曰く、「若し定ならば、卽ち眞佛にあらず。」照之を肯ふ。後に臨川に居し、其の道大いに振ふ。上堂に曰く、「犬は黃昏の月に吠え、風は夜の燈を吹く。屋頭の猫は鼠を捕へ、世上の道は僧を嫌ふ。

ヲ嘉苴は人の怪を招き、孤高は世を擧げて憎む。山林眞實の處、凡そ事百無能、任他霜雪の眉稜に上るを。」又曰く、「水は溪邊の石を洗ひ、風は古殿の旛を吹く。斯に於て落處を知らば、必ず靈山に在るべし、」と。

ワ月庵果和尙は信州鉛山の人、初め寧道者に見ゆ。寧問うて曰く、「上座の鄕里。」曰く、「信州。」「受業は甚麼の處ぞ。」曰く、「鉛山の七寶。」寧曰く、「還つて寶を帶得し來るや。」果兩手を展ぶ。寧聲を震して一喝す。便ち下つて參堂す。後に死心に見ゆ、心、雲門話墮の話を擧して、深く法源に徹

ヌ抖擻は「ふるひたてる」と云ふ程なり、精神を抖擻するとか身體を抖擻して、妖法を現出すなど用ふる場合もあり、大體抖擻は、「うん」と下腹に力を入れて、氣分を蘇新にするを云ふ。
ル白楊順は、佛眼清遠禪師に嗣法す、此の處にて佛照とせるは誤れり。佛照諱は德光、大惠の法嗣なり、綿州魏城文子の子、七八歲の時、暗夜に物を見ること白晝の如し、父母之を異とし、出家せしむ云々。（僧寶正續傳卷四）
ヲ白楊は川の人、故に嘉苴の語あり、師性骨鯁にして苟も俗に徇はず、故に孤高は世を擧げて憎むの語あり。
ワ月庵諸方に遍參して、應庵に參じ、死心に參じ、各々發明あり、天下其師承を疑著す、出世に及び、遂に開祖の道寧

す。然れども開福を忘れず、後室中に此の話を擧し、頌を以て學者に示す。

叢林盛に誦す。曰く、

㋕「萬仞龍門勢倚レ空。　懸崖撒レ手辨二魚龍一。
㋖時人只看二絲綸上一。　不レ見二蘆華對二蓼紅一。」

㋗谷山の旦、初め佛性泰和尚に參ず。一日上堂に擧す、「趙州云く、臺山の婆子、已に諸人の爲めに勘破し了んぬと、意作麽生。」良久して云く、「樹に㋘就いて黃葉を撮み將ち去り、山に入つて白雲を推出し來る」と。旦言下に釋然たり。次の日入室す、泰問ふ、「前百丈は不落因果、甚麽によつて野狐身に墮す。後百丈は不昧因果、甚によつて野狐身を脫す。」旦曰く、「好し共に一坑に埋却せん。」泰之を徵するに語皆凡ならず、未だ幾くならずして立僧たらしめ、名一時を動かす。㋙妙喜南行のとき、旦、頌を呈して云く、

㋚「異類中行世莫レ猜。　故敎二佛日暫雲霾一。
　度生悲願還無レ倦。　方作南安再出來。」

妙喜之を賞す。

㋛懶庵の需和尚、佛心の才に依る。才の大乘に居るや、需已に首衆挂牌、常に學者に卽心卽佛の因

に嗣ぐ、此章以て其來由を知るべきなり。

㋕萬仞龍門は、懸崖萬仞の龍門の瀑なり、蓋し震聲一喝の處を頌す。

㋖時人云々、時人は予が諸方に遍參するの跡を見て別に開福に於て、靈犀一點の通ずるあるを見ずと。

㋗谷山淸旦禪師は佛性に嗣ぐ、佛性は圜悟に嗣ぐ。

㋘秋至れば葉自ら落ち、雲無心にして岫を出づ、そこを撮みもち去り、推し出すと頌してある。

㋙妙喜は旦の法叔なり、南行は衡陽の厄なり。

㋚洞下の商量に異類墮あり、此偈は送偈三首中の第三なり。

㋛懶庵は、大惠に嗣法す、名は鼎需。才は靈源の法嗣なり。

緣を問ふ。時に妙喜洋嶼に庵す。需の友㋜光狀元と號するもの、需に與ふる書に云く、「庵主の手段は諸方と別なり、此に來つて㋝少款すべし」と。需咲つて答へず、光計を以て師を邀へて飯す、需往いて之に赴く、門に及んで妙喜の開室に會ふ。需衆に隨ふ、喜問うて曰く、「僧馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛、祖曰く、卽心卽佛と、作麽生。」需下語す、喜之を詬つて曰く、「汝の見解此の如くにして、敢て妄に人の師となるや。」とて鼓を鳴して㋞普請して、其の平生得力するところの處を揭げしめ、邪解を排撝す。需淚顚に交はり、敢て仰ぎ見ず。默して計つて曰へらく、「我の所得は旣に㋟排撝せらる、西來不傳の旨、豈止だ此くの如きのみならんや」と。遂に弟子の列に歸心す。一日喜問うて曰く、「內放出せず、外放入せず、正恁麽の時如何ん。」需答へんと擬す、喜竹篦を拈じて㋠劈脊に連打すること數下、需豁然大悟して曰く、「和尙已に多了せり。」喜又打つこと一下す、需作禮す。喜咲つて曰く、「今日方に知らん、汝を欺かざるを」と。遂に偈を以て印して曰く、

「身心一如。　身外無餘。　咄這瞎驢。　付二與鼎需一。」

是れより名、叢林に振ひ、出世して泉の延福に住し、西禪に遷る。嘗て衆に示して云く、「太虛に劍を挂

㋜晦庵獨光禪師は洋嶼發明十三人の一なり、見地超邁なるを以て、大惠之を禪狀元と賞す。

㋝少款の欵は欵晤の欵ならん。

㋞普請は、多く作務を云へど一概にあらず、此處は大衆を集むるを云ふ。

㋟排撝は、はらひのけ、ふるひおとすなり、撝は易に撝謙の文字あり。

㋠劈脊、劈面、劈耳、劈背等と用ふ、劈は「つんざく」の訓あれども、多くはげしき場合にのみ用ふ、手當り次第にぶんなぐるなり。

㋡勍敵、多く生死を勍敵とす、此等の處は勍敵の儀でよき樣なり。

けて用て吾が宗を顯す。據坐の禪威如何んが近傍せん。縱へ地回天轉、電卷星飛底の手段を具するも、要且つ㋑勍敵に堪へず。而今休咎を別つ底有るなきや、出で來つて相見せよ。稍遲回に渉らば、一槌して直に粉碎せしめん。」喝一喝して下座。又至節、衆に示して云く、「二十五日以前は羣陰消伏して泥龍戸を閉づ。二十五日已後は一陽來復して鐵樹花を開く。正當二十五日、塵中の醉客は驢に騎り馬に騎り、前街後巷、遞に相慶賀す。物外の閑人は衲被頭を蒙ふて爐を圍んで打坐す。風蕭々たり、雨蕭々たり、冷湫々たり。誰れか儞が張先生李道子胡達磨をか管せん。」又衆に示して云く、「横さまに鏌鋣を按ずるも虚しく意氣を張る、碧落を穿開するも徒に精神を費す。直饒神鋒を動かさずして、坐ながら太平を致すも、堯舜の君は猶ほ㋒化の在るあり。」

紹興の間一仕官あり、㋓焦山に至つて風月亭に題して曰く、

「風來ニ松頂一清難レ立。　月到ニ波心一淡欲レ沈。　會ニ得松風元物外一。
始知江月似ニ吾心一。」

前後觀るもの稱賞せざるなし。唯月庵果、行脚して此に到り、之れを觀て曰く、「詩の好きことは則ち好し、只是れ眼目なし。」同坐のもの曰く、「那裡か是れ眼目なき。」果曰く、「小僧、伊が爲に兩字を改めて則ち眼目を見さん。」同坐曰く、「甚の字をか改めん。」果曰く、「何ぞ㋔『會ニ得松風非ニ物外一。始知江月則吾心』と道はざる。」と、坐者大いに服す。之を信ず、工夫を倣して眼開く底の人は、見所自ら別なるを。況や月庵は平昔曾て詩を習はざるも、而も能く點化此くの如し。豈に龍王一滴水を得て、能く雲を興し霧を起すものにあらずや。兄弟家、行脚は當に衣單下本分の事を辨ずべし、外字を攻むるにあらず、久々に眼開かば、自然に諸佛の眼睛を點出せん、況んや世間の文字をや。

㋕宏智禪師圓通に住する時、夜夢に一聯を作つて云ふ、

「松徑蕭森窈窕門。　到時微月正黄昏。」

是れより數年、杳として此を省せず。㋖建炎の間、虜を避けて一笠東浙を過ぎ、天童に抵る。適々主者席を退く、師舟中より曉を破つて山に入る、恰も是れ天明の時節、松逕蕭森として、月烟靄を蒙るを見て、忽ち向來夢中の句を省す。旦過に歸するに及び、名字を言はずと雖も、而も兄弟已に識るものあり、曰く、「此れ乃ち長蘆の長老なり、胡爲れぞ此に至れるや」と。密に主事に報ず、主事則ち使府に申す。府喜んで自ら勝へず。蓋し夜夢に神人報じ云ふ、「天童の主人は乃ち隰州の古佛なり」と。則ち帖を出し官を差し、旦過に至つて之を請す、師堅く肯はず、乃ち旦過の兄弟に硬舁せられて

㋒化、天下を治むること五十年、天下治るか、治まざるかを知らず、億兆己を戴くを願ふか、己を戴くを願はざるかを知らず、此に於て無爲の化を得たり、然れども未だ化と云ふものがあると、宗旨を擧せる也。

㋓焦山は鎭江にあり、後漢の焦先此に隱る故に焦山と呼ぶ、金山と相隔たること十五里、二山相並ぶ。

㋔是は居士の作に、一轉語を下せし迄なり、月庵の轉語によつて、居士の作を廢せば便ち不可なり、譯者の見地を以てせば、會得とか始知とかの文字は改めたき文字と思惟す。

㋕宏智前出、洞山良价、雲居道膺、同安丕、同安志大陽警延、投子義青、芙蓉道楷、丹霞子淳、宏智正覺、世系斯の如し。

㋖建炎は南宋高宗の年號、北宋末より南宋に亘りて、金虜の亂あり。

方丈に歸す。一住三十年、洞上の宗玆によつて大いに振ふ。信に人の住院緣法は自ら定まり、初より苟くも求むべきに在らざるなり。

㋐圓極の岑和尚は台の仙居の人、抱節孤高なること、近世及ぶもの罕なり。久しく雲居の如和尚に依り、書司に在ること十七載なり。如遷寂せし、かば、一錫浙に回り、㋑正堂の辨に道場に依る。未だ幾くならず、座元を董さしめ、雪の卞山に出世す。乃ち㋒石林先生易を講せし地なり。辨は此の一瓣香を具して㋓爲めに拈出せんと意へり。而も岑竟に雲居の如に嗣ぐ、叢林多く之を高しとす。後大刹を歷董す。然れども福緣㋔蹭蹬、涉世多艱なり。岑終に意に介せず、平生施利未だ嘗て眼を經せず。後常の華藏道場に退いて終ふ。語錄二十卷あり、世に行はる。㋕侍郎曾公仲躬、爲に其の首に序す。岑、長蘆の且庵を贊するあり、一の贊に云く、

「夜半推二出日輪一。天明把二住㋖桂轂一。拈二將四部洲一。放二在一粒粟一。奏二無絃而非二履霜之樂一。唱二胡歌一而非二白雪之曲一。大冶鍛二絕鑛之金一。痛鎚二碎無瑕之珠一。東湖赤梢鯉魚。生二出金毛鐵犢一。」

㋐圓極彥岑禪師は、雲居の法如禪師に嗣ぐ、如は佛眼遠禪師に嗣ぐ、續傳燈卷三十三に傳あり。

㋑正堂明辨禪師亦佛眼に嗣ぐ、安吉州の人、傳は續傳燈二十九に出づ。

㋒葉夢得、石林と號す、官は尙書左丞に到る、今の葉德輝の先祖なり。

㋓爲は自分の爲めになり。

㋔蹭蹬は、不仕合の意なり、處によつて失勢と訓じ、又失道と訓ず、字義は、山路の嶮艱を蹭蹬と云ふなり。

㋕曾公仲躬は、曾天游の弟、曾文清公ならん。

㋖桂轂は月なり、日輪に對して轂と云ふ。

㋗混源の密和尚、紫籜に住す。上堂に云ふ、「雲山漠々たり、喬木森陰たり、古屋耿々たり、叢林閑寂たり。混源此に荆棘を栽ゑ、蒺藜を布き、硬塞を箚す。誰れか敢て正眼に覷著せん。忽ち箇の漢あつて、這裡に向つて身を轉じ得、氣を吐き得ば、醡茶三五椀、意は鑊頭邊にあり。其れ或は未だ然らずんば、㋘青尖路險にして空碧を瞰す。謂ふなかれ公々に道ひ來らず」と。又曰く、「春日暖にして黃鶯鳴く、更に聽く斷崖流水の聲、春山翠を疊んで款く步みを作す。歸來烟島誰と與にか爭はん。且く歸來の一句作麼生か擧せん。肱を曲げて拳を枕となし、臥して聽く夕陽の鐘。」と。

㋙富鄭公弼、㋚投子の顒禪師に參じて弟子の禮を盡す。謹厚なること初學のものゝ如し。後に㋛張比部隱之の勢位をもつて袴子を陵ぐに因つて、公乃ち之に書を與へて曰く、「禪家者流、凡そ事を說いて枝蔓徑捷ならざる者を見て、之を葛藤と謂つて往々に鄙誚す。遂に㋜葛藤の歌を著して集中に載す。弼因つて嘗て其の所以を思ふ。今試に隱之と商確せん、知らず如何ん、大抵俗士と僧人とは性識始めより纖毫の差別なけれども、其の事蹟は甚だ用て同じからざる處あり。且つ僧人は幼より出家し、早より以て看經日久しく、聞見は皆是

㋗混源密は、晦庵光狀元に嗣ぐ、大慧下。

㋘耿々は微光なり、蒺藜は菱なり、醡茶は玉露の出花、青尖は山の絕頂。

㋙富弼字は彥國、河南の人、慶曆中、資政殿の學士に除せられ、神宗に相として鄭國公に封ぜらる。

㋚投子の顒は、圓照本に嗣ぐ、本は天衣懷に嗣ぐ、懷は雪竇顯に嗣ぐ、雲門宗。

㋛張比部隱之は、富弼と同鄕の人、又投子の顒に參ず、(佛法金湯錄卷十二)。比部は六部の一にして、刑部と同じ。

㋜葛藤の歌云々、此處原書或は脫字あらん。

が佛事のみ。剃髮の後、伴を結んで行脚するに及び、到らんと要する處便ち到り、參禪問道の外、衆に群して見聞㊁博約なり。又後耳目に限りなし、薫蒸既に熟し、忽ち一明眼の人の摘撥に遇ふて、立どころに便ち箇の見處あり。卻つて前後凡そ見聞する所を將つて自ら證據を行ふ、豈明白暢快なる者にあらずや。吾が輩俗士は、幼少より俗事の爲に浸漬せられ、長大に及んで又妻を娶り子を養ひ、衣食を經營し仕官に奔走す。黄卷赤軸は未だ嘗て手に入らず、間に乘じて翫閲すと雖も、只是れ㊃談柄に資するのみ、何ぞ嘗て其の理を徹究せん。且つ士農工商は各々業資の爲めに纏縛せられ、禪林法席あることを知つて、假使去つて參問せんと欲すとも、何によつて去り得ん。何れの處に更に伴を結んで遊山し、參禪問道、及び衆中博約の多きことあらんや。萬一明眼の人あるも、事によつて遭際し、且つ一味の工夫なし。聞く所能く多少かある、得る所能く幾何かある。復た之を問うて見るところ聞くところ、自ら證據を作すなし。更に廣く採討を行ひ、深く鑽仰を加へず、才かに一言半句を得て殊に未だ明了ならざるに、便ち乃ち目は雲漢を視、㊄鼻孔は天に遼り、自ら謂らく我れ超佛越祖、千聖齊しく下風に立つと。佛經禪冊都て一顧せず、以て葛藤の誚を避くと。弼が愚見は深く未だ然らざるを恐るゝなり。弼學ばずんば則ち已む、若し身心を辨ずるを

㊁博約とは要を得て廣博の意ならん、或は約字連續の字とするも可なり。
㊃摘撥は拶著なり、浸漬はひたしもの、つけものなり、黄卷赤軸は經文なり、談柄は法囃のたれなり。
㊄一味は專一なり、鑽仰は鍛錬なり、目は雲漢を視は高視濶歩なり、鼻孔天に遼るは鼻息荒きなり、此等の處解を用ひざるも分明なり、暫く蛇足を添へて、白を塞ぐのみ。

以て之を學ばば、須らく是れ周旋委曲、深鈎遠索、透頂透底、徹骨徹髓なるべし。一切現成、光明潔淨にして、一點塵計りの凝翳をも絶せば、方に敢て隱之に下らん。隱之此の一事は是れ小々にあらず、直に無始以來生死の根本を脱卻して、生死を管する底の閻羅老子と抵敵をなして、始めて得んことを要す。人の閑言長語を取つて以て參學に當て、便ち自ら瞞じ去るべからず、祝々、弼啓上す。比部執事。」

㊀艸堂清禪師晦堂に見えて所得あり、後遍く江湖に游び、歸りて廬山に居り、去つて㊁眞淨に泐潭に見ゆ。淨問ふ、「甚麼の處より來る。」清曰く、「下江。」淨曰く、「什麼を將ち得來る。」清曰く、「和尚什麼をか要す。」淨曰く、「一切盡く要す。」清乃ち坐具を提起す。淨曰く、「閑家具。」清曰く、「急切底を要すること莫きや。」淨曰く、「試みに拈出せよ、見ん。」清㊂摑することを一坐具して便ち行る、淨大いに之を駭く。後黄龍に出世す、上堂に曰く、「昨日は林間に野客となり、今朝は堂上住持の人、放開捏聚は都て我による。萬象の中獨露身。」と。越えて明年卽ち院事を退き、茆を寺の東隅に結ぶ、久しうして再住す。上堂に云く、「茅堂に掩息して六冬を過ぐ、心忘境寂にして萬緣空し、知らず定業は何れより起る、舊きに依つて祖宗を繼がしむ」と。後曹山疎山に居り、泐潭に居るに殆んで、已に八十三なり、諸方㊃麗鴻絶物の士皆之に歸す。

㊀艸堂善清禪師、晦堂に嗣ぐ、堂は黄龍に嗣ぐ。
㊁眞淨克文禪師亦黄龍に嗣ぐ。
㊂摑は擊なり、掃なり。
㊃麗鴻は孝經援神經に出でゝ、物の未だきざさざる以前を云ふ、今は見地超絶の意に用ふ、絶物は孟子にも出で、拘束を受けざるの意。

㋕慈航の朴禪師は閩の人なり、稟質脩黑、狀應眞の如し、無示の諶に嗣ぐ。初め明の廬山に住し、育王に遷る。未だ幾くならざるに、有力者に移されて海下の萬壽に居る。應庵天童に歸寂せし時、太守其の風を聞いて、朴に命じて席を繼がしむ。是の夜太白の耆宿皆夢む、鐵羅漢あり、舟中より方丈に歸すと。同衣の者あり、一啓を上つて曰く、「昔㋖鄧峯を去つて身は一葉よりも輕く、我れに覩顏なし。今長庚に上つて道は三山よりも重く、人々喜色あり。快く佛髻を離れて、鯨波を涉るに利し、幽谷を出でゝ喬木に遷り、此の道を光にせよ。東山に登つて魯邦を小にす。允なるかな其の時、此より以還、未だ措くところを知らず」と。一住二十二年皇子魏王幷に史魏公、皆其の道德を重んず。淳熙の初め、孝宗皇帝親しく太白名山の四字を書して以て錫ふ。朴廬山に住せしとき、上堂あり、云く、「德山門に入れば便ち棒す、臨濟門に入れば便ち喝す。德山の棒頭に耳聾し、臨濟の喝下に眼瞎す。然く㋗一搦一擡と雖も、中に就いて全生全殺す。」遂に喝一喝、卓拄杖一下。「敢て諸人に問ふ、是れ生か是れ殺か。」良久して云く、㋘「君子可八。」

㋙深己庵は永和の人、妙癡禪に嗣ぐ。嘗て頌あり、之を送つて曰く、

㋕慈航朴は無示介諶に嗣ぐ、諶は長靈卓に嗣ぐ、卓は靈源惟清に嗣ぐ、黃龍派。

㋖鄧峯は育王、長庚は太白即ち天童、佛髻は萬壽。

㋗搦は抑下なり、擡は托上なり。

㋘君子可八、君子は仁義禮智忠信孝悌の八德を能くするの意、之に對して、烏龜忘八の語あり、馬鹿ものと云ふ心なり、此處、下手に繪ときすれば、生殺に墮す。

㋙深己庵は癡禪元妙に嗣ぐ、妙は寂室惠光に嗣ぐ、光は慈受深に嗣ぐ、深は淨照信に嗣ぐ、信は圓照本に嗣ぐ、雲門宗。

「送レ君還憶深師叔。　兩眼依然聽㋚轆轤。」

後に溫州の、報恩に住す。冬至の小參あり、云く、

「一二三四五。　五四三二一。　寒風劈面來。

籬頭吹ニ鬻栗一。」

と、下座、余時に旦過の中に在つて、其の擧揚を聞いて、便ち其の雲門向上の旨を得ることを知る、惜むらくは人の之を嗣續するなきを。韶陽の道、遂に此の人に湮沒す。

㋛月堂昌和尙は妙湛に嗣ぐ、孤風嚴冷、學者其の門を得て入るもの罕なり。名刹を歷董し、後南山の淨慈に終ふ。㋜智門祚禪師の法衣、傳下して七世、昌既に沒して則ち人の擔荷すべきなし。遂に㋝擔頭を留めて交割す、今に現存す。故に瞎堂の遠、爲に起龕をなし、「三十載、龍を羅し鳳を打し、勞して功なし。佛祖の慧命は㋞塗足油の如く、雲門の正宗は折襪線の如し」の句あり、嗚呼悲しまざるべけんや。

龜山の光和尙、妙喜に㋟洋嶼に參ずる時、凡そ半年口を啓くの處なし。一日入室、喜問うて、「喫粥了也。洗鉢盂了也。㋠藥忌を去却して一句を道

㋚轆轤は、井戸のつきもの、深の字を蹈む。

㋛月堂昌、佛行禪師と謚す、思慧妙湛に嗣ぐ、湛は大通禪師善本に嗣ぐ、本は圓照に嗣ぐ、雲門宗。

㋜智門光祚禪師は、香林澄遠の法嗣、雲門の孫也。

㋝擔頭云々、法衣の傳授を止めて、之を什器中に交割せしなり。

㋞塗足油は、四十二章經に、阿耨池を見ること塗足油の如しとあり、折襪線は、襪子の飾り糸にて能くきれるもの。

㋟洋嶼は泉州にあり、山四もに圍んで、內に田疇數百頃あり、此嶼其內に突出す、山頂に蠣殼あり(一統志)、大惠衡陽に赴く時、暫く此に寓す。

㋠藥忌は此處「食ひあはせ」と云ふが如し。

將し來れ。」光曰く、「裂破。」喜色を壯にして曰く、「又者裡に來つて禪を說くや。」と、師言下に於て大悟し、遍體汗下り、遂に禮拜す。喜偈を以て印して曰く、

「龜毛拈得咲哈哈。　一擊萬重關鎖開。
孰云千里ㇾ賺ㇾ吾來。　慶ニ快平生一是今日。」

光、投機の頌を作つて云く、

「當機一拶怒雷吼。　驚ニ起法身一藏ニ北斗一。
洪波浩渺浪滔天。　拈ニ得鼻孔一失ニ卻口一。」

喜、之を見て曰く、「此れ正に是れ禪中の狀元なり」と。因つて號して光狀元となす。

㋐自得暉和尙、㋐長蘆祖照の席下にあり、時に㋔一窩蜂發す、衆皆散じ去る、唯だ師と㋓宗白頭なるものと動かず、私かに謂つて曰く、「參禪は本生死に敵せんが爲なり、豈此の難によつて便ち逃避すべけんや。況んや我が色身又弱し、若し中路に至るも、也た則ち他の手に落ちん」と。賊既に至り、衆僧俱に散じ、唯だ暉のみ堂中に在つて坐禪するを見て、箭ふて箭を以て之を射る。俱に中らず、暉寂然として動かず、末後の一箭袖より㋒函櫃を射透す。暉方に驚覺す、此に因つて頭病となる。宗白頭は庫司に坐す、賊見て遂に之を縛し、射殺せんと欲す。傍に直歳の僧あり、再三近前して賊に白して代らんことを乞ふ。賊曰く、「汝は是れ他と何の眷屬ぞ。」僧曰く、「此の僧已に禪に參得し了れり。他時出で來つて大善知識となつて衆生を敎化すべし、我れは未だ曾て參得せず、便ち死するも緊要なし、故に之に代らんと乞ふのみ。」賊其の言を奇とし、二人俱に許す。後に宗明の㋑翠巖に居り、其の道大いに振ふ。向に命に代るところの者亦座下に來る。宗常に謂つて曰く、「此れ乃ち再生の父母なり」と、之を信ず。參禪若し正因を具せば、般若豈驗なからんや。

㋐自得暉和尙は建寧の人なり、初め京師に之き、圜悟に謁す、省發するところなし。後妙喜に泉南に隨ふ。喜徑山を領ず、謙亦侍し行く。未だ幾くならざるに長沙に往いて紫巖居士張魏公の㋒書を通ぜしむ。謙自ら惟ふて曰く、「我れ參禪すること二十年、迥として入處なし、更に此の行を作す、決定して荒廢せん、意行く無きを欲す。」と、友人㋓竹原庵主宗元なるもの、乃ち責めて曰く、「不可なり、路に在つて參禪し得ざらんや、吾れ汝と與に往かん」と。謙已むを得ずして往く。路に在つて泣いて元に謂つて曰く、「我れ一生參禪殊に得力の處なし、今又途路に奔走す、如何んぞ相應し去るを得んや。」元之に告げて曰く、「但だ諸方に參得する底、悟得する底、圜悟妙喜の汝が爲めに說得する底を將つて、都て理會するを要せざれ。途中にて替るべき底の事は、我れ盡く儞に替り得ん、只五件の事あり、汝

㋑宗、普照、善權、翠岩、雪竇等に住す。（續燈）
㋒張浚に與ふるの書を持參せしむるなり。
㋓竹原の傳は續傳燈卷卅一に載す、大惠の法嗣なり。

㋔都から千里の遠方迄、おれをだまして、連れて來たとは誰れが言ふ。
㋐自得暉は、天童覺に嗣ぐ、雲門宗。
㋐長蘆祖照は、法雲善本の嗣法なり、又雲門下。
㋔一窩は寇賊なり。
㋓宗白頭、名は嗣宗、亦天童覺に嗣ぐ。（續傳燈卷廿四）
㋒函櫃は單箱ならん。

に替り得ず、儞自家に祇當せよ。」謙曰く、「甚の五件の事ぞ、願くは其の說を聞かん。」元曰く、「著衣喫飯屙屎送尿と、箇の死屍を拖いて路上に行くとなり。」謙言下に於て大悟す。覺えず手舞足蹈して曰く、「兄にあらずんば某甲如何して此の田地を得んや。」元乃ち曰く、「汝這回方に紫巖の書を通ずべし、吾れは當に回るべし」と。元卽ち建上に歸る。謙、長沙に到つて留まること半載、❶秦國夫人亦師に因つて大事を打發す、乃ち雙徑に還る。妙喜杖を策いて門に倚つて待ち、謙を一見して曰く、「建州子、這回別にし了れり、只管に老僧を怨むも、自ら是れ儞が時節未だ到らざるなり」と。是に於て日に玄奧を益す。後玄沙に出世す。示衆に云く、「竺土❷大仙の心、東西密に相付す、如何が是れ密付底の心。」良久して云く、「八月秋何れの處か熱せん。」又云く、「佛と說き法と說く、誰れか盲聾を惑はす。性を論じ心を論ず、自ら穽陷に投ず。棒を行じ喝を行ずるは、勢に倚つて人を欺く。瞬目揚眉は、野狐の精魅なり。總に不與麼なるも、大いに聲を揚げて響を止むるに似たり。別に奇特あるも、也た是れ空を望んで啓告するなり。畢竟如何ん、白雲盡くる處是れ青山、行人更に青山の外に在り。」

❸辨正堂は佛照に嗣ぐ、初め道價振はず、蓋し初機渠れを識ること罕なり。家風聲令、衆皆之を畏憚す。凡そ供に遇ふの日、但だ❹挂牌すること一次なり。主事之を白す、辨曰く、❺「我れ已に挂牌し了んぬ、如何ぞ又虛しく常住を費さんや。」❻金剛圈、栗棘蓬すら、且又呑透するを會せず、恰も家常飯を要するや。」主事敢て進語せず。後因に達磨を贊して云く、

❼「昇元殿前慷慨。　洛陽峰畔乖張。
皮髓傳成二話霸一。　隻履無レ處二埋藏一。
咦。
不二是一番寒徹レ骨。爭得梅花撲レ鼻香。」

雪堂、見て之を奇とす、曰く、「先師猶ほ此の人の在るあり、只此の贊を消して、以て天下の人の舌頭を坐斷すべし」と。是れによつて衲僧競うて奔湊す。後、霅の道場山に居り、衆五百に滿つ。

❽竹原庵主は建寧の人なり、出でて妙喜に參ず、旨を得るの後、竟に❾桑梓に歸り、茆を結んで韜晦す。諸方より累に請ずれども出でず。嘗て垂語して云く、「諸方の爲人は、皆是れ釘と拔き、橛と拔き、粘を解き、縛を去る。我が這裡の爲人は、一味に釘と添へ、橛と添へ、粘を加へ、縛を加へ、深潭裡に送向して儞をして自ら理會せしむ。」と、又曰く、「參禪は這の一著子に透徹して始めて得べ

❶秦國夫人姓は計氏、名は法眞、魏國公張浚の母なり、性嚴毅にして、子を敎ふるに法あり、謙至るとき、魏公謂つて曰く、老母修行四十年、只此一着を欠く、且く留つて早晚に道話せよと、謙爲めに狗子佛性の話を以して、遂に省發す。（善女人傳卷上抄出）
❷竺土大仙は釋尊なり。
❸正堂明辨禪師は、佛眼遠の法嗣。

❹入室陞座の牌を挂くるなり。
❺我已に挂牌し了れりは、已に百味の飲食を供養せり。
❻金剛圈は鐵丸と見てよし、栗棘蓬は栗の「いが」なり。
❼梁武の昇元殿前にて羞恥し、洛陽嵩山にて威張る。乖張は正反の文字なれども、此處は張の字を偏用せるが如し。
❽竹原の傳は會元并に建州廣釋錄卷上に出づ。
❾桑梓は詩經の語、故鄉なり。
❿脚跟下の紅線、男女の婚姻は、天仙赤繩の纏縛にて定まる、之を脚跟下の紅線と云ふ。

し。大法を悟り了つて明かならざるもの固に之れあり。大法明かなりと雖も㋐脚跟下の紅線不斷なるもの、比々皆是れなり。諸方恁麼に道ふを聞いて、盡く老僧を罵つて云ふ、『既に是れ大法明了す、又安んぞ脚跟紅線不斷なるを得んや』と。他を怪み得ず、渠が這の一解を欠くことあるが爲めなり。儘敎他の疑着するを。」又曰く、「者の一些子、恰も人を殺すの漢に撞着するが如くに相似たり。儞若し他を殺さずんば、他便ち儞を殺さん。奇なるかな、大丈夫の見解、此くの如きなり。」と。

水庵一和尚は婺の東陽の人、外行㋐犇糙なり、叢林之を一糙と謂ふ。月庵の果に參ず。果嘗て雲門の話墮を參せしむ。之を詰る、一日下語して云く、「靈山受記須是和尚始得。」と、又嘗て頌して曰く、

「二八佳人美態嬌。繡衣輕整暗香飄。
偸身華圃徐々立。引得黃鶯一下柳條。」

月庵之を奇とす、後同列と和せず、人の暗計之を擠するに遭ふ。月庵其の言を信じ、院を擯出す。行くに臨み、偈を書して之を譏つて曰く、

㋑「稽首月庵藏裡佛。黃金妙相實堪觀。
白面夜叉七八箇。推轉如珠走玉盤。」

後、台の慈雲に出世し、㋒佛智の嗣となる、蓋し㋓參政錢公の請に從ふなり。錢公は佛智に於て俗門の弟昆たり。然れども叢林の中亦之を短るものあり。室中常に「西天の胡子甚によつて髭鬚無き。」の話を以て學者を驗す。

㋐如無明は三衢の人、雲蓋の智に參じ、汾陽の十智同眞の話を悟る。凡そ禪を說けば、便ち十智同眞を說く、叢林號して如十智と爲す。後道場に住す、水庵圓極皆之に依る。故に圓極嘗て之を贊して曰く、

「生鐵面皮難湊泊。等閑擧步動乾坤。
戲拈十智同眞話。不負黃龍嫡骨孫。」

後に思溪の圓覺に終ふ。其の塔存す。

西禪の淨此庵、妙喜に參じ、大發明あり、宗眼明白なり。嘗て衆に示して云く、「善く鬪ふ者は其の首を顧みず、善く戰ふ者は必ず其の功を得、其の功既に獲ば、坐ながら太平を致す、太平既に致さば、枕を高うして憂なし。三尺の劍を拈ずるを罷め、一帳の弓を弄するを休め、㋒馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つ。風時を以てし、雨時を以て す。漁人は歌ひ、樵人は舞ふ。然も與麼なりと雖も、堯舜の君は猶ほ化の在るあり。爭でか似かん、乾坤收不得、堯舜名を知らず、渾家興亡の事に管せず。偏に雲に和して洞庭を占むることを解せんには。」と。又曰く、「口を閉却して時々に說き、舌を截斷して間歇無し。最奇絕眼中の屑、既に是れ奇絕、

㋐如無明、水庵、圓極、皆前出、雲蓋智は白雲端和尚に嗣ぐ。
㋒周の武王、殷に克つて凱旋し、馬を華山の南に歸し、牛を桃林の野に放つ、天下既に太平復た之を用ひざるなり。（書經）

㋐犇糙は粟心粗雜なるを云ふ。
㋑是非はさて置き、痛快の詩なり。
㋒佛智端裕禪師は、圓悟に嗣ぐ。
㋓錢端禮字は處和、松聽と號す、仕へて參政に至る、嘗て護國の元に參ず。（居士分燈卷下）

什麼として眼中の屑となる。屑々々の時了すべきなく、玄々々の處亦須らく呵すべし。」

顏卍庵は川の人、久しく圜悟に參ず。一日古今を商確す、師每に㋓仁に當つて讓らず、悟喝して曰く、「汝參禪して正悟を求めず、只管に口に信せて亂道す」と。顏覺えず汗下り、堂に歸りて坐禪し、旦に徹して寐ねず、忽然猛省し、走つて圜悟に見え、議論鋒發、略礙滯なし、悟卽ち點頭す。顏曰く、「作日も亦是くの如く祇對す、和尙甚として肯はざる、今日も亦是くの如し、又卻つて點頭す。」悟叱して曰く、「癡漢、汝昨日は雜忘想の心なり。」顏作禮して云く、㋔「元來釋迦老子神通なきなり」と。悟蜀に歸つて後、妙喜に依つて向上の巴鼻を徹證し、衆に徑山に首たり、名叢林に播く。後に卞山に出世し、次に東林に居る。嘗て衆に示して云く、「祖師の巴鼻、列聖の鉗鎚、耕夫の牛を駈り、飢人の食を奪ふ。眈々たる虎視、凜々たる全威、㋕商君の法の如く、孫武の令の如し。犯すあれば死あり、久しく沙場に戰ひ、七四の機を具し、風を望んで勝を決し、進退存亡を知るものゝ、聊か一線を通ずるを徐非す。若し是れ己眼未だ開かず、蝦を以て目となす者、只管に隊を趂ふて飯を喫せば、自在の分無けん。如今定奪底の衲僧あるなしや。山僧が性命盡く諸人の手裡にあり。」又曰く、「法に定相なし、物に遇ふて斯に形る。事に固必なし、

㋓仁に當つて師に讓らずは論語の語なり、爲すべきに當つては顧慮せぬなり、高山寺の三絕鐘にも蒙叟當仁の句あり、又此の意。

㋔元來釋迦老子云々、お釋迦樣は六通ありと云ふが、頓と他心通は零なりと、圜悟を誚りしなり。

㋕商君孫武云々、商君名は鞅、棄灰の令を立て、刑を論じて渭水盡く赤し。孫武は吳王に事へ、三令五伸の後、美人を斬つて、軍令を明かにす。

功成つて宰せず。有時は風高うして寥廓、得て親疎すべからず。有時は己を退けて他を屈し、得て玩狎すべからず。恁麼は則ち易く、不恁麼は則ち難し。世法佛法俱に戲論となる。須らく知るべし、老僧は者裡に在らざるを。且く道へ、甚麼の處にある。簑を披して側立す千峰の外、水を引いて蔬に澆ぐ㋖五老の前。」

㋗全無庵は姑蘇の人、冶父㋘川金剛の小師なり、久しく育王の佛智に依り、慈覺の眞と友たり、古今を商確して明かならざるなし。唯だ室中の機緣發せず、晝夜哀泣睡らず、未だ嘗て人と世間の話を說かず。是くの如きもの累年、智一日室にあつて擒住して問うて曰く、「有句無句は藤の樹に倚るが如し、道へ道へ。」全口を開かんと擬す、智擘面に一拳す。豁然として大悟し、連叫數聲、「屈々」と。智便ち放つ。頌あり、曰く、

「鼓笛轟々祖㋙半肩。　龍樓香噴盆州船。
有時著レ脚弄二明月一。　蹈破五湖波底天。」

出世遍く大刹を匡し、虎丘に終ふ。

㋚尤延之侍郎、宗門に於て甚だ意を注ぐ。初め郎中より出でゝ台州に守たり。朝覲の次、孝宗忽ち問うて曰く、「卿南台に去る地里圖中、何の勝槩かある。」尤奏して曰く、㋛

㋖廬山に五老峯あり。

㋗無庵法全禪師は蓬庵端裕に嗣ぐ、裕は圜悟に嗣ぐ。

㋘川金剛は蹣庵成に嗣ぐ、成は普融平に嗣ぐ、平は蟇菴眞如に嗣ぐ、如は翠岩に嗣ぐ、岩は慈明楚圓禪師に嗣ぐ、川老金剛經を注し今尙世に行はる。

㋙天笠にては、問訊せんとする時、右の肩をかたぬぐ。

㋚尤袤字延之、自ら遂初と號す、官は禮部尙書に終ふ、文簡と謚す。孝宗嘗て遂初老人の四字を書して之に賜ふ云々。(佛法金湯編卷十四)

㋛佛法金湯編には、太平洪福國清萬年とあり、寺觀を擧げて天子を祝福せるなり。

「國淸萬年。」孝宗大いに喜ぶ。又戯に問うて曰く、「朕聞く、方廣に五百の應眞大士あり、元來是れ㊁强人、忽然として一時に出現せば、卿何の法を以て之を治めん。」尤覺えず拳頭を竪起して云く、「臣に金剛王寶劍あり。」孝宗喜んで天顏を動かす。尤既に台に至り、寛慈を以て民を御す、民甚だ之を愛す。但だ南台は㋭旱澇得易し。尤嘗て詩を作つて曰く、

「來雨一朝成二汗漫一。　纔晴三日人憂レ乾。
向來盡道天難レ作。　天到二台州一分外難。」

然れども㋩黃堂の政暇、多く報恩を過ぎ、佛照と道を論ず。佛照、後に冷泉の請に赴く。繼いで㋣伊庵の權を請じて住持せしむ、衆常に四五百。

無著道人妙總は、蘇太州の孤女なり、諸大老に徧參し、後妙喜に徑山に謁す。因に上堂、擧す、「石頭道ふ、恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、恁麼不恁麼は總に得ず」と。時に㋬馮濟川侍郎、座下に在り、忽ち省あり、方丈に趨き告げて曰く、「和尙石頭の話を擧す、揖會せり。」喜曰く、「侍郎作麼生か會す。」馮云く、「恁麼も也た得ず、蘇嚕娑婆訶、不恁麼も也た得ず、悉唎娑婆訶、恁麼不恁麼總に得ず、蘇嚕悉利娑婆訶。」適々、總外より至る、喜、馮の語を擧して之に似す。總笑つて曰く、㋮「向來郭象莊子を注す、然れども有識の者謂ふ、莊子郭象を注すと。」喜私かに之を識す。次の日入室す、喜問うて云く、「古德門を出でず、甚によつて莊上に在つて糍を喫す。」總云く、「和尙某を放し過さば、卽ち和尙に向つて道はん。」喜曰く、「我れ儞を放過す、試に道へ見ん。」總云く、「某甲、和尙を放し過す。」喜曰く、「油糍を爭奈何せん。」總喝一喝して出づ。乃ち投機の頌を作つて曰く、

㋯「驀然撞二着鼻頭一。　伎倆氷消瓦解。　達磨何必西來。　二祖枉費二三拜一。
更問二如何若何一。　一隊艸賊大敗。」

喜、鼓を槌つて、印證して曰く、

「汝既悟得祖師意。　一刀兩段直下了。
臨レ機一々任二天眞一。　世出世間無二缺少一。
我作二此偈一爲證明。　四聖六凡盡驚撓。　休二驚撓一。
碧眼胡僧猶未レ曉。」

瓊首座は四明の人、徧く諸老に見え、㋰象骨に留まること四十年、山を出でず、冬夏一衲、人能く之を親疎するなし。鐵庵に侍す、閩の帥趙汝愚、其の風を仰ぎ、累りに大刹を虛しうし、其の出でんことを請ふ、堅臥して應せず。然れども一見せんことを須欲し、鐵庵に托して、計を以つて其を誘つ

㊁强人は强盜なり。
㋭旱澇得易しとは、詩中に歌へる如く、旱魃にも霖雨にも、逢ひ易きなり、汗漫は見渡す限り、水計りなり、古書に、「涯涘を知るなきを、汗漫と云ふ」とあり。
㋩佩文韻府に、黃堂見えず、蓋し公堂と同意ならん。
㋣伊庵權は全無庵に嗣ぐ、無庵は佛智裕に嗣ぐ、楊岐下。
㋬馮揖字は濟川、蜀の遂寧人、不動居士と號す、揖建炎の後、名山鉅刹、藏經の殘欠を憂ひ、私費を以て印施して之を補ふもの、五千餘卷、補足するもの四十八藏。（佛法金湯編卷十四）
㋮郭象、莊子を注し、本文と光を爭ふ、今世に存する郭注是れなり。
㋯驀然云々、眼から火の出る樣に鼻柱をがつんと打付けた、天地晦冥、乾坤失却の場合なり、下の五句は此句より出づ。
㋰象骨は雪峰なり。

て府に入れ、大いに供養を作し、面のあたり其の請を受けんことを囑す。瓊志を秉つて渝らず、趙公愈々敬し、乃ち詩を以て歸山を送つて云く、

㋟「萬仞峰頭雪作レ堆。　一枝寒木倚二巖隈一。
青々不レ改四時操。　任待二春風一吹不レ回。」

府判以下の幕職皆賀す、其の法門を光明にすること少からず。夫の今の書を持し、院を覓めて住するものと、日を同じうして之を語るべからざるなり。

㋠李侍郎德邁、南台に守たるの日、鴻福萬年薦善を以て㋡拙庵伊庵鐵庵の三大老を請じて出世せしむ。一時の龍象駢集す、後國清を以て㋢密庵を請ず。密庵は當時衢の烏巨に住す、是れ皆專ら㋣應庵の爲めにするの故なり。開堂に及び、㋤各々稟くる所あり、之を信ず、此の事各々當人にあり、故に人情を以て悅を士大夫に取るべからざるなり。後に李公番陽に歸り、閑居の日、嘗て人に語げて曰く、「浩、平生仕路に在りと雖も、家貧にして以て自ら給するに足らず、資の以て人を濟ふべきなし。唯丹丘に在つて、三員の善智識を請ひ得て出世せしめ、佛の慧命を續ぐ。其の功德思議すべか

㋟此詩合作なり、一枝寒木は、瓊首座に擬す。
㋠李侍郎名は浩、普燈、分燈、金湯、皆字は德遠に作る。按するに遠と邁と未だ何れか是なるを知らず。
㋡拙庵は大惠に嗣法す、伊庵は無庵全に嗣ぐ、鐵庵は月庵果に嗣ぐ。
㋢密庵咸傑禪師は應庵に嗣法す。
㋣李浩は應庵の指揮により此事を發明す、其恩に報ずる爲めに、拙庵、伊庵、鐵庵、密庵を名刹に請ぜしなり、蓋し浩は此四師、皆應庵に嗣法すべしと思ひしなり。
㋤各稟くる所ありは、三人各師承ありて應庵に嗣がざりしなり、應庵に嗣ぎしは密庵一人のみ。

らざるかな」と。

佛照光初め㋥仰山旋野庵の會中にあり、台州鴻福の命を受け、道に三衢に游び、烏巨に抵る。密庵偈を以て之を送る、以謂らく、必ず應庵に承けんと。偈に曰く、

㋦「瞎驢生得瞎驢兒。　齪齪聲名徹二四維一。
更把二少林無孔笛一。　逢レ人應二是逆風吹一。」

婺の寶林に抵るに及び、時に月庵の弟子遠和尚住す。復た雲門話墮の語を舉して、之を判せしむ。意は其の月庵に承嗣せんと謂ふなり。末に及び丹丘の開堂、恰も妙喜に嗣ぎしかば、叢林皆之を短つて以謂らく、「妙喜の門戶高大にして然り」と。初めより㋧寃に頭あり、債に主あるを知らざるなり。㋨

㋩塗毒和尚、常の華藏に住す。一日忽ち頭痛すること刀もて劈くが如し、三日に連つて已まず、門弟子以謂らく、「其れ腦癰を生せり」と。既にして痛み止み、乃ち伏犀骨聳起して揷むが如きを見る。旬日ならざるに、詔下つて雙徑を領す。蓋し人晚成、果して換骨の兆あり。將に行かんとす、㋪雪林慈光なるものあり、

㋥旋野庵は、月庵に嗣法す、正誤宗派には、旋璿に作る、何れか是なるを知らず。
㋦瞎驢云々、めくらの馬が、めくらの子を產んだ、そこで、ぢゝむさき評判が四維に響いた、齪齪はぢゝむさき也、普通にはこせこせするを齪齪と云へども、少しく別なり。
㋧寃讎には相手あり、借金には金主あり。
㋨原本には此の下に注あり。
㋩塗毒策は典午游に嗣ぐ、龍寶開山大燈國師も、亦此事あり、一夜にして伏犀聳起す、伏犀とは天頂骨の聳起する處、犀角の潛伏するが如きを云ふ、犀は頭の上に一角あり。
㋪雪林慈光、宗流、佛智の下に此人を載せず。

久しく佛智に依り、歳晩雙瞽して慧山に寓止し、三偈を以て五峰に送上す。其の一に曰く、

㋐「塗毒離微及盡。　典午佛祖俱亡。　咲捧二天書一南去。　叢林千古耿光。」

二に曰く、

㋑「台嶺奇峰壁立。　大湖雪浪華飛。　試問五湖禪衲。　如今天下有レ誰。」

三に曰く、

㋒「衰殘正賴二餘潤一。　紫泥掇二我賞音一。
附レ驥觀二光喝石一。　攀龍徒有二此心一。」

歸雲本和尚は台の人、瞎堂の遠に嗣ぎ、金陵の長竿より疎山に遷り、道聲籍甚なり。狀元劉堯夫、嘗て道を本に問ひ、氣義相得たり。上堂あり、云く、

「一棒下に痛く領じ將ち去り、樹頭驚起す雙々の魚、一句下に折合し得來つて、石上に迸出す長々の笋。便ち乃ち用ひて用ふる所なく、常に無盡の法輪を轉ず。爲して爲す所なく、普く無邊の心相を現ず。古人力を著くる處なき、便ち了に箇の影子を劃して道ふ。『一月普く一切の水に現じ、一切の水月一月に攝す』と。佛法若し此くの如くならば、又歸雲が出で來るを要して什麼をかせん。」大衆良久卓拄杖して云く、「如今坐立儼然たり。千鈞錐を立せざる處に向つて立地に證得するや。大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし」と。下座。叢林佞筆あり、當世の尾を

㋐第一首は塗毒を歌ふ、典午は塗毒の師、游和尚なり。
㋑第二首は勅住地の勝概を歌ふ。
㋒第三首に自己送別の感を歌ふ。

搖し、憐みを乞ふ者を論議す、詞意甚だ超卓なり。圓極の岑禪師親しく爲めに之に跋す、後輩の入衆知らざるべからず。其の文に曰く、「本朝の富鄭公弼、道を投子の顒禪師に問ふ、書尺偈頌凡そ一十四紙、台の鴻福兩廊の壁間に碑す。灼として前輩主法の嚴と、王公貴人信道の篤きとを見るなり。鄭國公は社稷の重臣、晩歳に、㋓向ふことを知ることと此くの如し。而して顒も必ず大いに人に過ぐる者あらん。自ら謂ふ、顒に於て警發するところありと。士大夫の中此の道を諦信して、能く齒を忘れ、勢を屈し、奮發猛利、徹證を期して後已むこと、㋔楊大年侍郎、李文都尉の、廣慧の璉、石門の聰幷に慈明の諸大老に見ゆるが如き、激揚酬唱、班々として諸禪書に見ゆ。㋕楊無爲の白雲端に於ける、張無盡の兜率の悅に於ける、皆㋖扣關擊節、源底を徹證す、苟も然るものに非ざるなり。近世㋗張無垢侍郎・李漢老參政・呂居仁學士、皆妙喜老人に見えて堂に上り室に入る、之を方外の道友と謂ふ。愛憎逆順、雷揮電拂、㋘世俗を脫略す。拘忌をもて觀る者は衽を斂めて辟易し、涯涘を窺ふなし。然れども士君子空閑寂寞の濱に相求むるは、心を禪寂に棲ましめ、本有を發揮せんと擬するのみ。後世は㋙先德の

㋓向ふことを知るとは、自己の進むべき方向を知るなり、本來の面目を尋覓するを云ふ。
㋔楊億、字は大年、建州浦城の人、景德傳燈錄の序を製す。李文都尉は李遵勗なり、前出。
㋕楊傑前出、張無盡は、天覺なり、護法論を著す。
㋖扣關擊節は、宗旨を穿鑿するを云ふ、關節は至要の處なり。
㋗張横浦、無垢と號す、後に話あり。李邴字は漢老、官は參政に至る。呂本中字は居仁、江西詩派圖を作り、山谷を推して詩祖となす。(佛法金湯、居士分燈、普燈等に詳かなり)
㋘世俗を脫略す、習俗に泥まざるを云ふ、毫も挾む處なきなり。
㋙先德の楷模とは先德の人を接するの模式、道に當つては一歩も假借容赦せざるを云ふ。

楷模を見ず、專ら諛媚を事とし、曲げて進顯を求む。凡そ住持を以て、名を薦めて長老と爲すもの、往々に刺に書して以て門僧と稱す。前人を奉じて恩府と爲す、招提の物を取つて苞苴し、侯を獻ず。識者憫笑すれども、恬として恥を知らず。嗚呼吾が沙門釋子、一餅一盞、雲の如くに行き、鳥の如くに飛ぶ。凍餒の迫り、子女玉帛の戀あるにあらず。而も腰を折り㊀等を擁し、酸寒跼蹐、自ら賤辱を取ること此くの如きを欲するや。恩府と稱する者は一己の私に出で、依據する所なし。一妄庸之を其の前に唱へ、百妄庸之を其の後に和し、爭ふて之を奉じ、自ら之を卑小にせんと擬するのみ。風敎を削弱するは、佞人より甚だしきはなし。佞敏は實に姦邪欺僞の漸なり。端人正士と雖も、巧に其れが爲に入れらるれば、則ち身を不義に陷れ、德を救ふなきに失ふ、哀まざるべけんや。破法の比丘は魔氣の鍾るところにして、誑誕自若たり。詐つて知識の身相を現じ、禪林の大老を指して之を師承となし、當路の貴人に媚びて之が宗屬となり、㊁不請の敬を申ねて、懷法の端を啓き、㊂白衣床に登つて其の下に膜拜し、曲げて聖制に違ふて、大いに宗風を辱しむ。吾が道の衰極此に至る。嗚呼天誅鬼錄、萬死も奚ぞ其の佞者を贖はんや。㊃嵩禪師の原敎に言へるあり、『古の高僧は天子に見えて名いはず、制書に預るときは、則ち公と云ひ、師と曰ふ。鐘山の㊄僧遠は

㊀鉢を擁して前驅するは、敬を表するなり、道路を淸むるの意、支那戰國時代にありし故事。
㊁不請の敬は、賴みもせぬ敬禮なり。
㊂俗漢床に据して、紫衣の長老、其下に膜拜す。
㊃明敎嵩禪師、輔敎篇を著す、內に原敎あり廣原敎あり、此語は廣原敎第十七篇に出づ。
㊄鐘山の僧遠は、齊の高祖其寺を臨訪せしも敢て趨迎せず。

鑾輿、門に及ぶも牀坐して迎へず。虎溪の㊅慧遠は天子潯陽に臨んで詔すれども出でず。當世其の人を待ち、其の德を尊ぶ、是の故に聖人の道振ふ。後世の其の高僧を慕ふ者は、卿大夫に交つてすら、尙ほ下士の禮に預るを得ず、其の出其の處、庸人の自得にだも若かざるなり。況や僧遠の天子を見るが如きをや、況や慧遠の自若の如きをや。吾が道の興り、吾人の脩を望むも其れ得べけんや。其の敎を存するも、其の人を須たずんば、諸を存するも何を以て益せんや。此を惟ふて未だ嘗て涕下らずんばあらず』と。禪師は熙寧十五年に沒す。其の書大法衰替して、人の荷負するなきを憂と爲す。頗る波旬の今日我が法中に入るが如く、詐妄自ら欺き、諛佞を以て計を得たりと爲す。師子身中の蟲の、自ら師子身中の肉を食ふが如し。此の書作らずんば可ならんや。首楞嚴に曰く、『我が滅度の後、末法の中、此の妖邪多く世間に熾盛に、潛匿姦欺、善知識と稱す云々。』又曰く、『云何ぞ賊人我が衣服を假り、如來を㊆稗販し、種々の業を造り、皆佛法と言ふ。卻つて出家具戒の比丘を非つて、小乘道となし、是に由つて無量の衆生を疑誤し、無間の獄に墮す』と。淳熙丁酉、余事を顯恩に謝し、平田西山の小塢に寓居す。以みるに㊇日近の見聞、事に矯僞多く、古風彫落す。吾が言之れが輕重を爲すに足らず、聊か書して以て自ら警むと云ふ。歸雲如本書す。」圓極の岑の跋に云く、「佛世の遠き、正宗淡薄にして、

㊅慧遠は、晉の安帝、鄂渚より都に還るに當つて、法駕潯陽を過ぎ、詔して頓所に見えしむれども、敢て山を下らず。
㊆稗販は安賣するなり。
㊇日近は近日と同じ。
㊈變子は「あばれもの」なり（俗語解）、今の外道と云が如きなり。

澆漓の風行はれて至らざる所なし。前輩は彫謝し、後世は聞ゆるなし、叢林の典刑幾んど地を掃ふに至る。縱ひ扶救の者あるも、返つて以て㋓蠻子と爲すなり。余疎山の本禪師の佞を辨ずるを觀るに、詞遠くして意廣く、深切著明、極めて能く其の病を箴す。第だ妄庸の輩は、知識暗短にして、心を邪佞の域に醉しむるが爲めに、必ず醍醐を以て毒藥とせん。淳熙壬寅上巳、圓極の彥岑、江左の五峯に書す。」

懶庵樞和尙は㋔黃龍下の尊宿にして、道場の慧に承嗣す。初め孝宗皇帝佛乘に向ふと雖も、未だ宗門下に奇特の事あるを知らず、皆是れ此の老の引進なり。故に瞎堂・拙庵然も後に之を㋕印可す、其の來歷を知らんと要するに、皆樞の力なり。樞、事を靈隱に謝し、後に明敎の永安蘭若に居り、逍遙自適す。絕句あり、壁に題して曰く、

㋖「雪裡梅花春信息。　池中月色夜精神。
年來不是無嘉趣。　莫把家風一舉示人。」

其の胸次を見るべきなり。

竦空谷は餘杭の人なり、象田の演の座下に在つて、維那に充てらる。人となり淸苦貧甚だし、多は則ち蘆華絮に當つ。本色の叢林に非ざるよりは、斷じて㋗復を放たず。故に演爲に其の道號を頌して曰く、

㋔黃龍、晦堂、靈源淸、長靈守卓、無傳居慧、懶庵道樞、（正謨宗派）。
㋕印可とは瞎堂の遠、拙庵の光等の孝宗を印可せるなり。
㋖雪裡の梅は、春の消息を漏し、池中に落つる月は、夜の精神を輝かす、よい氣味ではないか、然し人には言ふなと。
㋗復を放たずは、挂搭せざるを云ふ。

㋘「谷空空谷谷空空々。　空谷全超萬象中。　流水落華渾不見。」

淸風明月却相容。」

後に天童に在つて、流に沿ふて屋を縛し、號けて弔古と云ふ。多く兄弟あつて、其の勝遊に陪す。余時に玉几の拙庵老人の會中にあり、頌を以て寄せて曰く、

「聞君縛屋傍山阿。　遠弔㋑龍湫諾詎羅。
未必將身潛碧嶂。　且圖繞足向淸波。
韻傳空谷人難到。　門掩山華雪不過。
我待秋風洗巖壑。　杖藜相與傲烟蘿。」

竦淸の氣骨に入るを以て、烟霞の痼疾を成し、遂に太白に終ふ。

五臺草衣の文殊の像は、本朝元豐の間、㋙大尉呂慧卿、邊を戍るに因つて臺山に遊び、其の貌を見しより始まる。嚴たる童子、體黑うして髮を被り、蒲を以て足より纏ふて肩に至り、右膊を袒ぎ、手に梵笈を執り、呂と華嚴の大旨を論ず。而して呂は其の大士なるを知らず、呂を呵して凡情を以て聖意を測ると云ふに及び、呂方に寤つて下拜す。而して童子乃ち文殊の形と化

㋘第一句は碧班賓豹博、常的帝都丁と同じ、谷空空谷谷空々。
㋑龍湫は吉甫、法昇觀に於て研磨年あり、後李長者の合論を見て、心地豁然たり、投機の偈に曰く、文殊を見んと欲する久し、心を驅せて五臺に向ふ、誰か知らん黃卷の上、妙光を指出し來る。（普燈錄卷二十二）

し、金毛に跨り、隱々として雲中に入る。呂是れより悔恨、家に歸り月を逾えて、鬱々として樂まず。後家人告ぐるに至誠懇惻なれば、聖容必ず現せんと云ふを以つてす。呂其の言の如く、乃ち誠を竭して過を悔い、必現を期して後已む。一日早起す、乃ち是れ大士香几の間に現じ、呵して云く、「胡爲ぞ住相貪著の甚だしきや。」呂曰く、「正に世人の咸く大士示化の眞容を見んことを欲するのみ」と。急に畫工に命じて之を圖せしむ。頃刻に見えず、其の像遂に京洛の間に傳はり、㋑今は在處に或は之を見る。余一本を畜ふ、乃ち吳の僧梵隆の筆、終身以て之を奉ぜんと期す。嘗て記す、典午和尙の一贊最も佳なり。其の詞に曰く、㋺「潦倒たる南泉道理を識らず、大小の曼殊師利鐵圍山底に㋩貶向す。今に至るまで頭又梳らず、面も又洗はず。一箇の渾身艸裡に坐在す。鈍根の呂公猶ほ瞥地ならず、金毛を指出して當下に己に迷ふ。靠倒了や。蘇盧嘿唎。」

水墨觀音の像、唐の吳道子・李伯時より後、唯だ吳の僧梵隆茂宗なるもの尤も妙絕となす。故に孝宗嘗て之に贊して曰く、

「水波不レ動。　火光不レ興。　梵隆妙絕。　授二之德明一。」

㋑今は在所に之を見る云々、日本に傳はれる草衣の文殊には、雪礀和尙の贊あるもの多し、曾我蛇足、狩野元信等も亦嘗て之を描く。

㋺潦倒又郎當に造る、三耶郎當の語あり、落ちぶれたるを云ふ。

㋩貶向、南泉云く、文殊普賢、作夜佛見法見を起す、各三十棒を與へて、二鐵圍山に貶向す。

㋺日本に傳はれる水墨觀音に、宋畫多し、然れども多くは畫者の名を識さず、大抵之を徽宗皇帝の筆と傳ふ、何ぞ知らん、當時此種の畫風流行して、世の尙好に投ぜしを。

蓋し中官黃德明に賜ふなり。㋥隆に小師至叶あり、亦善く之を作る。近ろ閩の僧德源あり、筆猶ほ妙に臻る、故に當時の巨公謝丞相・趙大師彥逾の如き、皆其の像に贊せしあり。謝して曰く、

「收視返聽。　結跏趺坐。　邈二出筆端一。　以レ色見レ我。　千百億身。無二可不可一。　重說偈言。　依然話墮。」

趙曰く、

「出意作二觀音一。　筆間造二玄妙一。　會二得眞面目一。　慧光應二徧耀一。
若以二相貌一求。　覩レ相生二善念一。　念々既純全。
眞相縱斯現。」

柏堂雅禪師は閩の人、㋭懶庵の需に嗣ぎ、初め紫籜に住す。佛照の冷泉に居るを以て、叔姪の故に、特に往いて之を輔佐す。座元に居ること一年、兄弟多く之に歸す。然れども雅、剛正にして佛照之を憚る、後に龍翔の靈巖に住し、其の道大ぴに振ふ。衆に示して云く、「瑞峯頂上棲鳳亭邊、一杯の淡粥相依り、百衲頭を蒙ふて打坐す。二祖禮三拜、位に依つて立つ。已に是れ周遮、達磨老臊胡、髓皮を分盡す。一場の狼藉、自餘の輩、何ぞ道ふに足らんや。柏堂與麼に道ふ、還つて諸方の檢責を免れんや。也無きや、具眼のものは辨取せよ。洎んど合に㋬囚を停めて智を長ずべし。」又曰く、「紫蕨拳を伸べ、筍梢を破る。楊花飛び盡して綠陰

㋥黃德明は大憲に嗣ぐ。

㋬罪人は、早く決斷せぬと、其内に色色思案して、吟味が長びく。

㋭懶庵需は大慧に嗣ぐ。

交る。分明なり西祖單傳の句、黄鳥は留鳴し、燕巣に語る。箇の裡に見得徹し信得及して、若し諸方に到らば、決定して明窓下に安排せん。龍翔門下は直に是れ一槌に槌殺せん。何が故ぞ、是れ人と共に住し難きにあらず。大都緇素分明ならんことを要す、」と。

廣教會㋙和尚は川の人、㋚石頭の回に嗣ぐ。初め此庵に護國に依る、行者の鐵板を斡するに因つて、皆頌あり、送行す。會曰く、

「空奮雙拳興應去。　打成一片早回頭。

㋛歸來挂在三峯頂。　惱亂春風卒未休。」

兄弟皆之を愛す。後に雲居の薦福に住し、常に三二百の衆を安ず。蓋し根本端正なれば、下梢決定して殊勝なり。

三峯の㋜印禪師は婺州の人、見地超絶なり。嘗て百丈野狐の話を頌して曰く、

「不落不昧誣人之罪。　不昧不落無繩自縛。

可憐柳絮逐春風。　到處自西還自東。」

叢林多く之を傳ふ。淳熙の初め、余山陰の能仁にあり、今の瑞巖葦堂潤公と同じく往いて渠が之を擧するを見る、恨むらくは其の人を見ざることを。後因に塗毒老人の頌を見る、曰く、

「秉大火炬。　燒太虛空。　達磨不會。　眼瞎耳聾。」

尤も印の頂類上にあつて、㋝筋斗を打するのみ。

自得暉、長蘆祖照の會中にありし頃、衆寮に竹を栽う。暉忽ち一頌を成して云く、

「高節深雲藏不得。　幽人移向矮窓前。

靈根瑞葉驚群目。　將著清風動碧天。」

一時の作、偶然より出づ、人已に爭ふて之を誦す。晩年に及んで乳竇に居る。已に八十餘、忽ち旨を奉じて淨慈に住す、人皆以て㋞語讖となす。㋟衆を辭するに及び、上堂に云く、「一たび山中に住してより四十年、老來日として閑を思はざるなし。今朝誤つて君王に詔せられ、珍重す禪流故關を出づ。雲無心にして岫を出で、鳥飛ぶに倦んで還るを知る。他年意を得て歸來せば、賓主相忘れん松石の間」と。南屏に來るに及び、大いに曹洞の道を興し、後雪竇の雙塔に歸つて終焉の計を作す、果して去時の語に應ず。謂ゆる心に在るを志となすものなり。

鑑咦庵と賢在庵と俱に㋠心聞の賁に嗣ぐ。鑑嘗て「罽賓國王師子尊者を斬る。」の公案を頌して云く、

㋗五祖法演―南堂靜―石頭回―廣教德會。

㋚石頭回禪師は石工なり、南堂靜問うて曰く、今日碎磕、明日碎磕、死生到來せば、作麼んが折合せん、回愕然として措くことなし、後に趙州勘婆の因緣を見、石を打つて火を發するによつて、忽然省徹す。（錦江禪燈卷七）

㋛此偈轉結妙、讀者若し此間の消息を知らんと欲せば、又是れ春風に惱亂して卒に未だ休せざるなり。○起承の二句は其意自ら明かなり。打成一片は、蒭緣の功成るを云ふ。

㋜佛眼―高庵―大林―三峰印。

㋝筋斗を打すは、さか立ちする。

㋞讖とは、清風を將著して碧天を動かすの語を指す、其元は竹梢の清風、拂々として搖動するを歌ひし迄なれども、其れが偶然にも天聽を動かすと云ふ風に讖をなせしなり。

㋟衆を辭すとは雪竇の退院上堂なり。

㋠心聞曇賁禪師は、青王諶に嗣ぐ、諶は長靈卓に嗣ぐ、卓は黄龍清に嗣ぐ。

㋓「尊者何嘗得二蘊空一。　闕賓又下㋐斬二春風一。
㋐桃花雨後恣零落。　染二得一溪流水一紅。」

叢林爭ふて之を誦す。乃ち賓も勘婆の話を頌して曰く、

㋔「氷雪佳人貌最奇。　常將二玉笛一向レ人吹。
曲中無レ限華心動。　獨許東君第一枝。」

妙喜一見して、大いに稱賞して曰く、「賁老に此の兒あり、黄龍の法道未だ地に委するに至らず」と。夫の前輩の後進を汲引するを見るに、唯是れ㋕公論、初めより宗黨の分なきのみ。

㋖佛性の泰、龍牙の翠微と臨濟に參ずる公案を頌して曰く、

「子卿不下下二單于一拜。　始末常遵二漢帝儀一。
雪後始知松柏操。　事難方見丈夫兒。」

謂つべし親切明白なりと。余、頃玉几に在つて、嘗て佛照の此れを擧するを見るに、必ず再三稱賞して曰く、「此れ乃ち㋙頌古の樣子なり。」と、後其の語錄を觀るに、又其の「婆子㋚趙州の筍を偸む。」の話を頌するを愛す、云く、

「櫻桃初熟筍穿レ籬。　林下相逢老古錐。

㋓何嘗得二蘊空一とは五蘊皆空と云ふ樣なちゞむさきものあれば、師子尊者ではないとの意。
㋐斬春風、此句は電光影裡斬二青風一と意同じ、當時多く使用せしなり。
㋐桃花雨後云云、眞紅の血が、瀧の如くに流れた、左はさりながら、紅血と白乳と相去ること多少ぞ。
㋔氷雪云々二句、白髮頭のお婆さん、齒くそだらけの大口あいて、驀直に去れ。
㋕公論とは黄龍派、楊岐派の朋黨なきを云ふ。
㋖佛性は圜悟に嗣ぐ。
㋙頌古は作意を顯さざるを本意とす、此頌宛も蘇武を詠するが如し、是れ佛照の嘉賞する所以なり。
㋚趙州和尚、一婆に遇ふ、州曰く、何の處に去る、婆曰く、趙州の筍を偸む、州曰く、趙州に遇ふ時如何ん、婆便ち打す。

㋛忍俊不禁行二正令一。　得二便宜一是落二便宜一。」

開善の謙、心不是佛、智不是道を頌して云く、

「太平時節歲豐登。　旅不レ賣レ粮戶不レ扃。
官路無レ人夜無レ月。　唱歌歸去恰三更。」

妙喜最も之を喜ぶ。金山の奇道者は別峯印の嗣なり、亦嘗て、

「遲日江山麗。　春風華艸香。　泥融飛二燕子一。
沙暖睡二鴛鴦一。」

を以て之を頌す。亦得易からず、時に以て超師の作となすなり。

㋝圓通の旻和尚は、興化仙遊の人なり、泐潭の乾に見ゆ。㋞左丞相范公致靈、初め內翰より出でゝ豫章に帥たり。候溪を過ぎ、因に語する次で、范嘆じて曰く、「行々將に老いんとす、金紫行中に墮在して此の事を知ること稍遲し。」旻卽ち、「內翰」と呼ぶ、內翰應諾す。旻曰く、「也た遠からず。」翰曰く、「好し好し、更に指示を望む。」旻曰く、「此を去つて洪都四程あり。」翰佇思す、旻曰く、「見ば便ち見よ、擬思せば卽ち差ふ。」翰大いに喜ぶ、此れより所入あり。

樞密吳公居厚、節を擁して鍾陵に歸る。旻を見て曰く、「省試に赴くの頃、圓通の趙州關を過ぎ、因に前住訥老に『透關底の事如何ん』と問ふ、訥曰く、『且つ去つて官と做れ』と、今覺えず五十餘年な

㋛忍俊不禁は齒がゆうして辛抱しきれないと云ふ心なり、婆子が趙州を打つた處は、便宜を得る處、卽ち便宜に落つじやと、此二句、人の言はんと欲する處を言ひおほせてゐる。
㋝黄龍南―東林聰―泐潭乾―道旻圓機。
㋞范仲宇致靈、居士分燈には致虛に作る。

り。」晏曰く、「曾て透關底の事を明得するや。」吳曰く、「八次經過して、常に念を存す、然れども未だ脫灑ならざることあり。」晏ために之を擧して曰く、「請ふ扇を使へ。」吳、扇を揮ふ。晏曰く、「甚の脫灑ならざる處あらんや。」吳大いに喜んで曰く、「便ち末後の句を請ふ。」晏乃ち、扇を搖すこと兩下す、吳曰く、「親切親切。」晏曰く、㋟「咭嘹舌頭三千里、」と。

諫議彭公汝霖、手づから觀音經を寫して晏に施す。晏拈起して曰く、「這箇は是れ觀音經、那箇か是れ諫議底。」彭曰く、「此れは是れ某の親書。」晏曰く、「寫す底は是れ字、那箇か是れ經。」彭笑つて曰く、「卻つて了に不得なり。」晏曰く、「卽ち宰官身を現じて爲めに說法す。」彭曰く、「人々分あり。」晏曰く、「經を謗すること無くんば好し。」彭曰く、「如何して卽ち是なる。」晏經を擧して之に示す。彭撫掌大咲して曰く、「嘎。」晏曰く、「又不得と道了す。」彭乃ち頂禮す。

安相國南遷のとき、經過して晏を見て嘆じて曰く、「一生官となつて今日謫せられ、從前は但だ一夢なるを覺り見るのみ。」晏曰く、「此れ皆本有、但だ未だ甚だ明了ならず。」晏乃ち「相公」と召ぶ。公首を擧す、晏曰く、「了せり。」安曰く、「奈んせん、事に使ひ得らるゝを。」晏曰く、「京を離れて幾程にして此に至れる。」安曰く、「四十二日。」晏曰く、「甚の處に得來る。」安咲つて曰く、「得力得力。」晏曰く、「直下に受用し去れ。」安曰く、「如何んが受用せん。」晏曰く、「朝々相似、日々一般。」

㋟咭嘹は秦吉嘹にして九官鳥のこと。

㋠此の如しとは、上の三條を合せて應用の自在を許せしなり。

安乃ち合掌す。晏曰く、「但だ諸有を空せよ、所無を實にするなかれ」と。㋡大率此くの如し、眞に大自在を得たり。

㋢二靈庵主は蘇人なり、初め眞淨に見え、後泐潭の乾に參じ、所證あり。東浙に回つて雪竇の中峰庵に居る。常に虎あり、座下に蹲伏す。初め㋣天童の交和尙と同行なり、二人稟誓して、斷して出世せず、後に交其の誓に爽ひ、出でゝ太白を尸る、和遂に其れと絕交す。中峰に居ること歲久し、其の山秀絕なり。凡そ居ること久しからざるに、卽ち他山の命あり、和乃ち鉏をもつて㋤山骨を斷つ、竟りに待制陳公の爲めに詩を以て誘はれ、出でゝ二靈庵に住す。一二年ならざるに禪衲麕至し、遂に小々の法社を成し、名九天に聞ゆ。屢々詔すれども起たず、今に至るまで遺蹟尙ほ存す。多く偈語あり、世に行はる。二靈は乃ち鄞江月波の中に居る。淳熙中、別峯印乳竇より徑山に赴き、徑

㋢黃龍下。

㋣天童普交赤勒潭の乾に嗣ぐ。

㋤山骨を斷つは、蓋し風水の說。

其の所よりす。偈に云く、

「萬頃湖光瀲灩中。　二靈山色翠重々。　片帆我欲天邊去。
回首和公有媿容。」

其の高風を想見すべきなり。

仁宗皇帝、因に大覺禪師、內に入つて心法を論ず、御製あり、之に賜ふて曰く、

「初祖安禪在二少林一。　不レ傳二經教一但傳レ心。　後人若悟二眞如性一。
密印由來妙理深。」

孝宗皇帝、因に徑山の潛禪師に詔して內に入らしむ。又頌あり、之に賜ふ、曰く、

「信レ手拈來說。　宗乘數百句。　僧歸寺寂寥。　一字無二著處一。」

國譯叢林盛事卷上終

國譯叢林盛事卷下

㋑寶峰の祥叉手、童子たりし時、一老宿の夜話に、古德の頌を擧するを聞く、云く、

「征輪㊐軋々過二江南一。　暫把二遺骸一寄二泐潭一。
秦嶺烟沙猶未レ息。　月明空鎖定僧庵。」

祥覺えず感悟して泣下る。老宿其の故を問ふ、祥云く、「某近ろ夢中に此の句を得たり、當に是れ前身の爲るところの者なるべし。」宿曰く、「審に爾他日必ず泐潭の主人に居らん、」と。祥後に僧となり、衆に入つて年あり、果して泐潭に出世し、屢々名刹に住し、續いで靖康の亂を以て地を天台に避け、高庵の悟と㋩相繼いで蓮華に示寂す。此の地は乃ち㋺詔國師入定のところ、前後皆前頌に言ふところの如し。敎中に云ふ、「凡そ報土皆夙昔願力の現ずるところ、擧定分あり、豈偶然ならんや。世流の庸妄、院を求めて區區として聲利の域に苟合し、老い且つ死すと雖も、而も分に安んずるを知らるなきもの多し。」と、余昔し太白密庵の會中に在り、夜夢に一聯を作り、壁

㋑寶峰景祥禪師は大潙苗に嗣ぐ苗は眞點胸に嗣ぐ、祥は南豐の人、紹興二年十月七日沒す、年七十一。（僧寶正續傳卷四）
㊐軋々は車のきしる音。
㋩祥高庵の悟と厚善なり、悟、鳴福住持の命を受け、未だ入寺に及ばずして化す、仍つて祥其後に補す、相距ること一月ならずして祥又寂す。
㋺天台詔國師は法眼に嗣ぐ、智者大師の後身と稱す、名は德韶、處州龍泉の人、姓は陳氏、宋の開寶四年六月廿八日寂す。（僧寶傳卷七）

間に書して云ふ、

「雪點二欄干一。　寺在二翠瑠璃之下一。　雲横二霄漢一。　人歸二紅菌菹之中一。」

已に年を彌つて、猶ほ世中に轉圜す。抑々知らず、報土果して何の方に現ずるや、咄。切に忌む、夢を說くことを。

㋙普慈の聞禪師は、豫章の人にして、相貌凡ならず、初め雪堂の行に烏巨に見え、次に湖湘に入つて妙喜に回雁峯前に見え、備に烟瘴を歷たり。狀元汪聖錫と厚善なり。汪は上饒の人、擧げて以て懷玉に住せしむ、乃ち南禪師授業の處なり。汪後に閩に帥たり、卽ち象骨を以て之を招く。乾道の間、詔を奉じて雙徑を尸る、累に詔して入內し、大いに龍顏を悅ばしむ。特に佛日禪師を賜ふ。暮年再び旨を奉じて雪峰に歸る、彭山の昇老・次山、疏を作つて曰く、

㋚「璇璣不レ動。　期須レ回二天上風雲一。　大用現前。　縱横挂二域中日月一。

喜二百世一時之遇一。　冀二千齡再會之享一。

德又日新。　人惟求レ舊。

某人。　道在二南閩二浙一。　緣符㋛雪嶠五峰一。

前兄後弟而自二得嘉聲一。　昔去今歸而皆奉二詔旨一。

㋙普慈は、大惠に嗣法す。
㋚璇璣は舜の作れる天文器。
㋛雪嶠は雪峰なり、五峰は徑山。

中二興佛法一。　四海九州悉見二天心一。　獨受二主知一。　名公鉅卿咸尊二師譽一。

方逐二丹墀鳳翥一。　俄驚二合浦珠還一。　好看㋜白馬來東。　何待二青彩拂㋝地。

一千餘龍象衲子。　竚觀象軾言旋一。　三百年祖師道場。

又見二木毬再輥一。

請提二密印一。　同副二芹誠一。」

聞、福緣甚だ勝れ、近世及ぶもの罕なり。但だ向上の一著、叢林全く信を取らず、抑々身滅びて名殞するのみ。

鐵庵一大禪師は建昌の人、佛照曇道者と俱に同行なり。初め月庵の果に見え、次に應庵の華に見ゆ。歸宗に住する時、嘗て侍者となり、華頗る之を喜ぶ。其の孤耿世と與に交らず、嘗て其の頂相に題して曰く、

「掛レ拂竪レ拂。　全機出沒。　一喝耳聾。　三日屈々。

且道是馬祖屈百丈屈。　宗一侍者但恁麼拈出。」

乾道の間、出世して台の慶善に住し、衢の祥符に遷る。竟に月庵に嗣ぐ。蓋し所得を忘ぜざるなり。

其の像に贊するあり、曰く、

「揭二翻四大五蘊一。　徹二證向上一竅一。　傾レ心吐レ膽爲レ人。　暗裡返遭二怪笑一。

㋜丹墀は朝廷なり、鳳翥は鳳鳥の飛翔なり、鳳鳥飛べば、百羽之に從ふとあり、雙徑に住する時を云ふ。
㋝白馬來東、青彩拂地は蓋し玄奘の故事を引用せるなり。

眼裡瞳人吹レ鐵叫。　持レ蠡酌レ海謾勞レ神。　熨斗煎レ茶不レ同レ銚。」

其の後嘉禾より疎山・仰山に遷り、兩び雪峰に住して終ふ。

雪堂の行、法語あり、行者元友に示して曰く、「雲居の高庵老人、龍門にあつて、首座となる。時に凡そ衆に臨むに、必ず曰く、『須らく識者の在るあるを知るべし』と。他日誨に侍する次で、嘘て其の說を聞かんと請ふ。語げて曰く、『廣衆の中、鄙者は常に多くして識者は常に寡し、鄙者は習れ易く、識者は親み難し。自ら志を其の間に奮ふ、一人と萬人と戰ふが如し、庸鄙の習力盡くるときは、眞の挺特沒量の漢なり。』と、余是より終身其の言を誦す。

㊇氣志に勝つときは則ち小人たり、志氣に勝つときは則ち端人正士たり。惟だ志と氣と齊しうして得道の賢聖となす。人あり、剛狠諫曉を受けざる者は、氣之を然らしむるなり。㊆耆婆の將に死なんとするや、百草皆泣いて曰く、『耆婆世にあれば我等用あり、耆婆死して後、世間我れを識る者有るなし』と。此れは世間の諸法に喩ふ。未だ出家せざるとき、將に冠せんとするの年、見獨居士、嘗て余に謂つて曰く、『中に主無ければ則ち正しからず、外に主無ければ則ち行はれず』と。余是より終身其の言を踐む。家に在つて身を立て、家を出で道を學するより、以て終年に至るまで、此に倚つて衡石の輕重を定め、規矩の方圓を成すが如し。此れを舍つれば、則ち事々準を失ふ。元友其れ之を勉めよや。」と。

㊇蠡は猪口と見てすむ。
㊈孟子に「志は氣の帥なり、氣は體に充てるなり、故に其志を持して其氣を暴する勿れ。」
㊆蓋し耆婆は先輩に喩へ、百草は後進に喩へしものならん。

㊆潁濱先生蘇子由、嘗て筠陽に謫せられ、眞淨と道契す。嘗て頌あり、㊆香城の順和尙に寄せて曰く、

「融二却無窮事一。　都成二一片心一。　此心仍不レ有。　從レ古至二如今一。」

又曰く、

「如見復如亡。　相逢唉一場。　此間無二首尾一。　尺寸不レ須レ量。
欲レ識二東坡老一。　堂々一丈夫。　近來知二此事一。
也不レ識二文書一。」

東坡も亦貶所にあつて、公の深く此の道に向ひ、其の所居に榜して東軒と曰ふと聞いて、詩を以て之に戲れ、「盛二取東軒長老一來」の句あり、子由之に答へて曰く、

「縱使盛來無二用處一。　雪堂自有二老師兄一。」

と、又嘗て淵明の一詩に和して云く、

「佛法行二中原一。　儒者恥レ論レ玆。　功施二冥々中一。　而何負二當時一。
此方舊染雜。　渾々無二名緇一。　治生守二家室一。　坐使二斯人疑一。
未レ知二酒肉非一。　寧與二生死辭一。　熾然吾闔中。　佛事不レ可レ思。

㊆蘇轍字は子由、老泉の子、軾の弟なり、蘇轍、軾を救ふて上書し、筠陽の權莞に貶せらる。
㊆順は黃龍に嗣ぐ、順と子由の父老泉と友たり、故に子由の謫せらるるや、順往いて訪ひ、擂鼻の因緣を擧示し、子由をして發明せしむ。

生レ子多ニ穎悟一。　得レ報不ニ汝欺一。　時有ニ正法眼一。　一出照ニ曜之一。
誰謂邑中豪。　請誦ニ我此詩一。」

晁光祿迥、精しく內外の敎典を窮め、晩年に自ら法藏碎金を著し、儒釋の中に流行す。其の語甚だ敎化に敦し、「儒に曰く、『士の志あるものは學無かるべからず。』と、故に佛書に云く、『無學の者は其の理別つことなく、若し其の語を會して因循自棄せば、猶ほ惜しむべきがごときなり。』と、余、三敎の書を觀て、粗粗必學の意を見る。儒の周易に曰く、『君子德に進み業を修む』と。道敎に老聃曰く、『上士は道を聞いて勤めて之を行ふ』と。釋の寶積經に曰く、『猶は大龍の如く、所作已に辨じて、重擔を捨てゝ、殆んど己利を得』と。余、因つて會同參究して、其の文句の類せざるを知ると雖も、而も必ず德は學に從ふこと疑なし。加ふるに耆年の志深を以てし、至窮に流さんとす。」と、最後の一說は、萬劫と雖も易ふべからざるなり。

㊂後は語錄の後なり。

大圓禪師は四明の人、道林の一に嗣ぐ。一は祐山の宮に見え、宮は黃龍の南に見ゆ。故に其の親しく黃龍の宗旨を得るや、三關の頌幷に拈古あり、盛に叢林に行はる。初め妙喜其の坦率にして事を事とせざるを聞いて、甚だ樂まず、其の拈古を觀るに及んで、乃ち几を撫して善しと稱賞す。曰く、「眞の黃龍の正傳なり」と。筆を掇つて四句を㊂後は大書して曰く、

「七佛命脈。　諸祖眼睛。　但看ニ此錄一。　一切現成。」

是に由つて、學者方に二師の用處、初より二致無きことを知る。然れども智、嘗て人に謂つて曰く、㋐「果妙喜の作用は巖頭死心に減ぜず、謂つべし百世の師なりと。但だ未だ老僧と㋑那事を商確せざることを。若し老僧を見ること一回せば、定めて他をして光前絕後ならしめん」と。然も二師竟に相見ず、智は石霜に終ふ。預め旬日に弟子の生祭を受け、法座上に就いて端然として化し去る。方に知る、妙喜の輕々しく人を肯はざるを。

㋐妙道道人は延平黃氏の女なり、徧く尊宿に見え、後に妙喜に徑山に謁す。因に妙喜室中に僧に問ふ、「不是心、不是佛、不是物、是れ什麼ぞ。」僧措くことなし。道門外に立つて之を聞いて、豁然として明契し、乃ち喜に告ぐ。喜曰く、㋒「桑樹箭を著け、楮樹汁を出す」と、因つて其の所解を印す。後に洪福に開堂す。衆に示して曰く、「禪は意想にあらず、意を立つれば宗に乖く。道は功勛を絕す、功を建つれば聞を失す。聲外の句意中に向つて求めず、照用の機關を持し、佛祖の鉗鎚を握り、有佛の處互に賓主となり、無佛の處風颯々地なり。心寧意泰、響順聲和、恁麼の人に似ば、旦く道へ、什麼の處に安著せん。」良久して曰く、「簑を披して側立す千峰の外、水を引いて蔬に

㋐果妙喜の作用云云、此評語は大惠文遠禮佛の則を拈じて、「趙州挂杖雖ニ然短一、腦後圓光又一重」の頌を見て、評せしものなり。

㋑那事を商確云云、是は大圓が後句を改めて「劃破華山千萬重」とすべし、然し老僧と此事を商確せざるを惜むと云ひしなり。但し此處著者圓融して省略の跡を認めず、委曲は枯崖漫錄の上卷に載す。

㋒妙道は溫州淨居に住す、尙書黃裳の女、大惠に嗣法。（續傳燈卷卅二）

㋓桑樹云云、桑の木に箭があたると楮樹から、たらたら汁を出すとなり。

澆ぐ五老の前。」又曰く、「眉毛を貶上すれば蹉過す、大いに眼を開いて尿床するに似たり。現成の公案、放行せば正に是れ㋓黠兒落節、恁麼不恁麼、摠に得ざるも、㋔尾を曳くの靈龜、不是心、不是佛、不是物なるも、虛空に釘橛す。許多の㋕閑門破戸を離得するも、猶ほ是れ死水裡に龍を藏す。傾湫倒嶽の一句、作麼生か道はん。巨靈手を攙ぐるに多子なし。分破す華山の千萬重」と。後に水庵、僧の擧似するを見て、㋖手を以て額に加へて曰く、「箇の事謂つべし男女等の相にあらず、多少丈夫の漢、十年五年衆中に在れども、㋗討頭不著なり。他は是れ箇の女人なりと雖も、宛も丈夫の作あり、却つて多少杜撰の長老に勝れり。」と。

㋘機簡堂初め饒の筦山に住すること十七年、㋙火種刀耕、備に艱苦を嘗む。其の住まる所の者、皆四方の本有なり、故に能く同じく寂寥を受く。世間の榮耀を以て事となさずして、布素一節なり、故に世之を機道者と謂ふ。後に九江の圓通に居り、大いに此庵の道を行ず。示衆に云へるあり、「圓通㋚生藥鋪を開かず、單々に只死猫頭を賣る。知らず那箇の無思算か、喫着して通身に冷汗流るや。」と、是れより太平の隱靜に遷る、衆多くして堂厨淡薄なりと雖も、兄弟敢て

㋓黠兒落節は、欲深の身代限り、又は水練の達者が水におぼれると同じ。
㋔尾を曳くの靈龜は、龜が「うろ」の中へ隱れるに、美事足跡をぬり消しても、尾の跡は殘りて居る。
㋕閑門は夜逃げ、破戸は身代限りなり。
㋖手を以て額に加ふは、遠く望む貌。
㋗討頭不著は、脫洒自在ならざるなり。
㋘簡堂行機禪師は元布袋に嗣ぐ、元は圜悟に嗣ぐ。
㋙火種刀耕は、草を燒いて植付け、刈りて耕すなり。
㋚生藥鋪は「きぐすり屋」なり、無思算は、馬鹿物なり。

之を言ふ者なし。凡そ執事を請ふには、必ず老黃龍の法に遵ひ、粥罷んで鉢を掛け、堂に向つて侍者をして白槌せしめて曰く、「某人を請じて其の識を執らしむ」と。兄弟之に從はざる者なし。倘し違ふ者あらば、卽ち之を叱して曰く、「簡堂が這裡、做さずんば爾甚の處に向つて做さん。噫、前輩道重うして、人を用ふること此くの如く容易なり、豈今時の七跪八拜、㋛下情無任、猶ほ渠に跨跳して三十三天に上り去らるゝが如くならんや、苦なるかな、佛陀や。」と。

㋜證西林は老衲と號す、長沙の人、月庵の嗣なり。月庵、道林に居りしとき、證寮元となり、已に兄弟の爲めに挂牌入室す。其の人となり至誠鄭重、暗室に處ると雖も大賓に臨むが如し。兄弟之を見れば、其の容必ず莊なり。後に西林に居り、道行はる。話墮の公案を頌するあり、曰く、

「石火光中立問端。　不能透脫幾多難。
頂門若具金剛眼。　肯被傍人把釣竿。」

蓋し其れ親しく月庵の說話より得たり、又且つ甚だ窠臼を脫するのみ。始め保安の㋝封、亦月庵に見ゆ、見地尤も別なり。亦嘗て頌して曰く、

「歲暮抱琴何處去。　洛陽三十六峰西。　生平未知先生面。
不得一聽烏夜啼。」

㋛下情無任とは謙遜の語なり、尺牘に往往、下情屏營に任ふるなしとの語を用ふ。
㋜證西林、月庵の法嗣、祖證禪師は老衲と號し、行業頗る綿密なり。
㋝封、復庵可封禪師、月庵に嗣ぐ。
㋞烏夜啼は李白の詩なり。

㋐善く柳下惠を學ぶと謂ふべし。終に其の迹を師とせず、頂門に㋑爍迦羅眼を具するもの、分明に辨取せよ。

詢罵天、見地明白なり、嘗て佛鑑に侍す、鑑、其の形容醜黑にして㋒談天の者も亦其の福寡しと曰ふを以て、一日偶々詢に謂つて云く、「惜しむべし、一顆の明珠、儞く者の乞兒に拾得せらるゝを。」詢云く、「和尚且つ牢く收取せよ。」と、又一日謂つて曰く、「一切衆生、何ぞ嘗て悟り來らんや。」詢曰く、「一切衆生何ぞ嘗て迷ひ來らんや。」忽ち一行者あり、面前に過ぐ、鑑曰く、「如何なるか是れ祖師西來意。」行者措くことなし。鑑曰く、「何ぞ嘗て悟り來らん。」詢亟かに行者を呼んで曰く、「放參するや、也た未だしや。」者曰く、「放參し了んぬ。」詢曰く、「何ぞ嘗て迷ひ來らんや。」鑑叱して曰く、㋓「業種出で去れ。」詢曰く、「和尚且つ低聲せよ、恐らくは外人聞き得て、我父子二人、此に在つて迷と說き悟と說くとせん。」鑑大いに咲ふ。

劍門の分庵主は閩の人、早歲道に於て自ら發明あり、竟に剃髮して鄉里を走る、時の人之を狂僧と謂ふ。分、恤へず、初め懶庵の需に見え、後妙喜に雙徑に謁す。其の風顚を聞いて、決して參堂せしめず。分乃ち憤に乘じて山を下り、將に歸計を求む。因つて錢塘江上に抵つて舟を買ひて、浙江亭畔に竚立す。泣下つて曰く、「我れ㋔波々吒々、嶺を出で來つて妙喜に見ゆ、又衆に預ることを得ず、是れ

㋐善く柳下惠を學ぶものは、其心を取つて其跡を師とせず、魯の男子、是れなり。
㋑爍迦羅は金剛となす、卽ち金剛の眼睛なり。
㋒談天とは人相を見るものなり、談天の文字は史記に出づ。
㋓ばけものの業、畜生出で去れとの意也。
㋔波波吒吒は奔波して休息せざるなり。

夙に般若の緣無きなり」と。忽ち喝道の者の「侍郎來」と云ふを聞いて、分、豁然として大悟す。乃ち頌あり、云ふ、

「幾年箇事挂二胸懷一。　問二盡諸方一眼不レ開。
一聲江上侍郎來。　今日肝腸忽然破。」

徑ちに洋嶼に歸り、懶庵に依る、懶庵其の所得を印す。未だ幾くならずして、忽ち辭し去る。懶庵偈を以て之を送つて曰く、

「江頭風急浪華飛。　南北相逢不レ展レ眉。
獨有二分禪英俊手一。　等閑奪二得錦標一歸。」

後七閩に徉狂す。或は㋕酒肆に入り、或は魚行に在り、人能く測るなし。唯だ同參の木庵永、見る每に必ず師を以て之に事ふ。嘗て衆に示して云く、「這の一片の田地、汝等諸人且く道へ、天地未分已前、什麼の處に在る。直下に徹し去らば、已に是れ分上座を鈍置し了んぬ。更に若し擬議思量せば、何ぞ啻に白雲千里萬里のみならんや。」と、暮に拄杖を拈じて大衆を打散す。又曰く、「十五日以前は天上に星あり、皆北に拱ふ。十五日已後は人間水として東に朝せざるなし。已前已後、摠に拈卻するも、到る處鄉談各々同じからず。」乃ち手指を以て屈して云く、「一二三四五六七、八九十十一十二十三十四。」復た云く、「諸兄弟且く道へ、今日是れ幾くぞ。」良久して云く。㋖「本

㋕酒肆魚行は、市上にあつて酒を呑み肉を食ふなり。
㋖本店賣買云云、已の店は、懸値なしとて、宗旨は驀直に如是なる底を擧せる也。

店賣買分文不賒。」と。

伊庵の權は臨安昌化の人、無庵の㋑余に嗣ぎ、萬年に出世す。一坐九年、法席大いに振ふ。然れども權の身を律し、衆に奉ずる、言行倶に準繩あり、大率佛智の裕、㋩誰庵の粹の人となりに効ふ、座下常に五百衆を安ず。自贊あり、云く、

「鼻如二鷹嘴一。　對面千里。　要レ識二萬年一。　只這便是。」

叢林倶に之を愛す、後常の華藏に遷る。結夏の示衆に云ふ、「今朝布袋口を結卻す。明眼の衲僧、亂走を休めよ。心行滅する處飜身を解す。㋥噴嚏も也た獅子吼を成す。㋭栴檀林馳驟に任す。眉毛を剔起すれば頂上に生ず、肉を剜つて瘡を成して家醜を露す。」

高宗・孝宗、皆彌勒大士の贊あり、叢林有道の士、之に和せざるなし、二帝の意に愜ふ者ある少し。贊に曰く、

「碧落片雲。　長天孤月。　能棲二物外一。　妙兮幽絶。
慣隱二市廛一。　奇哉英傑。　隨レ行兮惟有二挂杖布袋一。
充レ飢兮何妨二酒肉腥血一。　別々。㋬玉殿瓊樓更加レ雪。」

又云く、

「袋貯二乾坤一。　杖挑二日月一。㋮蕭々蕭々聖中絶。㋯憨々癡々僧中傑。
令行兮一棒一條痕。　逗レ機兮一掬一掌血。　別々。　恰似二紅爐一點雪一。」

乾道の間、㋰直道者保寧に住す、嘗て之に和して曰く、

「量包二太虛一。　眼懸二日月一。　住二天宮一兮天中之絶。
居二人間一兮人中之傑。　放二下布袋一兮坐二斷四大部州一。
拈二起挂杖一兮直得二大地流レ血。
別々。㋱明々有レ理難二分雪一。」

范使李公爲めに奏上す、孝宗大いに之を喜び、錢五百萬、米五百斛を賜ひ、以て衆供を助く。

別峯の㋑印、金山より乳峯に遷る、醫生陸安なる者あり、夜夢に神人報じて云ふ、「師は卽ち㋺達觀頴の後身なり」と。師、天資閑暇、華藏の珉に嗣ぐ。自ら蜀を出で、卽ち双徑に抵り、妙喜に見ゆ。喜問うて云く、「甚の處より來る。」印云く、「西川。」喜云く、「未だ劒關を離れざるに、爾に三十棒を與ふ。」印云く、「合に和尚を起動すべし。」喜、楞伽室に館し、之を待つこと甚だ厚し、大刹に歷居するを得。晚に詔を奉じて徑山に居る、一住九年、

㋑余の字誤りなり、全とすべし、蓋し字形似たるを以て誤れるなり、全無庵は佛智裕に嗣ぐ、裕は圜悟に嗣ぐ。
㋩誰庵の粹。
㋥噴は吹き出すこと、嚏は「くつしやみ」なり。
㋭栴檀林は、叢林と同じ、東福寺に禪堂の額あり、栴檀林と書す、張卽之の書にして名筆なり、但し栴檀林は荊棘林と對する語なり。
㋬玉殿瓊樓の文字は、彌勒の樓閣より來る。更に雪を加ふとは、雪上に霜を加ふると同じ、但し誠に見えすきたる別語なり。無賢はおいらの屋敷へ、叢をまきくさつたと、云ひはせぬか。

㋮蕭々は、ふしだら千萬と云ふが如し。
㋯憨憨癡癡は、横著な馬鹿づらと云ふが如し。
㋰直道者は大惠の法嗣、一庵善直禪師なり。
㋱明明有理云云、罪人が充分明しを立てる理窟を持つて居ながら、其れを云ふことが出來ぬ、誠にありがたい別語で、布袋のほてつぱらじや。
㋺印別峰は華藏安珉に嗣ぐ、珉は圜悟に嗣ぐ、正誤正譜に珉民に作る、是なるが如し。
㋻達觀曇頴は、石門聰に嗣ぐ、神情秀特、書に於て讀まざるなし、嘉祐四年除夕沒す、年七十二。（僧寶傳廿七）

毎に華嚴を以て佛事を作す。紹興庚辰、菖蒲田に示寂す。徑山の塗毒を辭するとき、毒曰く、「和尚幾時か行止するや。」印曰く、「水到つて渠成る」と、卽ち端坐して逝く、其の年臘月八日なり。行に臨んで門人偈を覓む、卽ち大書して曰く、

「千偈萬偈。　總是㋑熱荒。　我有二一句一。　死後擧揚。」

塗毒亟かに龕を捧げて返り、法堂の正寢に歸し、七日當代を以て禮送す。時に之を感ず、後二年塗毒歸寂を示す、人々報德の心を懷く、印に山中の書懷あり。

「一味林間飽㋺黑甜一。　儘教氣燄日炎々。
不下將二無病一自求病。　多是解レ粘添二得粘一。
㋭粗有二芋煨一如二懶瓚一。　㋬更無錐卓一似二香嚴一。
枕邊留得青山在。　雨後層々翠滴レ簷。」

又嘗て農夫醉打の圖に題する一絕に、

「農夫何事損二天和一。　醉後依前擊レ壤歌。
不レ似當年㋻劉項飲。　胸中各自有二干戈一。」

㋼塗毒老人鑑湖に居るの日、㋽放翁と最も厚し、紹興壬子七月二十七日示寂す。放翁、詩を以て之を哭して曰く、

「岌々龍門萬衲傾。　翩々隻履又西行。　塵侵二白拂一繩床冷。
露滴二青松一卵塔成。　遙想再來非㋾四八一。　應當二相見是三生一。」

放翁大いに修行力を欠いで、未だ人間愴別の情を免れず。又其の眞に贊して云く、

「骨格瓌奇。　精神瀟灑。　貌肅而和。　語盡而簡。　畫得者英氣逼レ人。
畫不レ得者頂門上一隻眼。」

㋿石窗恭禪師、徧く諸方に參じ、久しく黃龍の㋾忠道者に依り、後、宏智に依る。靖康中、湖湘より東越に歸る、忠、頌を以て之を送つて曰く、

「閑思昔日戲二沙洲一。　屈レ指于今四十秋。
君到二石窓一閑借問。　許多風月付レ誰收。」

恭越の報恩に出世す、後に瑞巖に居り、其の道大いに振ふ。然れども克苦爲人、布素以て寒暑を禦ぐ、事細大となく必ず親ら之に臨む。叢林整齊にして、衲子風を望んで服す。嘗て佛生日の頌あり、曰く、

「五天一隻蓬蒿箭。　攪動支那百萬兵。
幾乎錯認二定盤星一。　不レ得二雲門行二正令一。」

㋑熱荒は熱閑荒唐の意ならん。
㋺黑甜は「ひろれ」なり。
㋭明瓚禪師は唐の德宗の時の人、衡岳に隱る、性懶にして殘を食ふ、故に懶殘と號す、嘗て馬糞を集めて芋魁を煨く、德宗の使偶々到り、徵して京に上らしむ、瓚應ぜず。
㋬香嚴智閑禪師の頌に曰く、「去年貧未二是貧一、今年貧初是貧、去年貧猶有二卓錐之地一、今年貧錐也無。」仰山之を聽いて曰く、如來禪は師弟の會するを許す、云云。
㋻劉項鴻門に會して飲酒酣醉す、而も內に殺機を藏す。
㋼塗毒智策禪師は黃龍派、前出。
㋽陸游字は務觀、放翁と號す、南宋屈指の詩人なり。
㋾四八、名公法喜志には四大に作る、八疑らくは大の誤。
㋿石窗法恭は、宏智覺に嗣法す、曹洞下。
㋾黃龍忠は佛眼清遠に嗣法す、奇人なり、嘗て劍を揮つて死心の室に入る。

叢林之を沸傳す。㋐徹白頭なるものあり、三衢の人、恭と同じく宏智の門より出づ、操履孤潔、世と接せず。嘗て賓を太白に典る。妙喜、大俊敏なるを見て、私かに之を喜び、計を以て其を誘ふて㋑玉几を過ぎしめんとす。徹、志を秉つて渝らず、竟に老天童に依る。乾道の初め、恭羅籠して以て嗣と爲さんと欲し、明の報恩を退いて、與めに出世せしめ、住すること二年、四方の龍象每に之に歸す。然れども徹、竟に宏智に嗣ぐ、恭以て樂まず、徹、也た卹へず。後婺の華藏に遷り、將に發せんとして示寂す。行に臨んで遺偈を書して云く、

「當陽一句。　更無回互。㋒月落寒潭。　烟迷古渡。」

是れ眞に洞上の宗を得たり、惜むらくは、其の久しく世間に住せざるを。

孝宗皇帝在位二十七年、每に諸山の長老に宣して道を論ず、唯だ㋓佛照禪師最も知遇と爲す。淳熙の初め、冷泉に住す。宣して選德殿に入れ、宗門の事を論じ、五たび禁園に宿す、古より未だ有らざるなり。故に佛照嘗て奏して曰く、「陛下、前後諸山の長老に宣して道を論ず、如何ん。」孝宗曰く、「長老の直捷に似るを得難し」と。佛照又奏して曰く、「臣山林に生長す、語言麤疎、伏して乞ふ陛下寬貸せよ。」孝宗曰く、「妨げず、這裡長老と忘懷して道を論ずるを」と。前後諸山に賜ふの偈語、多からずとせず、佛照に賜ふもの最も尊敬をなす。聖語に曰く、

「大暑流金石。　寒風結凍雲。　梅華香度遠。　自有一枝春。」

㋐了堂思徹禪師は光孝に住す。
㋑玉几は徑山なり。
㋒好遺偈なる哉。
㋓大惠の法子、佛照德光禪師。

佛照嘗て之に和す。一日又佛照に批問して曰く、「世尊雪山に修道六年、成ずる所の者は何事ぞ、請ふ師明かに說け。」時に佛照施主家の齋に坐す、天使忽ち到り、便ち回奏を請ふ。照、著語して云く、「將に謂へり陛下忘却すと謂つべし、無師自然の智也。」と。

誰庵の演は閩の人、初め妙喜に回雁峰下に參じ、宗旨を洞明す。喜曰く、「這の猢猻子、以後須らく人を括搔し去ることあるべし」と。後に妙喜を辭す、偈に曰く、

「倒騎鐵馬一度瀟湘。　磵草巖華不覆藏。
回雁峰高親到頂。　更無佛法可商量。」

後に江上の龍翔に住す、兄弟多く之に依る。水庵、偈あり、曰く、

「江上如今得白眉。　爲人徧用截流機。」

と。然して演善く偈語を作り、宗眼端正なり。新昌の石佛に題して曰く、

「積念有年瞻石佛。　今朝一見絕疑猜。
都盧面目只如此。　却謂三生鑿出來。」

又㋔龍湫に題して曰く、

「詎羅坐斷大龍湫。　伎倆却無錯路頭。
只見高巖傾瀑布。　那知碧嶂外清幽。」

㋔龍湫、夢溪雜談に、溫州の雁蕩山、祥符中始めて人の之を見るあり、西域の書に、阿羅漢、諸矩羅は震旦の東南大海のほとり、雁蕩芙蓉峰の龍湫に居る、唐の貫休の詩に諸矩羅の贊あり、曰く、雁蕩經行雲漠漠、龍湫宴坐雨濛濛。（佩文韻府）
㋕少溪の此庵守淨禪師は大惠に嗣法す。

別峰の雲は㋙少溪の淨に嗣ぐ、淳熙の間、福の支提に住す、江浙の道に志す者之に依らざるなし。

嘗て㋚善財南詢の頌あり、曰く、

「髮角分明者小兒。　肚皮好待ニ儞聞知一。
敗闕都盧納ニ向伊一。」　賺ニ他五十三知識一。

叢林競傳す、後に莆陽の華嚴に遷つて終ふ。

㋛洪首座は臨川の人、佛照に嗣ぎ、洪の光孝に出世す、蓋し漕使尤延之の命に應ずるなり。次任の太守、旦望の公參に、諸山の公廳の下に就いて長揖して退かんことを須要す。洪之を聞いて樂まず、以謂らく、「天下此の道理なし」と、卽ち鼓を擊つて升堂し、院を退いて去る。頌に曰く、

「祖翁活計元來大。　誰敢區々謾㋟折腰。
珍重豫章賢太守。　芒鞋竹杖任ニ逍遙一。」

太守之を聞いて慚づること甚だし、使を遣はして再請す。洪竟に回らず、江西の諸山此れより氣を增す。後、吉の祥符に住す、開福に遷つて終ふ。尤延之侍郎親しく爲めに傳を作る。

㋝一和尙自ら村僧と號す。草堂の淸に嗣ぐ、久しく平田に住す。後に長蘆力命すれども赴かず、皎如晦の一疏を以てして往く。其の詞に曰く、

㋙善財南詢、善財童子は、南方に五十三の善智識を尋ねて、遂に無始劫以前の事を分明に了得し、一時に、千萬劫、無量の諸善德に會ふことを得たり。南方は北に對して、分明の地に喩へし也。今は、是を頌す。

㋚芝岩慧洪禪師、佛照に嗣ぎ、佛照は大惠の法嗣。

㋟陶淵明曰く、吾豈五斗米の爲めに折腰して、鄕里の小兒に拜せんやと、卽日官を辭す。

㋠村僧法一禪師は草堂に嗣ぐ、草堂は晦堂に嗣ぐ、黃龍派なり。

「這般梵刹固非ニ些小叢林一。　箇樣村僧豈是尋常種草。
要レ得ニ門當戶對一　還ニ他境勝人奇一。
某人。　生鐵面皮。㋡潑天聲價。
盡ニ大地一揑成ニ院子一未レ稱ニ全提一。　將ニ河沙一都做ニ衲僧一不レ消ニ一喝一。
㋢且看光火菩薩面。　掉卻跺距羅漢家。
來撐ニ沒底船一激ニ起蘆華千尺浪一。　宜下舉ニ向上句一祝延㋣玉葉萬年人上」
と。巢、既に一葦に住し、次年に復た萬年に歸る、未だ幾くならず、觀音院に示寂す。先づ自ら龕に入り、鏁を落して、偈を說いて曰く、

「今年七十五。　歸作ニ庵中主一。　珍重觀世音。
泥蛇含ニ石虎一。」

平田に居りしとき、衆常に五百、時に江西湖潭に化士あり、㋜大寂の塔を修す、兄弟皆頌を作る。時に一座主あり、初めて更衣入衆す、因つて一頌を成して曰く、

「寄レ語江西老古錐。　從ニ他日炙與ニ風吹一。　兒孫不ニ是無ニ料理一。
要レ見氷消瓦解時。」

又冬日の卽事を作つて云く、

㋡潑天は大を形容するの語。
㋢光火菩薩、跺距羅漢。
㋣玉葉萬年、今上皇帝と云ふが如し。
㋜大寂は江西の馬祖道一禪師を指す。

「朔風也解知二人意一。吹落巖前古樹枝。惠レ我一爐深夜火。
轉教二心性懶レ趁レ時一。」

雪巢之を見て大いに稱賞して曰く、「禪和子、三十年衆に在つて疎餐すれども、未だ必ず此の作あらず、他日必ず大器と成らん」と、後果して言の如し。東掖に住して大いに南台の教を興す、是を神照師と謂ふなり。

㋔松源、東湖に在りし日、佛殿を幹するもの頌を乞ふ、源大書して云く、

「黃面瞿曇眼㋕瞪瞠。千方百計討便宜一。
于レ今無下著二渾身一處上。却要三兒孫蓋二覆伊一。」

官人に示して云ふ、

「說レ禪說レ道說二文章一。林下相逢唉幾場。
踏二著吾家關棙子一。㋖白衣拜レ相也尋常。」

湖海爭ふて之を誦す。

曇廣南は久しく密庵に依る。後に佛照の會中に在つて寮元となる。化鹽の頌あり、云ふ、

「合水和泥一處烹。水泥盡處雪華生。便能索二起㋗遼天價一。
公驗分明誰敢爭。」

㋔松源崇岳禪師は密庵傑に嗣ぐ。傑は應庵華に嗣ぐ。

㋕瞪瞠は、瞪は「さかりめ」、瞠は「ぼつとする」なり、蓋し老年になりて、眼がぼつとしたと云ふ意ならん。

㋖煩惱卽菩提、生死卽涅槃、一超直入如來地、故に白衣相に拜するも也た尋常なり。

㋗遼天價は、滅法界の直段、公驗云云は、支那にては鹽の私鬻を許さざるより來る。

佛照喜んで曰く、「這の㋘廣南蠻、也た茆廣」と。後に雪の道場に住し、其の道將に振はんとして、有力者の爲めに攘はる、未だ幾くならざるに冷泉に終ふ。

㋙雷庵受首座は平江の人、道貌脩偉なり、久しく月堂・拗堂の諸老に依る。曾て㋚普燈三十卷を集め、又楞伽を註す、雪の曹氏庵に庵す。抒山居士劉季高の姪、平氏なる者と、最も善し、慶元の初め復た西湖に庵す。劉公丹丘に任ずるとき、巾子峰の報恩を以て之を招く、頌を以て謝して云く、

「結レ茆方喜倚二長松一。一枕清風睡正濃。
禪道尙無レ心二理會一。肯將レ身入二鬧藍中一。」

劉見て大いに喜び、再び使を遣はして之に迫り、亦前韻を和して云く、

「昂藏骨相倚二喬松一。晚歲清陰只自濃。
好向紅塵一姑著レ脚。何妨都有二咲談中一。」

竟に赴かず、時皆之を高しとす。當今、尾を搖し憐を乞ふの時、寧ろ復た此の人あらんや。

大惠、雙徑に在りし時、一千七百の龍象あり、㋛行者祖慶なるものあり、母の爲めに忌を設け、頌を乞ふ。惠其の骨相凡ならざるを見て、之に一頌を與へて曰く、

㋘南蠻は孟子に南蠻鴂舌の人とあり、茆廣は反切葬、手荒きを云ふと。（諸錄俗語）

㋙雷庵の虛中の受禪師は、月堂昌に嗣法す、昌は思慧妙湛に嗣ぐ、湛は法雲善本に嗣ぐ、雲門宗。本は月照宋本に嗣ぐ、雲門宗。

㋚普燈錄は五燈の一なり。

㋛祖慶、後に雲庵禪師と稱し、大惠に嗣ぐ。

「透ニ過那一著。　佛亦不レ能レ容。
猛虎當レ路坐。　狐兎自潛レ蹤。」

慶、妙年にして南源に出世し、道林に移る。一夕、寶公二十隻の筯を以て之に與ふ、既に覺めて測ることなし。時に劉樞密洪父、金陵に帥たり、鐘山を以て之を招く、一住二十年、中間㋐回祿に因つて復た之を新たにす、豈に偶然たるものならんや。慶元の初め、佛照、五峰より育王に歸る、慶遂に踵を繼ぎ、二年にして沒す、信に妙喜の言謬らざるなり。

晦庵光和尚は㋑雪堂行に嗣ぐ、龜峰に住し、泉の法石に遷る、蓋し參政周公葵の命に赴くなり。臨終に頌を以て小師㋒元聰に授けて曰く、「叢林の毒種元聰侍者、耐へ耐し吾が宗汝が邊に滅せんことを。吾れ今枕を高うして百無憂、聰汝時に塗毒鼓を撾て」と。聰は久しく密庵に依り、衆に徑山に首たり。洪の報恩に出世し、雲居・隱靜・雪峰に遷る。晚に旨を被り徑山に居る。時に謂ふ、「晦庵は妄に許可せず」と。抑々亦雪堂、慈悲行の遺蔭するところか。

圜悟初め成都の講肆にあり、㋓范丞相伯才、其の器質の凡ならざるを見て、因つて長篇を作つて其の南方に往いて行脚せんことを激す。其の詞に曰く、「水を觀ば汚池の水を觀ることなかれ、汚池の水

㋐回祿は火の神の名、回祿の災に罹れるなり。
㋑雪堂は佛眼に嗣ぐ、眼は五祖演に嗣ぐ。
㋒濠庵元聰年廿七にして得度し、特逢の發明を得たり、投機の偈に曰く、「了了了徹底了、無端赤脚東西走、蹈破青空月一輪、八萬四千門洞曉」と。
㋓范丞相、錦江禪燈には范蜀公に作る、范蜀公は仲淹にして、慶曆の名臣なり、圜悟と少しく時代合はざるが如し、仲淹、字は希文にして、伯才にあらず、未だ何人なるを知らず、此詩流暢誦すべし、佳作なり。

は魚鱉卑しむ。山に登らば㋔透邐の山に登ることなかれ、透邐の山は艸木稀なり。水を觀ば直に滄溟の廣きを觀よ、山に登らば直に泰山の上に上れ。所得少からざれば所見高し、工夫用ひ盡して徒勞にあらず。南方幸に選佛の地あり、好し其の中に向つて妙旨を窮めよ。他年器を成して頹綱を整へば、男兒出家の志に負かざらん。大丈夫兮擬議するを休めよ、豈虛名の爲めに身計を滅せんや。歡諧の時節苦だ多きなし、却つて光陰に暗に歲を添へらる。成都況や是れ繁華の國なるをや。打住只だ華酒に因つて惑ふ。吾が師は本是れ出塵の人、肯て齷齪に隨つて同じく埋沒せんや。吾が師幸に虹蜺の志あり、切に蹉過して泥水に向ふなかれ。君見ずや呑舟の魚は小流に隱れず、合抱の木は豈丹丘に生ぜんや。大鵬一たび展ぶれば九萬里、肯て飛燕の沙鷗に著くに同じからんや。如何ん急流千里の驥、鷦鷯の一枝を戀ふを學ぶなかれ。直饒千の經論を講得するも、也た落つ禪家第二の機に。白雲本自ら高臺を戀ふ。暮に罩め朝に籠めて暫くも開かず。蒼生霖雨の望に赴くが爲めに、等閑に猶ほ自ら山を出で來る。又見ずや荊山に㋕玉石瓊瑤あり、良工に未だ逢はずんば蓬蒿に居るを。當年若し荊楚を離れずんば、爭でか連城の價の倍高を得ん。」と。

本朝の士大夫、當代の尊宿の爲めに語錄の序を撰し、語句斬絕なるものは、㋖山谷・無爲・無盡の三

㋔透邐の山は「のつぺり」としたる山なり、此處は山の小なるに就いて云ふが如し。
㋕玉石瓊瑤は、卞和の獲たる玉璞を云ふ。
㋖黃魯直山谷、無爲居士楊次公、無盡居士張商英。

大老に出づるはなし。今代蜀人に㋒馮唐可なるものあり、宗門に於て深く造入あり、石頭回禪師の與めに語錄の序を撰し、江湖之れを沸傳す。其の詞に曰く、「五祖に㋓南堂を得たり、糙暴生獰にして懃遠を凌跨す。天遒く地窄り、大隋に投老す。㋔回道者鎚を運し石を攻むるの手を以て、仰いで堅高を擊ち、力を出すこと既に麤にして、一鎚に便ち透る。歸つて釣魚山上に坐す。乖崖峭壁、其の師に十倍す。狠毒砒礪、口を下すべからず。其の徒㋕彥聞は更に瞥地ならず。餘毒を攻めて諸方に散施せんと要す。余後人の便宜を著けず、自ら僵仆を取らんことを恐る。故に爲めに其の茶毒を標して以て來者に示す。縉雲野老序す。」と。

無垢居士、張九成、妙喜に參じて、大發明あり、而して宗眼明白なり。嘗て㋖老大を以てして、又大言すらく、㋗「三乘十二分教、八萬四千餘卷も者の漢の面前に到つて、一唾を消せず。十信十住、十行十回向、等覺妙覺も、者の漢の面前に到つて、㋘一放に當らず。多年の臘果、五箇の虎子を養ひ得て、四海に横行し、大唐國裡、日本國裡、新羅國裡に向つて、屎を拋ち、屙を撒じ、直に得たり。乾坤漆黑、日月奔忙㋙須彌岌峇、四海に波を揚げ、

㋒馮唐可名は時行、巴縣の人、曾開等と和議の非を云ひ、秦檜の爲めに忌まれて左遷せられ、後仕へず、縉雲先生と稱す。

㋓南堂靜は五祖に嗣ぐ、佛鑑惠懃、佛眼清遠、大隋は四川にあり。

㋔石頭は元と石工なり、故に鎚を運らし石を攻むと云ふ、一鎚に便ち透るとは、石火の迸發を見て大悟せしを云ふ、釣魚山は成都にあり、石上に巨人の跡あり、相傳ふ、異人其上に座して、釣を江中に垂ると、狠毒砒礪は、何れも、烈しき毒藥の名。

㋕彥聞、正誤世譜禪燈世譜井會元等石頭の下に彥聞を擧げず。

㋖著者は蓋し此を以て無垢の自贊とせるに似たり、京都龍寶の眞珠庵に、無垢の贊に係る

慢く絲竹を調べ、箇の小坐を打す。看よ、渠が面皰は、大いに三家村裡の㋚田厖兒に似たり。而も其の用處は、猶ほ烏風黑雨、天雷閃電、霹靂聲中、㋛齊栗撥刺として、一大猛火を拖き去るが如し。咄、是れ甚の閑工事ぞ。」

蔣山の元は、慈明に嗣ぐ、元後に雪竇の雅を得たり、雅は慈覺の印を得たり、混融の然は實に㋜之に嗣ぐ。乾道の間、金陵の天禧に住す。時に㋝妙凝禪、保寧に住し、㋞明大禪、蔣山に住す、明然を薄んず。其の流派、黃龍・楊岐の直下にあらざるを以てなり。嘗て與に庭爭す、然、口辯捷なり、明頗る所困に遭ふ。竟に凝禪を得て、之を解きぬ。然、器量人に過ぎたり、但だ出世甚だ早く、諸方の門戶を歷ずして宗眼混淆す、故に叢林多く此を以て薄んず。後南華に住し、五羊に滅す。行に臨んで脫灑なり、邦人沈香を積んで以て荼毘す、一段の殊勝、小々なるにあらず。余と然と生緣所を同じうす。恨むらくは其の慈範を識らざるを。最も其の慈覺を祭るの一文を愛す、甚だ佳なり。曰く、

「建炎三年我れ忽ち㋟顚怪し、幞頭を拈下し、腰帶を把斷して、夜師の庭に盜む、師の捉敗に遭ふ。既に一物なく、空しく禮三拜す。是れより

六祖の像あり、蓋は陳就の筆にして、其贊語此文と全く同じ、然らば此文自像の贊にあらざること明かなり、無垢の書は、遒勁にして奔放、毫も拘束なきこと全く其人となりの如し。

㋗三乘十二分教、眞珠の贊、此前に「達磨四來より遐ひに大傳を相成じ、此老に到つて大にして又大」とあり。

㋘一放眞珠の贊、一枚に作る。

㋙岌峇は山の直立危高の貌、陸放翁の塗毒を弔ふの詩にも、岌々龍門とあり。

㋚田厖兒は田舍兒と同じ。

㋛齊栗撥刺は「びりばら」と讀み、猛火炎上の聲音なり、閑工事は「ひまつぶし」なり、眞珠の贊に是れの二字なし。

㋜之に嗣ぐとは、慈覺の印に嗣法せるなり。

㋝妙凝、世系前出。

退思し、恨小々ならず。人或は師を罵る。老いて㋲不唧嚕、了に能解なしと。我卽ち首を擧げ、天を仰いで慶怪す。人或は師を譽む、道は佛祖に超え、量は滄海よりも廓かなりと。我れ卽ち杖を持して、其の頭を擊つて碎く。如何ん若何ん。錯つて會するもの多し。敬んで薄奠を陳す。師咲つて婆娑たり。」

然に小師大驥なるものあり、淳熙の間、衢の靈曜に住す。時に朝廷方に役法を行ひ、二浙江淮の處、並に差定す。驥乃ち衢・婺・處三州の僧尼道士を糾率して、朝に造り之を免ず。今天下の僧、此に由つて安を獲、國家の差役を爲さゞるものは、蓋し驥の力ならん。後の圓頂方袍の者、當に自ると ころを知るべきのみ。驥後に天台の平田に住して卒す。

肯堂の充、卍庵の顏に見ゆ、性識敏利にして、博く古今に達す、前後作る處の語句甚だ多し。僧の簡初居士尤侍郎を訪ふて、典午和尙語錄の序を求むるを送る。其の詞に曰く、

「㋺岷峨山下三角の虎、跳つて南方に入る誰れか敢て侮らん。㋻渤潭の老準眼光を放ち、手を背にして暗に發す千金の弩、一箭的に中つて死し

㋺明大禪は、大惠に嗣法す、身長大腹、至る處衆を驚かす、故に皆大禪大禪と呼ぶ。大惠の育王に住するや、室中に喝を下すを許さず、而も大禪入室毎に、振聲一喝して退く、大惠榜示して曰く、喝を下すものは罰錢一貫と、大禪密に千錢を袖にして、高聲に連喝して出づ、大惠怒つて再び榜して曰く、喝を下すものは當に一堂に供養すべしと、大禪則ち庫司に往き、告げて曰く、和尙金五兩を要すと、庫司信じて之を出す、禪之を懷にして入り、高聲に一喝す、大惠大に驚き徐ろに問うて、之を知り、大咲して止む。(南宗元明僧寶傳卷三)

㋽顚怪は狡狂、幞頭は頭巾。

㋲唧嚕の反秀、不秀は愚なり、牟寄りて愚に歸ると云ふことなり。

て復た活す。此れより人を咬むに齒を露さず。武寧山中の四十年、豈獨り江西の路を坐斷するのみならんや。徑山の塗毒一口に遭ひ、今に至るまで理あつて雪ぐことなきの處、卻つて弟子をして㋾毘耶に往かしめ、居士を問訊して轉句を覓む、居士之を贊せんとして口卽ち啞す。居士之を罵つて目卽ち瞽す。贊罵及ばざるの處、請ふ渠が爲めに語錄の序を作れ。」と。

公安の珠は川の人、亦卍庵に嗣ぐ。人となり骨鯁にして、人能く親疎するなし。乾道の間、道、湖湘に行はる。嘗て自贊あり、曰く、

㋿「月色照ニ山容一。　泉聲落ニ斷崖一。　水光山色裡。
　一塊爛枯柴。」

又曰く、

「老鶴入ニ㋷枯地一。　善解レ藏ニ羽翮一。　點著背摩レ天。　壺中天地窄。」

瑞巖の順は㋸水庵に嗣ぐ、葦堂と號す。初め池の梅山に在り、嘗て上堂あり、云く、

「今朝五月十五、一夜淋々として雨を下す。知らず林下の道人、相逢ふて作麼生か擧せん。擧し得て全きも㋼攔胸劈面に拳す。甚麼として此くの如くなる、精金若し爐冶を經ずんば、爭でか光華散

㋼典午天游禪師は蜀の人、故に岷峨山下三角虎と云ふ、此送詞極めて妙、尤延之も斯かる文を見ては、序文を作るに骨が折れたであらう。

㋻渤潭老準は湛堂準禪師、卽ち典午の師。

㋾毘耶は維摩居士の住所。

㋿かけ離れたる自贊なり、奇體なる面相と云ふべし。

㋷枯地。

㋸水庵の一糙和尙は佛智に嗣ぐ、前出。

㋼攔胸は胸ぐらをとりしばるの意に用ひしならん。

底に鮮かなるを得ん。」

又、

「十日入室、五日陞堂、千醜百拙、埋藏するに處なし。咄、相牽ゐて鑊湯に入る。」

後に台の瑞巖に終ふ。

㋑萬壽の脩は閩の人、初め應庵に依り、後或庵に常の無錫に見え、雪の上方に出世し、雙塔に遷る。其の道未だ振はず、因に塗毒鑑上の能仁より持盌して吳門を過ぐ、衆善友小參を請ふ。脩㋺引坐して云く、

「正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却す。直に得たり盡大地の人、扶持し起さゞるを。是を以て曹溪路上に荊棘天に參り、少室峰前に髑髏野に遍し。盧扇にあらずんば、㋻膏肓の疾を起す能はず。孫吳にあらずんば、殺活の機を全うする能はず。塗毒一撾すれば、聞くもの皆喪す。要津を把斷して㋼風骨旋生す。既に是くの如きの宗師あらば、佛法は爛卻を怕れず。然も與麼なりと雖も、且く道へ、行に因つて臂を掉ひ、普く羣機を照すの一句、作麼生か道はん。三尺の靈光㋽摩竭の令、滿城の和氣、暖なること春の如し。」と。

㋑萬壽の無證了脩禪師は、或庵師體に嗣ぐ、或庵は大亂擾と稱せられし人。

㋺引座（坐は誤ならん）とは、他の尊宿の來訪する時、首座勸請して說法せしめ、住持は之が爲めに引座す、引座は、尊宿の陞座を道引する意。（象器箋垂說門）

㋻膏肓の疾は、不治の病なり、左傳に出づ。

㋼塗毒は奇相の人、故に風骨を云ふ。

㋽摩竭陀國雙林樹間に金波羅華を拈じて正令を下す。

下座す、塗毒手を握つて云く、「將に謂へり、或庵其の後人なしと、元來吾が姪の在るあり」と。此れより道、吳中に行はる。

㋾咲庵の悟は蘇の常熟の人、俗を弃てゝ出家す、初め無庵の全に見え、後密庵に烏巨に見ゆ。淳熙の間、衆に冷泉に首たり、專ら供養を以て心と爲す。時に歲大いに飢う、密庵持盌して未だ回らず、知事方來を㋿約束す。悟山門に坐在して一例に放入す。密庵の回るに及んで、知事之を沮む。密庵悟を見て悅ばざるに似たり。因つて辭して云く、

「但得三院子如二揲大一。盡レ情供養五湖僧。」

の句あり、時を逾えずして衢の祥符に住し、數刹を歷董して、果して供養を以て務となす。

雁山の枯木元禪師は妙喜に嗣ぐ。示衆の頌に曰く、

「雁山枯木實頭禪。不レ在㋿尖新語句邊。背レ手驀然拈得著。長鯨呑レ月浪滔天。」

潙山の寶亦大慧に嗣ぐ、叢林の老成なり。晚に大潙に居る、頌あり、云ふ、

「八十翁々輥二繡毬一。輥來輥去不レ知レ休。如今輥向二千峰頂一。坐看潙山水牯牛。」

㋾靈隱の笑庵了悟禪師は、密庵の法嗣なり。

㋿約束は挂搭を止むるなり、放入は皆堂內へ投り込むなり。

㋿尖新は、斬新鮮新と同じ。

空東山は福の人、初め艸堂の清に見え、後に妙喜に見ゆ。喜其の志氣超卓なるを見て、意に羅籠せんと欲す。頂相の賛を爲るに至つて、云く、

「慧空抓二著吾痒一處。吾嘗劄二著他痛一處。痛處痒痒處痛。不下與二千聖一同途。豈與二衲僧一共用。㊐誰知掃帚竹裡無二錢筒一。蒿枝叢內無二梁棟一。如今各自不知己。一任畫二出這般不喇嘔底老㋑凍膿一。從教挂向二壁角落頭一。使二盡夜燒㋒兜樓婆畢力迦沈水膠香一。作二七代祖翁供一。」

然れども空志を兼つて渝らず、竟に艸堂に嗣ぐ、叢林の有識者輩皆之を仰羨す。空善く語句を作す、東山外集あり、世に行はる。

「東山送レ人只一句。纔擬二欽承一喝出去。如今更向二紙上一求。大似二蒼鷹拏二狐兎一。上人上人知不レ知。端坐守レ之無二了期一。趂二取秋風霜木落一。㋓泐潭百丈在二江西一。」

と曰ふが如し。昇次山なるものあり、幽巖に住す、空の集を鏤めて江浙に流す。

庵堂道號は前輩例して無し、但だ居る所の處を以て之を呼ぶ。南嶽・青原・百丈・黃檗の如き是れなり。庵堂は寶覺心禪師より始まれり。事を黃龍に謝して、晦堂に退去せしかば人因つて以て之を稱す。自後靈源・死心・艸堂は皆其の高弟なり、故に遞に之に相法る。眞淨は同じく黃龍の門に出づ、故に亦雲庵を以て之を號す。覺範は乃ち雲庵の子なり、故に寂音甘露滅を以て自ら標す。大抵道號は名によつて之を召ぶものあり、生緣出處を以て之を號するものあり、工夫をなし契ふところあるによつて之を立つるものあり、所住道行によつて之を揭ぐるものあり、皆據るところあり、豈苟もすと云はんかや。今の兄弟、衆に入り來つて、未だ曾て夢にだも向上の一著子を見ず、早く已に各々道號を立つ、殊に其の本を原ねず。故に瞎堂の遠禪師、因に結制の次で、知事に問うて云く、「今夏の俵扇多少ぞ。」知事曰く、「五百㋔來柄。」遠曰く、「又五百所の庵を造らんとなり」と。蓋し禪和の庵なり、纔かに柄扇子を得ば、便ち箇の庵名を寫し定めんとなり、聞くもの大咲せざるなし。余の母氏、梵僧一月を頂いて之を懷中に投ずと夢み、既に覺めて遂に育するを以て、因つて古月を以て自ら號し、安穩眠を以て之を呼ぶ、蓋し覺範の甘露滅に彷ふなり。二號は維摩寶積に出づる所、故に橘洲の曇公、余の爲めに古月の說を作つて云く、

「萬古の長空、一朝の風月、古人を慚愧し、模寫し得て成ず。融禪未だ生せざるの夕、其の母夢に月を得、之を生子の祥となす。愧らくは今人模子を去却せざることを。融禪其の母に負かず、兼て古人を忘れず。古月を以て庵に名く、忝となさず」と。

㊐はうき筐の內に、錢筒は得離く、蒿のくさむらには、はりやむなぎは見出せぬ。

㋑老凍膿は「はなたれぢぢ」也。

㋒兜樓婆畢力迦は皆香のことなり。

㋓馬大師の舍利は泐潭の寶峰院に葬る、故に此處の泐潭は馬祖を指すなり。

㋔衆は俗語の程と云ふ意なり。

塗毒老人も亦四句あり、云く、

「萬古長空月。　何曾有二晦明一。　此心元一體。　隨處燭二精靈一。」

㋐安定郡王、超然居士と號す、東京に在りし頃の時、意を空宗に留め、長靈卓禪師に見えて打發の處あり、後事に因つて江西に謫せられ、虜人の東京を陷るに及び、宗室の諸王多く㋑二聖に隨つて北に陷る、居士此によつて免るゝを得たり。乃ち三衢に居り、馮侍郎至道幷に雪堂行禪師と方外の友たり。衢の人佛乘に信向するを知るは、多く茲より始まれり。嘗て南嶽法輪の㋒省行堂の記あり、最も高妙なり。又戒欲の文を選す、今此に錄す。

「嘗て謂ふ、世人無始時來大苦惱あり、身心を惑亂して出離を求めず、大いに苦むところのものは淫欲の事なり。此の苦は能く精神を昏塞し性命を戕賊す、德を障へ道を敗り、修行を妨廢す。毎に念じて私心潛散し、邪見動搖す。境緣の有無を以てせず、去處の淨穢を分たず、便ち顚倒を起し、忿に觸汙を行ふ。淨眼を以て之を觀るに、何の快樂かあらん。且つ情塵流轉し、慾火燒然たり。古より今に迨ぶまで、老幼貴賤其の害を被らざるなし。蓋し世人廣く財利を貪り、爵祿を追求す。如意の後、唯だ是れ色欲に耽著す。又緇素の間百念灰冷なるも、惟だ此の一事のみ多く魔惱をなす。妖をなし、竊をなし、國を傾け、家を亡すに至る。或は善和の眷族も此によつて紛爭し、或は久遠の夫婦も此によつて乖離す。之を信ず、人を懷するの根本、人を累すの深重、奸妬欺昧は名け言ふべからず。是の故に佛說に諸業は斷じ易きも、此の苦は除き難しと。苟も能く滅盡せば、道を成せざるなし。大抵男女の二根、初めより分別なし、邪妄發生して互に愛染を起し、結習牽纏す。遂に思想驚夢の苦み、蠹費破散の苦み、寃結離間の苦み、刑に遭ひ疾に染むの苦みあり。直に天亡に到るも終に未だ省悟せず。明かに知る穢汙は淸淨の因にあらず、蛾の火に投じて自ら燃然を受くるが如し。如來の明誨に、若し淫を斷せずして聖道を求めんと欲せば、是の處あることなしと。當に知るべし、情愛は災難の端、狐媚は乃ち殺人の賊たるを。煩惱の因を起して地獄種に入り、人を悞り、德を損し、身を喪ひ、命を失ふ。常に一切處に於て男女の相を泯絕し、究竟眞實ならば、誰か欲事を受けん。當に知るべし、革囊の臭穢は敗壞して總に白骨と成るを。念ふに、欲の境界は復た何の樂みかあらん。夢中にありと雖も又怖畏を生ぜん。普く願くば、一切の含靈具識、盡く厭捨を生ずること寃家の想の如くにして、當に遠離すべきなり。大火聚の如くにして近づくべからざるなり。毒蛇の來るが如くにして當に急に避くべきなり。果して能く一たび悔念を發せば、此の纏縛をして自然に消釋し、垢濁を變じて法身を獲、淫火を散じて智惠とならしめん。互に相敎化し、同じく淨道を行じて、安樂行を證せよ。」

㋓傳に曰く、「盡く書を信ずれば書無きに如かず」と、此の語詢に然り、

㋐超令矜字は表之、超然居士と號す。
㋑二聖は徽宗欽宗の二帝なり。
㋒省行堂は病僧寮なり。
㋓傳は孟子なり。

何ぞや、儒家の經史は例して監本あつて證據す、語竟に已に定まる。㋓吾が門の廣衆、鄙者は常に衆く、識者は常に寡し、故に多く憶見を以て改易し、遂に先聖玄妙の旨を失ふ、哀まざるべけんや。紹興の間、四明の再び傳燈統要を開するが如き、乃ち雙溪の庸僧思鑑の幹緣なり。鑑は素學識なし、誠に故尊宿問答の言を謬ること甚だ多し、此れ眞に法門の大罪人なり。嗚呼、此の書は乃ち本朝楊文公大年が詔を奉じて㋔吳の僧、道原の爲めに校定せしもの、一旦庸妄の手に易へらる、水潦鶴と謂ふべきなり。㋕叢林志を負ふの士、知らざるべからず。當に橘州・湖州の學の二本を以て正となすべきなり。

㋖癡禪妙禪師は婺州の人、少うして敎庠にあり、既に打發あり、卽ち衣を更へて遍く當代の尊宿に見ゆ。久しく㋗石室光佛子の會中にあり、杭の靈石に出世し、中竺の保寧に遷り、石室に嗣ぐ。石室の眞贊あり、曰く、

「我也不レ重二儞禪一。　我也不レ重二儞道一。
別二得儞家恰好一。」

然れども稟性疎逸にして檢なし、凡そ陞座小參に、必ず靑原百家の事を先

㋓宋代開版の書すら、當時の人の遺憾此の如し、況んや後世の書をや、古書の貴ぶべきは、後世の書の誤を正すの益あるを以てなり。淸朝の初めより、考證の學開け、古書を重んずること、洪璧も啻ならず、從つて文字の研究も精微に入れり、德川氏三百年間、考證に從事するもの寥々たり、徒らに理氣性命の學に沈醉して、考證を末技となす、吾が禪門も此風に洩れず、寛永より以來、禪籍の刊刻せらるるもの、古書を底本となし、異同を改訂するを爲さず、字句の出入、結構の疎密、誤謬極めて多し、鐵眼禪師の一切經を刻するや、日本に無比の善藏あるを閑却して、脫落誤謬の明藏を採りしが如きも、同一遺憾なり。

㋔吳の僧道原、釋迦迦葉より、東土禪宗の傳說、諸祖の機緣

にす。隆興乾道の間、其の道盛に行はれ、妙喜と爭抗す。得法の子無學の忱、己庵の深あり、皆叢林の白眉なり、更に哀可庵あり、少年にして徑山に住す、大慧禪師示寂のとき、卽ち其の後事を主る。時に妙術亦東堂に居る、卒に法衣拄杖を以て之に授けて曰く、

「三尺烏藤本現成。　箇中毫髮不レ容レ情。
佛魔凡聖俱搥殺。　方顯金剛正眼睛。」

妙、後に嘉興の祥符に入滅す、預め時日を定め、親しく遺偈を書し、時官道俗に別れ、翛然として往く。

㋘「王梵志韈已脫。　一任橫拖倒拽。」

の句あり、眞に大自在を得たり。

㋙保安の封は七閩の人、月庵に嗣ぐ。幼年にして衆に入り、赫々として聲あり。衆に紫金に主たりしより、楊の建隆に出世し、常の保安山に遷る、乃ち大參周公の命に赴くなり。封と大參と蚕緣あり、一時の小刹と雖も、賓主相得たり。一居十五年に逾ゆ、諸方の大刹屢々招げども往かず、然れども封、氣諸方を蓋ひ、口を開けば卽ち貶剝し、間々私を容れず。淳熙の末、乃ち坐脫す。頌に曰く、

「五十七年幸自好。　無レ端破戒作二長老一。　如今掘レ地且活埋。

㋖癡禪妙禪師、雲門下。

㋗石室、同前出。

㋘王梵志、前出、西域の人、城外の土饅頭の句あり。

㋙保安封、普燈續傳燈に傳あり。

既向二人前一㋩和亂掃。」

又滑稽の語あり、後世の後生淡素を求めず、惟だ衣裝を務むるを譏れり。今此に併せ記す。

「紡絲直綴毛段襖。㋥打扮出來眞箇好。　驀然問二著祖師關一。

卻似㋭東村王太嫂。　呵々。」

圓通永建上人は柏庭と號す、久しく密庵に依り、一翁松源の輩と伍を爲す。後に鄉人の老いて蔣山に居するを以て、永座元に充てられ、擧げて以て出世せしめ、長竿・天禧に住す。密庵と衆に在つて隙あり、其れをして承嗣せしめず、竟に其の薙髮の師光晦庵の爲めに香を拈ず。未だ幾くならずして信溪に遷り、遂に卒す。平日無一居士侍郎王漑と厚善なり、唱酬の語あり、世に謄行す。但來處分曉ならず、兄弟亦之を信ずるものある少し。亦後輩幾間の破屋、所得を原せざるものゝ爲めに深誡と爲すべし。故に松源嘗て頌あり、曰く、

「林下相逢知幾年。　好因緣是惡因緣。

鼻孔依然著二那邊一。」

㋦常樂の和庵主は三衢の人、久しく密庵に依り、見處の穩實なること松源曹源の下にあらず。法華二十人品の頌あり、世に行はる。其の靑山に在る時、密庵嘗て伽陀を以て之に戲れて曰く、

㋥和亂掃は掃却の意。（俗語解）

㋭打扮は役者の衣裳付けなり、紫の衣に緋紋白の袈裟「いでたち」は立派立派。

㋭東村の王太嫂は、娼妓なるべし、張雨の竹枝に、「東家隣舍宋太嫂、就レ船猶得レ進二魚羹一」とあり。（韻府）

㋦和樂主密庵系に此人なし。

「一拶當レ機伎倆窮。　故鄉回レ首爛柯峰。　人間天上誰知否。

會見曹溪正脈通。」

然れども和一生辛苦、自ら福の尠きを知り、諸郡多く名山を以て招けども、俱に起たず、暮年居士汪公文子と龜嶺の南に卜築し、㋧火種刀耕して恬然として自ら樂む。況味、老㋨龐・丹霞に減ぜず、亦一代の奇事なり。

㋩震山堂は昇州の人、初め㋑丹霞の淳に見え、洞上の宗旨を明らむ。頌あり、云く、

「白雲深覆古寒巖。　異艸靈華彩鳳銜。

夜半天明日當牛。　騎レ牛背上著二靴衫一。」

又大潙に至り、㋺挿鍬井の頌を作つて曰く、

「盡道潙山父子和。　挿鍬猶自帶三干戈一。

至レ今一片明如レ鏡。　時見無風匝々波。」

後に艸堂に疎山に見え、師資道合し、因つて稟承す。初め百丈に居り、後黃龍に住し、其の道大いに振ふ。是れを龍峯の四世と爲すなり。

㋻崇野堂は四明の人、久しく天童の㋼宏智禪師に依り、大事の決せざるを以て竟に江西に上り、艸

㋧火種刀耕は作務三昧にして日を過すなり。

㋨龐蘊と丹霞の天然。

㋩山堂道震禪師は草堂に嗣ぐ、草堂は晦堂の法子、黃龍派。

㋑丹霞子淳禪師は芙蓉に嗣ぐ、曹洞派。

㋺挿鍬の此頌野錄亦載す、此因緣未だ詳かならず、蓋し此井に就き、潙仰の商量ありしなり。

㋻野堂普崇禪師は善淸禪師に嗣ぐ。

㋼宏智は洞下の宗匠。

堂に見ゆ。未だ幾くならず、果して所得あり。後育王に住す、乃ち拈香、艸堂の嗣となる。㋙雪竇の持、四句を以て宏智に戲れて曰く、

㋚「收得一宗。（翠岩の宗白頭なり）　失却一崇。㋛面前合掌。
　背後搥胸。」

聞くもの大咲せざるなし。崇幼年より多く詩を收む、嘗て廬山の三峽橋に題して曰く、

「蕭々石徑蟠蒼松。　山腰忽斷來悲風。
　坐寒欲作暮天雪。　人靜似發山林鐘。
　落崖千古流寒玉。　眩眼百丈飛長虹。
　倚欄深省十年夢。　坐着雲呑五老峰。」

後、安國按部之を見て大いに稱賞を加へ、遂に諸家の詩牌を徹し去つて、唯だ此の一篇を留む。玆れより道譽は甚だ四に馳せずと雖も、唯だ詩名あつて世に流く。後進當に崇を以て戒と爲すべし。所謂齊己貫休は㋝名、地より重きなり。

龍丘法師慧仁、夜夢に偈を作つて曰く、

「裩既破袴又迭。　多少氷清玉潔。　一條藜杖劃斷。　天地更無殘闕。

㋙雪竇持、黃龍下、象田卿に嗣ぐ、傳に曰く、師詞章に巧に、偈句口を衝いて成る。
㋚聞庵嗣宗禪師は、長蘆證の會下にあつて、大事を發明す、而も宏智に嗣ぐ、故に一宗を收得すと云へり、野堂普崇は天童を去つて、艸堂に嗣法す、故に一崇を失却すと云ふ。
㋛目の前で、合掌するかと見れば、背後では握り拳で胸をついて「やあい」と、目をむいてゐると。
㋝詩名本分の田地より重し。

別々。

不レ須擊二胡盧磬鐵一。」

超然居士之を見て大いに喜んで曰く、「鵲巢あれば而も鳩之に居る、良に㋟笑ふべきなり。」雪堂曰く、「然らず、從上の尊宿多く敎乘の中より打發するものあり、百丈・大珠・洞上の輩の如き是れなり。」超然、點首す。

姑蘇に尼の㋠祖懃と云ふものあり、少うして或庵により、大事を咨決せんとし、旦暮精勤、久しうして省あり。俗官あり、紙を伸べて偈を討む。懃、書して曰く、

「終日爲レ官不レ識レ官。　終年多被二吏人一瞞。
　喝二散吏人一官自顯。　㋡掀二翻北斗一面レ南看。」

多處より請して出世せしめんとすれども、堅臥して赴かず、楓橋の李氏庵に終ふ。

雲堂の舒和尙に垂誡の文あり、叢林に傳布す。專ら諸方主法のもの老病を安存して、揀擇すべからず。少年の挂搭は大いに風化を傷ふことを警む。所謂枯樹老僧は山門の景致なり、因つて記得す。一老僧あり、吳門の萬壽に抵る、時に主者挂搭を肯はず、卻けて云く、「儞老いたり、何ぞ小院裡に去らざる、儞が如きは只だ是れ一根樹を種うるのみ」と。老僧對へて云く、「儞も當初に若し時緣偶せずんば、出でゝ住院せざらん、也た須らく到る處に樹を種ゑて始めて得べし」

㋟彼れは座主なり、而も禪的の見を具す、笑ふべしと。
㋠世譜或庵師體の下に缺く。
㋡官吏乘心の最上乘。
㋢此偈謂つべし、笑ふに堪へたり、呵呵大笑、泣くに堪へたり、淚連連。

と。主慙ぢて以て對ふるなし。其の僧乃ち偈を書して去る、曰く、

㋕「江湖幾度氣吞レ牛。　年老方知總是愁。
奉レ勸後生宜ニ勉勵一。㋖看看種樹在ニ前頭一。」

時に太守王公佐、聞き已つて、令を諸山に下し、「挂搭の僧人は揀擇するを得ざれ、所謂佛種子を斷ずればなり」と。

金沙灘頭菩薩の像に、梵僧の拄杖を肩にし、髑髏を挑げ、㋕馬郎婦を回顧するの勢を畫き作すものあり、前後の贊するところ甚だ多し。唯だ四明の道全、大同と號するものの一贊、最も佳なり。其の詞に曰く、

「等觀以レ慈。　鈎牽以レ欲。　以レ楔出レ楔。　以レ毒攻レ毒。
三十二應。　普門具足。　只此一機。　奪ニ千聖目一。
雲髮霧鬟。　輕紗薄縠。　大地橫陳。　虛空摩觸。
靈骨鎖レ金。　寒沙埋レ玉。㋗驚鴻縹渺銀漢斜。　缺月東西挂ニ踈木一。」

時に余丹丘に在つて之を見る、余嘗て蛇の爲に足を畫いて云ふ、

「先以ニ欲鈎一牽。　後令レ入ニ佛智一。　有利與ニ無利一。　元不レ離ニ行市一。
黃金靈骨再挑來。　試問汝今何面背。㋘阿呵呵。　囉々哩。

㋕若き坊さん方も、けろけろして居るな、一根樹を種うることは、目前に迫まれり。

㋖馬郎婦は觀世音の化身、唐朝に出づ、今の觀音の像は、馬郎婦を描きしもの、頗る美人なり、馬氏の子迎へて婦となす、其夜疾と稱して別房に止まり、翌朝既に死す、瘞埋の後數日、再び壙を開けば、黃金鎖子骨を見るのみ。(右觀音持驗記による)

㋗此二句、題全體を收拾す、驚鴻は銀漢に掛り、缺月は疎木に掛り、髑髏は拄杖に掛る、是れ同か、是れ別か。

㋙三箇之中那箇是。　剔起眉毛塞ニ耳觀一。
㋚圓通門戸堂々啓。㋛吽々。」

隱山の璨和尚の贊に云く、

「丰姿窈窕髣髴欹斜。㋜賺ニ盡郎君一念法華一。
一把骨頭挑去後。　不レ知明月落ニ誰家一。」

璨は泉の法石に住す、㋝木庵永の嗣なり。

黃龍・楊岐の二宗は、皆石霜の慈明より出づ。初め㋞黃龍の道大いに振ひ、子孫之を世々にす。皆班々として馬大師の數に減せず、眞淨より四傳して塗毒に至る。楊岐より再世にして老演を得、演海會に居り、㋟南堂と三佛とを得て以て其の門戸を大にす。故に今の天下は多くは楊岐の派なり。紹興の末、㋠塗毒既に沒す、而して雙徑の交代は乃ち育王の㋡佛照禪師なり。入院の初め首として巖主の塔頭に詣つて置祭す。義銘書記なるものあり、其の文を爲る、兄弟甚だ其の公を推す。因つて此に筆錄し、後の學者をして、祖宗の流派、其の自るあるを知らしむ。云く、

「昔し慈明老人の黃龍・楊岐を得ること、猶ほ一體に左右の手あるが如

㋘阿呵呵は「あはは」、囉囉哩「ちんぢんじやらん」。鐘の音也、
㋙三箇とは梵僧と髑髏と馬郎婦となり。
㋚圓通門戸云云、此句は餘り言ひ過ぎの樣なり、無くもがな。
㋛吽々は「もう」「もう」、牛の鳴き聲。
㋜馬郎婦、人爭ふて之を娶らんと欲す、婦曰く、三日にして法華全經を誦するもの、吾れ之に從はんと、馬氏の子之を能くす、便ち嫁す。
㋝木庵は瀨鼎需の法嗣なり。
㋞世譜に黃龍は嗣法百二十八人を載せ、楊岐は僅かに十二人を載するのみ。
㋟南堂の靜、佛鑑、佛眼、佛果、皆五祖に嗣ぐ。
㋠塗毒は黃龍派の人。
㋡佛照德光は、大惠に嗣ぐ、楊岐派なり、大體大惠は、湛堂準の會下に、習禪せし因緣に

し。子孫派出して各其の家を世々にす。典午は㋙泐潭に負かざるも、其の妙喜を敬すること猶ほ師を敬するが如きなり。德光實に妙喜に嗣ぐ、惟だ㋚巖主典午に稟くるによつて、平生の出處同じからずと雖も、幸に今日交承のあるあり、道誼の在るところ、存沒忘れ難し。要するに其の來源を委せば、皆慈明屋裡の人なり。若し巖主平日の道德超邁、談辯軒豁にして、學者を鉗鎚するに、大手段あるは、江湖の間特に定論あり。茲に多語を事とし、以て圓識を溷さず。謹んで伊蒲を羞めて大衆を率ゐて窣堵に詣つて一奠す。巖主其れ之に臨め。」

㋛曇橘州は川人にして、乃ち別峯印和尚の法弟なり、學問該博、名を天下に擅にす。本朝、覺範より後、獨り此の人を推すのみ。蜀の無爲山に住し、橫逆に遭ふて江に來る、丞相史公其の學業を尊んで、擧げて以て明の杖錫に住せしむ。初め入院のとき、二相親しく送る、其の後、史公復た竹院を造り以て之を延く。凡そ質疑の事あれば、必ず問ふ、故に別峯の金山より雪竇に來りしとき、㋜諸山の一疏、乃ち曇之を撰す。其の詞に曰く、

「雪竇に住せんか好し、翠峰に住せんか好し、老子當に自の胸中に斷すべし。法の爲めに來るや、牀座の爲めにするや。此の行殆んど人の意表に出づ、東山直下の四世に愧づるなし。之を望むに西湖雪後の諸峯の如し。但だ心同く道同く出處同を得て、佛界魔界衆生界を問ふことを休めよ、新乳峯禪師、聲は吳越に飛び、價は珉珠よりも重し。海門國に住して一十有二年を逾え、瀾飜の口を肆にして、八萬四千の偈を說く。山の屹々たるが如く、陣の堂々たるあり。其の滄波に據つて蛟龍を掩はんよりは、曷ぞ㋝蕙帳に依つて猿鶴を友とせざる。載ち伊蘭の世を念ひ、冀くは一たび優曇を現せんことを。計るに其れ師子の家は當に盡く其の種類を接すべし。歸來早に及んで我が同門を慰せよ。」

此の語、江湖競ひ傳ふ。時に自得の暉の交代せるあり、然れども曇賦性坦率にして拘檢を事とせず、竹院に在るの日、復た酒事を以て太守林侍郎に追はる。對を出して之に與へて、㋞「酒曇過レ界住ニ無爲ニ而無レ所レ不レ爲」と曰ふに至つて（蓋し曇曾て無爲に住する故なり）、而も曇卒に對する能はず、復た林が流されて丹丘を過るが爲めに、二年にして寶奎に回る。一日沐浴更衣、史魏公を請じ、平日の行紀を叙し、談笑の中にして化す。闔城の士俗、皆之を送つて茶毘す、舍利を獲ること無數なり。

㋟唐の虞世南の通曆に、有る人問うて曰く、「梁の武帝、凶を夷げ、暴を剪り、克く帝業を成し、南面君臨すること五十餘歲、蓋し文武の道ありと云べし。心を釋典に留むるに至つて、桑門と行を比より、多く黃龍派を疎外せざる傾あり。

㋙泐潭は湛堂準禪師なり。

㋚塗毒、典午に繼いで、雲巖に住す、故に巖主と呼ぶ。

㋛橘州寶曇禪師、大慧に嗣ぐ、大光明藏を著す、未成の書なるも天下の禪侶愛讀す。

㋜諸山の一疏、按ずるに是れは同門の疏なるべし。

㋝蕙は香草なり、北山移文に出づ、同心の友は、伊れ蘭の如しと詩經に出づ。

㋞曇は罎と音同じ、酒德利なり、侮蔑の語。

㋟世南字は伯施、餘姚の人、多才多能、書に於て讀まざるなし、佛法金湯篇に此此談を載せて、帝王略論を引けり、其文も少しく出入あり。

し、萬乘の君を以て匹夫の善をなし、熏習保たず、危亡已に及ぶ、豈其れ非なる所か、何ぞ福謙の效なきや。」先生答へて云く、「夫れ釋教は出世の津梁、絶塵の軌躅なり、方寸の間に運らして有無の表に超え、塵累既に盡き、攀緣已に息み、然して後解脱の門に入る。化俗の法に至つては、則ち布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智惠あり、之を六波羅蜜となす、夫の仁義禮智信と亦何ぞ殊ならんや。蓋し修する所を以て因となし、報ずる處を果となす、人此の六行を修するに、皆多くは全からず、一も缺くるあらば、果も亦隨つて減ず。是を以て驩明は貌に醜にして心に慧あり、趙一は才に高うして位に下し、羅褒は福ありて義なく、原憲は貧にして道あり、其の同じからざるや斯くの如く懸絶す、興喪得失は、咸必ず之に由る。下士庸夫は比干の心を剖かるゝを見て、以爲らく、忠直必ずしも爲さゞるなりと。傾王の國を亡すを聞いて、以爲らく、仁義法るに足らざるなりと。若し然らば盜跖は枕を東陵に高うし、莊蹻は車を西蜀に懸け、老いて厥の命を終ふ、良に貴ぶに足らんや。」又問うて曰く、「周の武帝二教を毀滅す、是か非か。」先生曰く、「非ならん。」或ひと曰く、「其の說を請ひ問ふ。」先生曰く、「釋氏の法は則ち是れ空有滯ることなく、人我兼ね忘れ、生死を超出し、寂滅に歸す、此れ象外の談なり。老子の義は、則ち谷神死せず、玄牝長へに存す、長生久視、雲に騰り鶴に駕す、此れ區中の教なり。惡を止め、仁を尙び、殘に勝ち、殺を去るに至つては、並に王化に益あり、俗典に乖くなし。今常僧の律を犯し、道士の經を遺るゝを以て、便ち其の教棄つべし、其言絶つべしと謂はゞ、何ぞ㋔檮杌を責めて堯を廢し、㋕有苗を怨んで禹を黜くるに異ならんや。㋖瓠子の泛濫を見て、遠く河源を塞ぎ、㋗崑崙の方偶を觀て、遽かに金燧を投じ、曾て潤下の德の利あることゝ、深く㋘變曜の用の其の功甚だ博きことゝを知らず。井蛙の海を觀るや、所見に跼す。輪囘長夜の迷、自ら沈溺の苦を貽し、後學を疑悞す、良に痛むべきかな。」

雲居の如し、雲中と號す、經を台の護國に受け、雲居に在ること最も久し。上堂に云ふ、「山下は熱すること火の如く、山間は涼かなること秋に似たり。山上に居するを得るもの、知んぬ是れ幾生に修す。」拄杖を卓して云く、「急に眼腦を著けよ。」

佛印示衆に云く、「袈裟を挂けて便ち閑を要むる勿れ、七條中に鐵圍山あり。幾多の放逸縱橫のもの、人身を失却す、瞬息の間。」と、

前輩の佛祖を贊する偈句幷に自贊の語、各々矜式あり、今は例して多く杜撰なり。自贊の如きも亦佛祖を贊するの語の如し、良に咲ふべきか、唯密庵最も其の體を得たり。贊に云く、

「在レ家不レ讀レ書。　行脚不レ參レ禪。　隨レ流㋙閑打閑。　掘レ地覓二青天一。
如今老矣空追悔。　捻二人痛處一力加レ鞭。」

㋔檮杌は堯の時の四凶の一人。
㋕有苗は苗族にして方度に順はざる種族なり。
㋖瓠子は黃河の堤の一番きれ易き處、昔し黃河の堤は大抵瓠子にてあふれしものなり、地名。
㋗崑崙山は高きこと千二百里、日月隙顯を爲す處。金燧は今の火を取る丸き玻璃なり。
㋘變曜は、七曜變化の意ならん。又一本變腰に作る。
㋙閑打閑はひまに任せて大法螺吹いてさわぎたてる、又打哄にも作る。

塗毒も亦云ふ、

「眼瞎耳恒聾。㋓鼯鼠技已窮。　要レ見二巖中主一。
白雲千萬重。咄。　具眼者宜レ辨レ之。」

佛心㋔才、示衆に云ふ、

「三千の劍客、獨り莊周を許す。百萬の鳳毛、點や自ら肯ふ。若しまた兩頭坐斷し、中間留めざるも、只だ是れ淨潔の毬子を打す。未だ向上の一竅を知らず、若し也た隨波逐浪、帶水拖泥ならば、己靈に孤負す。未だ頂門の正眼を具せず、總に不恁麼なる、又作麼生。人を驚すの浪に入らずんば、稱意の魚に逢ひ難し。」

又云く、

「寶劍失はず、虚舟刻せず、朝に羅浮に游び、暮に檀特に歸る。若し本光の地、理合に斯くの如くなるべしと謂はゞ、正に是れ井に坐して天を觀、蠡を持して海を酌むなり。若し言發聲にあらず、色前物にあらずと云はゞ、唯だ宗に迷ふのみにあらず、亦乃ち旨を失ふ。宗明旨的、又作麼生。密に鴛鴦をとつて閑に繡ひ出す。從他人の自ら金針を覔むるを。」

長蘆の㋒祖照禪師道和は、莆陽の人、初め篋を負ふて京に至る、㋑中貴あり、姿質の凡ならざるを

㋓鼯鼠は今は「いたち」と見れども、西溪叢語には小狐の如く蝙蝠に似たり、肉翅あり、爪の長さ三尺とあれば別なり、「よぶすま」の樣なるものなるべし。

㋔靈源淸法嗣、黃龍下。

㋒法雲善本に嗣ぐ、本は圓照本に嗣ぐ、圓照は天衣に嗣ぐ、雲門下。

㋑中貴は宦官なり。

見て、度牒を以て之に與ふ。和受けず、自ら同學に謂つて曰く、「吾れは大丈夫なり、豈他黃門の下に出つべけんや、苟も一旦其の恩を受けば、則ち終身其の㋐攔絆を被る。吾が佛幸に廣大の法門あり、又國家人を開發するの路あり、吾れ當に自ら勉勵すべし」と。因つて志を鋭し、法華經を誦し、當年試經に於て得度し、大僧となり、徧く諸方に見え、後長蘆に住す、座下常に千衆に滿つ。眞歇の了、丹霞の會下より來る、時に年尙ほ幼なり。和其の敏利を見て、衆に首たらしめ、後院を退いて之に與ふ、其の承嗣せんことを意ふ。衣を粘ずるに及び、乃ち云ふ、「法を丹霞の室に得て、衣を祖照の庭に傳ふ、恩深うして轉た無語、懷抱自ら分明」と。和樂まず、座を下れば其の衣を㋑抵奪す。了此れより終身法衣を搭げず、竟に丹霞の淳に嗣ぐ。江湖の有識者、皆其の本を忘れざるを雅とするなり。

或庵の㋖示衆に云ふ、

「紹興の初め、山野色力强壯、至る所に撥艸瞻風し、善知識を見ては、囊を懸け盞を挂け、節を擊ち闗を叩き、飡を忘れ寢を廢せざるなく、寅夜に輟めず。又偉人哲匠の朝暮倦まず、苦口に點化錐劄するを得て、舊貨を收拾せんと尙へども、手に上るを得ず。況や今の際に當つて、在處の叢林位に據るの禪師なるもの、但だ名字を占め、陞堂入室、聊か不空を表す。師家の學者を見る、學者

㋐攔住羈絆、俗に云ふ牽制を受くるなり。

㋑奇談なり、丹霞は曹洞下、祖照は雲門下、當時宗趣既に混淆す、故に人又疑はざるなり。

㋖此示衆、親切なり。

の師家を見る、邪正分たず、互に相㊐淆混す。更に甚麽の一言半句を說いて、常情を超脫し、大不疑安樂の田地に到り、貫索を拈斷し、天下の人の鼻孔を穿たんや。大道相將つて滅す。間笈を負ひ簦を擔ふて、人の烟煙の下に寄るあり。多くは是れ飽暖溫和を求め、外典に游泳して、談柄に資せんことを圖るのみ。正宗下の事は口を杜ぢて講ぜず。加之席を望刹に尸り、福緣あつて上位に趍陪し、貴人に結識して以て外護となし、其の自便の計を得、遂に習ふて以て風を成し、遞に相倣傚し、非を知る者ある鮮きを致す。衆中本色の黃面老衲は、道果を證すと雖も、密に古風を追ひ、退步潛藏し、分を守つて權貴に親近する能はず、弊を救ふに力なし、冷所に危坐し、袖手想見、其の荒寒薄伎、紛紜に點頭咨嗟するのみ。願くは具眼正因力量ある上人、努力猛省して、遠きを圖つて近を圖らず、己躬下に於て、西來不傳の妙を了辨し、凡聖不測の機を施設して、異日他時後輩の爲めに則となり、道路千里に㊋竫竮するの嘆あるを免るゝを得んかな。明眼の人前に胸臆を吐露す。亦望むらくは、痛く祖道の下衰を念じ、六合の外に踴躍高擧し、貴むらくは英衲子を得て、世に光明せば、千古萬古の下、金剛王の寶劍、凜々として墜ちざらんなり。」

㊐淆混は糊塗と同じ「ごまかし」なり。

㊋竫竮又伶俜にも作る、字典に行くこと正しからずと訓せり、「わらぢ」すれにて、「ちんば」ひきもつて步むを云ふ意ならん。

❶眞定帥王公、一日諸子を携へて院に入る、州坐して問ふ、大王會すや、王曰く、不會、州曰く、少より持齋して身已に老ゆ、人を見て禪床を下るに力なしと。（正宗贊卷一抄）

東坡、京口に到る、佛印、江を渡つて謁見す。坡云く、❶「趙州昔日禪床を下らず、金山甚によつて今日江を渡る。」佛印頌を以て答へて曰く、

「趙州昔日缺㊐謙光。　不下禪牀接㊑二王。　爭似金山無量相。
大千沙界是禪牀。」

曾文淸公は、贛州の人、乃ち㊅寶文侍郎天游の弟、宗門に於て甚だ進步せり、㊁心聞の賁禪師と方外の友たり。嘗て世尊拈華の一頌あり、江湖多く之を賞す。頌に曰く、

「華枝拈起大家看。　迦葉無端卻破顏。
從此春光都漏泄。　桃紅李白滿人間。」

又、心聞の像に贊して曰く、

「是心聞叟。　寂然無聲。　非心聞叟。　儼然其形。
視之非無。　聽之非有。　能如是觀。　非心聞叟。」

婺州靈應の法淨講主、晚學に其の院事を㊆攙せらるゝによつて、葉丞相に告げて、以て援を求む。葉の回書に云く、

「專使より書を辱うす、懃々たり。知んぬ、公と余と先世の契あり、里巷桑梓を同じうす。之を同袍に詢ふて、公は是れ本分の講人なるを知る。靈應に住すること四十年、瓦礫の場を變じて輪奐と

㊑二王の二の字、僧寶傳卷廿九佛印の章、趙に作る。

㊅曾會字は天游、大惠に參ず。

㊁心聞賁は無示泚に嗣ぐ、泚は長靈卓に嗣ぐ、卓は靈源淸に嗣ぐ、黃龍下。

㊆攙は攙奪なり。

なし、魚鼓の聲をして㋑歳晩に絶えざらしむ。謂つべし供養を寺庭に興すと。臂力を寶殿の崇成に出すの際、乃ち破戒の後學、貪癡の心を起すをなし、巧計をもつて攘奪せらる。怪しむ公の勝事を終圓する能はざるを。若し世情を以て論じ來らば、鵲に巣あつて鳩之に居る、誠に處るに堪へ難し。若し公の分上を以て之を觀れば、身は我が有にあらず、萬法皆夢幻の如し。則ち靈應の道場も、亦豈公久居の活計ならんや。所以に古人道ふ、住すれば則ち孤鶴冷かに松頂に翹ち、去れば則ち片雲忽ち人間を過ぐ。去住灑然たり、何の拘礙かあらん。當に住すべきを要せば、而も未だ住せずんばあらずと。方に知るべし、是れ去住底の人なるを。又況や一飲一啄も皆自ら前定あり。或は行き或は止まる、豈人爲ならんや。意必同異あることなかれ、若し此くの如きの境界、洞然明白なる能はずんば、則ち末後の一著、未だ拖泥帶水なるを免れず。此を去つて便ち好し青松の下、明窓の内安坐不動にして自家の大事因緣を了せば、誠に計を得たりとなす。若し一言を㋒五馬に借らんと欲せば、山を挾んで海を超ゆるの難あり。能く萬法の皆空を悟れば、公に於て凡を變じて聖と成すの易きあり。其れ或は未だ然らずんば、快く請ふ包を腰にして㋓急に去つて、他の新婦底を防げ。」

㋑歳晩は蓋し澆季の世を云ふ。
㋒五馬は太守なり、漢の世、二千石の太守は駟馬を用ふ、然れども命を奉じて出でて使するときは、右驂を增して、五馬を用ふ、故に五馬を太守の美稱となす。杜甫の句に、人生五馬貴とあり。（佩文韻府馬の字下）
㋓急に去つては他の有力者の許に赴けの意ならん、新婦底は前段の晩學を指す。

混源の密は台の人、龜山の光狀元に嗣ぐ。俗素と貧なり、然も分を守つて自ら張大にせず。浮山より大舍に遷りしとき、道俗舍に由る、將に其の弟昆を見んとす、人從に戒約すらく、「其の家を過ぐる勿れ」と。唯だ親隨一二人を帶ぶるのみ。又曰く、「若し我兄を見ば、切に㋔聲諾することなかれ、恐らくは他の村人を驚さん」と。其の分を顧みること此くの如し。頌あり、曰く、

「托レ迹來ニ蓬屋。　三椽種不レ深。　如何微賤質。
也解レ震ニ雷音。　種レ粟不レ生レ豆。　拈レ鉛卻是金。
只因ニ誤失脚。　終不レ落ニ沈吟。」

叢林皆其の識度高遠に服す。夫の張王李趙を詐り稱するものと、豈同日にして語るべけんや。

故の監部甄公龍文、龍翔の疏を爲つて密公を請じて曰く、

「十三㋕人洋嶼の關を透つて先づ上首となり、二千里黄梅の盞を趂ふて密は汝が邊にあり。謂つべし正法克く公選に膺ると。某人、脚跟㋖峭措、眼腦玲瓏、紫籜を起して洪福の禪を說き、諸方山仰す。石橋を過ぎ七閩の盞を持して萬衲雲隨す。唯六龍曾て中州に御す、故に二淛獨り勝刹に誇る。次當つて補處す、宜しく公を放くことなかるべし。孤嶼にして兩峰に住し、話頭在在し、一句にして三要を涵す。衆目團々たり。」

㋔聲諾は支那人の揖と同時に發する聲、卑より尊に向ふ場合に之を用ふ、此處の諾の字、喏と同じ。
㋕大惠洋嶼にありし時、大衆僅かに五十餘人、而も打發するもの十三人に上る、龜山の光は其首なり、故に光狀元と云ふ、密禪師を云はんとして、其師に及べるなり。
㋖峭措は俊秀なり。

後に旨を蒙つて西湖の淨慈に住す。

紹興の間、象田梵卿禪師は、秀の華亭錢氏の子なり、初め圓通の秀、投子の青に參じ、次に㋒昭覺の總に見えて契あり。上堂に云ふ、

「春既に暮れ、落華紛々として紅雨を下す。南北の行人歸るや歸らずや。千林萬林杜宇鳴く。我れに家なし何れの處に歸らん。十方刹土奚ぞ相依らん。老夫箇の眞の消息あり。昨夜三更月池にあり。」

慈恩法師は、唐の㋐尉遲將軍の子なり。初め年十歲にして能く戰策を造る、父之を賢とす、玄奘計を以て其の出家して以て敎乘を大にせんことを欲し、密に其の造るところの戰策を竊み、小行者に敎へて之を諷せしめ、携へて遲を訪ふ。遲口を極めて其の子の善く能く文を作ることを稱賞す。奘請ふて一看して乃ち曰く、「此の文は小行童も亦能く之を誦す」と。遲驚き呼び來つて之を誦せしむるに、果して一字を差へず。遲大いに怒る、「此の子古文を以て謔戲す」と、卽ち之を誅せんと欲す。奘師告げて曰く、「佛に救護衆生の說あり、若し君救はずんば吾は佛弟子にあらず、捨てゝ出家せしむべし、如何ん」と。遲從ふ、是を用つて奘師之を得て卽ち大僧となす、衆能く及ぶものなし。嘗て對御講論し、賜ふに玉環を以てす。天子を見て更に禮を致さず、但出入に經論、酒食、婦女の三車ありて隨行す、㋓宣公服して而も

㋐東林常總は黃龍の法子。
㋑尉遲敬德は唐の太宗の猛將なり。
㋓南山の道宣律師は律を發揮す。

疑ふ。法師も亦其の小乘を薄んず、而も其の神供の說を疑ふ。一日宣を訪ひ、特に天供を求む、語論終日にして其の供を見ず。法師歸つて後初めて至る。宣公之を責む、「非時にして到るは何ぞや」と。神告げて曰く、「懈怠するにあらざるなり、今日師大乘の菩薩と議論す、毫光徧界を罩定し、竟に路の入るを得るなし」と。此れより更に心を傾けて之を敬す、故に知んぬ、大乘は小根の能く測る底に非ざるところなるを。

遯庵の演は閩の人、初め㋔元枯木に見え、後妙喜に徑山に參ず。最庵の印・同庵の璉と大慧の廣錄三十卷を裒集し、盛に世に行はる。慧既に沒して演復た出遊せず、一衲寒暑三十年を經、數々板首を董す。閩の帥趙汝愚、待つに福の秀峰を以てすれども堅臥して起たず、別峰、疏を作つて勸請す。

「幽蘭林下。　豈無人而不芳。　至寶道中。　蓋具眼而初識。」

の句あり、一時其の節を高しとせざるなし、暮年竟に塗毒に常の華嚴に推し出さる。一坐十九年、法席盛に三吳に興る。其れ乃ち緣法地あるのみ。

㋕最庵の印は川の人、初め寂室に依り、後大慧に參じ、京口の鶴林に出世す。自贊に云く、

「克體委羸。　當行驀直。　袖手儼然。　可知禮也。　美惡猶來不自裁。
參方分付俯觀也。」

㋔能仁の枯木祖元禪師、亦大慧に嗣ぐ。
㋕靈隱の最庵道印禪師は大慧の法嗣。
㋖粲陽郡王は趙然居士趙令衿ならん。

ⓛ滎陽郡王初め嘉禾に居り、官職未だ登らず、家居零落す。時に誰庵の粹禪師報恩に住し、王と交遊す。凡そ疑ふところあれば、應對せざるなし。孝宗の卽位に及び、王累りに大藩を開く、諸方の名刹を以て多く粹に命じて之を主らしむ。晩に何山を請ふて功德寺と爲す、亦粹に命じて之に主たらしむ。特に紫服と圜悟禪師とを賜ふ。其の子孫亦大法の金湯たり、是れを互に大願力に乘じて來るものと謂ふなり。

國譯叢林盛事卷下終

予昔し衆に❶五峰に首たり、時に古月の融禪師、典賓の職に實つ。既に同事を叨にし、日に數々從遊し、山間水邊の樂を爲す。續いで業緣を以て來つて青山に居ること十年に逾ゆ。一日翩然として我を過ぎ、坐間娓々として前言往行を談じ、頗る老懷を清うす、徐ろに叢林盛事一篇を出す。皆命世の宗師と賢士大夫と酬酢更唱の語、誠に以て後學を警め、而も宗敎を補ふべし。大率先師の武庫と相類す。殆く將に梓に鋟つて以て後世に惠まんとす、其の利豈博からずや、因つて筆を援いて以て後に題す。

❶五峰は廬山にあり。

慶元己未

華藏遯庵宗演跋す

叢林盛事序

余剛身叢林、僅三十年所、見當代諸大老多矣、厭世掩扃丹丘中峰之下、日與草木俱脫、而陳習未忘、睡之餘、信手抽骨董箱、得江西瑩公所著羅湖野錄一帙、及開卷首、乃無著師之爲序引、有曰、前哲入道機緣、禪書多不備載、其過在當時英俊失於編次、是無衞宗弘法之心、而然、遂致有見賢思齊者徒增嘆息、細味其語、誠可箴吾輩懶慢之病、因追憶平日在衆、目見耳聞前輩近世可行可錄之語、共成一編、書成將呈鄭峰佛照老人、見而悅之、謂侍僧道權曰、此眞吾門盛事也、胡不刊木以傳後世、因以叢林盛事目之、知我罪我、毋加哂焉。

歲丁巳、慶元三年、仲秋日

道融序

叢林盛事綱目

程大卿參黃龍
眞淨居大愚
圓通秀
佛心才
典牛牧牛頌
應庵依圓悟
或庵號體亂擾
旦庵仁
谷山旦
宏智夢作一聯
富鄭公參投子
深己庵
自得暉
竹原庵主
佛印解東坡玉帶
承天宗馳書
芙蓉爲投子典座
張安道見楞伽
佛燈詢號罵天
木庵永
瞎堂爲圓悟晚子
白楊順
懶庵需
圓極岑
艸堂清
月堂昌
開善謙本傳
水庵號一糙
芙蓉答楊次公韓魏公
剖禪師作園頭
淨因成枯木
雪堂見父母
開福寧見妬
直道者參妙喜
密庵破沙盆
月庵果
一仕官題焦山
混源密上堂
慈航朴
龜山光
辨正堂
如無明

西禪淨此庵
尤延之
李德邁
本歸雲叢林佞篇
五臺艸衣文殊
廣敎會
鑑咦庵
圓通旻
安相國見旻
孝宗詔徑山潛
鐵庵一大
晁光祿迥
機簡堂
劍門分庵主
印別峰
孝宗遇佛照
洪首座
顏卍庵
無著妙總
光佛照
懶庵樞
水墨觀音
三峰印
佛性參
吳居厚
二靈庵主
寶峰祥叉手
雪堂行
大圓智
證西林號老衲
伊庵權
塗毒與放翁厚
誰庵演
雪巢號村僧
全無庵
瓊首座
策塗毒
竦空谷
柏堂雅
自得暉作竹頌
開善謙頌古
陳彭公汝霖寫觀音經
仁宗帝見大覺
普慈聞
蘇子由
妙道道人
詢罵天與佛鑑問答
高宗孝宗贊彌勒
石窓恭
別峰雲
松源頌

曇廣南
晦庵光
無垢居士
公安珠
咲庵悟
空東山
思鑑開傳燈錄
圓通永建上人
崇野堂
雪堂舒
曇橘洲
佛印示衆
長蘆祖照
曾文清公
甄公龍文
遯庵演
雷庵正受
圓悟初在講肆
蔣山元
瑞巖順
枯木元
庵號道號
癡禪妙
常樂和山主
龍丘法師慧仁
金沙灘頭菩薩像
唐虞世南
前輩贊有式
或庵示衆
婺州靈應講主
象田梵卿
最庵印
大慧與祖慶頌
士大夫序尊宿語
肯堂充
萬壽脩
潙山寶
安定郡王作戒欲文
保安封
震山堂
姑蘇尼祖懃
黃龍楊岐
雲居如
佛心才示衆
東坡到京口
混源密頌
慈恩法師
滎陽郡王

（目錄終）

叢林盛事卷上

宋　沙門道融撰

程大卿參南禪師、南令看生緣話、法昌一日問曰、何不直下與伊勦絕去、南曰、也曾爲蛇畫足來、是伊自不瞥地、昌曰、和尚如何爲他、南曰、咬盡生薑呷盡醋、昌曰、流俗阿師又與麽去、南云、法昌作麽生、昌拈拂子便打、南云、者老漢得與麽無人情、昌休去。

佛印一日入室次、忽東坡至、印曰、此間無楊座、不及奉陪居士、坡云、暫借和尚四大爲楊座、印曰、山僧有一問、居士若道得卽請坐、若道不得卽輸却玉帶、坡欣然曰、便請、印曰、居士適來道借山僧四大爲楊座、只如山僧四大本空、五陰非有、居士向什麽處坐、坡擬議、不能加答、遂解玉帶、大咲而出、印却以雲山衲衣贈之、坡有偈云、百千燈作一燈光、盡是恒沙妙法王、是故東坡不敢惜、借君四大作禪床、又云、病骨難堪玉帶圍、鈍根仍落箭鋒機、會當乞食歌姬院、換得雲山舊衲衣、又云、此帶閱人如傳舍、流傳到此亦悠哉、錦袍錯落渾相稱、乞與狂老萬回、印以二偈謝云、石霜奪得裴休笏、三百年來衆口誇、爭似蘇公留玉帶、長和明月共無瑕、又云、荊山卞氏三朝獻、趙國相如萬死回、至寶只應天子用、因何留在小蓬萊。

楊次公提刑、一日問芙蓉楷禪師曰、某與師相別幾年、楷曰、七年、楊云、者七年參禪耶學道耶、楷曰、不打者鼓笛、楊曰、與麽則空遊山水、百無所成、楷曰、相別未久、善能高鑑、楊呵呵大咲、

韓魏公夏日來訪、楷出接、韓遂曰、禁足不出、因甚破戒、楷曰、官不容針、私通車馬、韓大喜之。

翼淨禪師居鎮之大愚、太守錢公弋來遊、怪禪者騶多、衆以師有道德者奔隨而至、錢公卽入其室、未有以奇之、翌日命齋、師就席、俄有犬逸出屏帷間、師少避之、錢嘲曰、大善知識、固能降龍伏虎、豈畏犬耶、師應聲曰、易伏偎巖虎、難降護宅龍、錢大喜、乃移居聖壽、問道焉。

承天宗行脚時、爲泉州棲隱和尙、馳書到京師、李駙馬宅相看都尉、問曰、因甚到京師、宗曰、專爲院門馳書、尉曰、適來悔伸一問、宗曰、都尉慣得其便、尉便喝、宗曰、放過一著、尉云、再犯不容、宗曰、三十年後、大有人擧在、尉大咲。

興陽剖禪師、初在大陽作園頭、種瓜次、陽問、甜瓜何時熟、剖云、卽今熟了也、陽云、揀甜底摘來、剖云、摘來與什麼人喫、陽云、與不入園者喫、剖云、未審、不入園者、還喫也無、陽云、汝還識伊麼、剖云、雖然不識、不得不與陽咲而去、剖因臥病、陽問曰、是身如幻泡、幻泡中成辨若無箇泡幻、大事無由辨、若要大事辨、識取箇泡幻、作麼生、剖云、猶是者邊事、陽云、那邊事作麼生、剖云、匝地紅輪秀海底、不開華、陽咲曰、乃爾惺惺耶、剖喝云、將謂我忘却、後竟不起、陽遂以直裰幷偈付浮山遠、遠後接投子靑、起洞上一宗耳。

法雲圓通秀禪師、初習華嚴、一日嘆曰、吾觀善財始見文殊、復過百十城、事五十三善知識、又聞、達磨西來、老盧南去、敎外別傳無上心印、吾豈止方偶、滯性相之宗耶、因棄所業、束裝南遊、至無爲謁懷禪師、懷問曰、座主講甚麼經、秀曰、粗習華嚴、懷曰、華嚴以何爲宗、秀曰、以法界爲宗、懷曰、法界以何爲宗、秀曰、以心爲宗、懷曰、心以何爲宗、秀不能答、懷曰、毫釐有差、天地懸隔、汝當自肯、會有省發、後十七日、聞僧擧白兆問報慈云、情生智隔、想變體殊、情未生時如何、慈云、隔、師於此大悟、直到方丈陳所得、懷喜曰、前後座主見吾者多、唯汝一人堪承大法、吾宗異日在汝一人行矣、師遂服勤八年、懷推爲上首、出世舒之四面、後居東京法雲、雲門正宗由茲大闡。

芙蓉楷在投子作典座、子一日問、厨司勾當不易、楷云、不敢、子云、煮粥耶蒸飯耶、楷云、人力淘米著火、行者煮粥蒸飯、子云、汝作麼生、楷云、和尙慈悲放佗閑去、投子駭之。

淨因成枯木問僧、甚麼處人、僧云、西川、成云、幾時離鄉、僧云、前年三月、成云、未離本國一句、作麼生道、僧云、通身是口、難爲祇對、成云、猶是離家失業句、僧無語、成打一拂子云、枉蹈破許多艸鞋。

鼓山佛心才禪師閩人、初參死心、心問、鄉里甚麼、才云、福州、心云、玄沙不出嶺、保壽不渡河、因甚到這裏、才云、因行不妨掉臂、心云、左手掉、右手掉、才放下兩手掉出、心大喜、及許挂搭、已被侍僧所擯、云、才到處、吵人叢林、和尙不得留之、於是心遂不納、云、聞汝到處、吵人叢林、且往他處、才云、大善知識眼在甚麼處、拂袖而出、見照默、照默納之、未幾、遂契黃龍之道、照默以大法任之。

樂全先生張安道、慶曆中守滁州、至一僧舍、見梵夾齊整、怪取閱之、乃楞伽阿跋多羅寶經、恍然如獲舊物、細觀筆畫、手迹宛然、如自所書者、悲喜太息、從是悟入、嘗以經首四偈發明心要、東坡過南都、親見公說、且以錢三十萬託云、印施於江淮間、東坡親書令佛印刻石金山、

故贈樂全詩、有曰、樂全居士樂於天、維摩丈室空脩然之句。

雪堂行括蒼人、少登上庠、因見殺生者、蠹然有感、遂棄家、直抵泗州普照王寺、出家、以掃塔爲務、既剃髮、乃往舒之龍門、依佛眼禪師爲侍者、一衲度寒暑、又且養蘊、隣肩皆厭之、每於殿堂僻處坐禪、一日看玄沙築著脚指頭話、大有發明、佛眼乃川人、上堂次、因行侍立、戲曰、川僧蓋苴、浙僧瀟灑、諸人若也不信、看取山僧侍者、一衆大笑、後見其父從大常博士出守、三衢、行時母老來歸、闔者見其繦褓、再三不與進、行乃解衣與之、纔通覆、而其母聞之、不覺仆地曰、我兒猶在耶、遂迎入宅堂、逼令換衣澡浴、及浴其衣盡換去、只得著其新衣、行泣曰、我幾年與他爲眷屬、豈一旦遽相捨耶、即抵吉祥寺作宿、次日、父母兄弟俱來報謁、而行以黎明去矣、竟不及見、但見壁間留偈云、莫嫌心似鐵、自己尙爲寃、掃盡門前雪、方開火裡蓮、萬般休更問、一等是忘緣、箇事相應處、金剛種現前、其母因憶師失明、行再歸括蒼、其父逼令出世南明、遷衢之烏巨、其道大振、終於饒之薦福、妙喜親爲撰語錄序、流傳于世。

典牛和尙成都人、姓鄭氏、名天游、本仕族、初試郡庠、復試梓州、二處俱發、游不敢承受、竄名出關、適山谷道人西還、因見其風骨不凡、論議超卓、廼同舟而下、竟往廬山剃髮、不改舊名、首參死心、不契、乃依湛堂於泐潭、時妙喜爲侍者、游居書司、旦夕相從、後往古樂山、發明大事、出世廬山小寶峰、後居雲巖、嘗和忠道者牧牛頌、曰、兩角指天、四蹄踏地、拽斷鼻圈、牧甚屎屁、初張無盡見其坦率、不事事、嘗慢之、謂之顚游、後妙喜持此頌獻之、無盡撫几稱賞、妙喜曰、相公且道、者頌是甚麼人做、無盡曰、此非彌勒大士、安能發此言、妙喜曰、此乃前日顚游所作、無盡曰、奇哉奇哉、湛堂乃有此兒耶、臨濟一宗、其在此矣、但將去質庫中典、也典得一百貫、商英肉眼不別、幾乎蹉過此人、遂燒香望雲巖悔過、游後退雲巖、過廬山棲賢、長老見其堅老、又且川氣、不肯挂搭、却云、老老大大、正是質庫裡典牛耶、游聞之、乃述偈而去、曰、質庫何曾解典牛、只緣償重實難酬、想君本領無多子、爭解能容者一頭、因庵于武寧、四十年終身不出、塗毒見之、已九十三矣。

佛燈詢號罵天、湖之安吉人、嗣佛鑑、住禾山、日、嘗上堂、僧問、如何是賓中賓、答曰、客路如天遠、候門似海深、如何是賓中主、云、長因送客遠、憶得別家時、如何是主中賓、云、相逢不下馬、各自有前程、如何是主中主、云、一朝權祖令、誰是出頭人、賓主還有向上事也無、云、向上問將來、如何是向上事、云、大海若知足、百川應倒流、僧禮拜、詢云、此是詢上座三十年學得底、

開福寧道者、歙州人、參五祖演、演見其立作高上識趣超卓、每當衆譽之、復令入堂司、同學妬之、夜引寧山行、道話、因毆之傷其面目、赴衆不得、演聞之、躬往省問曰、聞汝被那一輩無禮、何不至方丈、雪屈、聽老僧與汝趕逐、寧竟不忍顯、但云、某自喫撲傷損、不干他事、演淚下曰、吾忍力不如汝、他日豈奈汝何、後出世開福、容五百衆、將示寂、預定日時、坐化、以大法授月庵果、果陸沈衆底、人莫能識、唯圓悟知之、後成褫其出世、以頌送之曰、歙山老人末後句、的的親傳四絕堂、正令已行風凜凜、斗間劍氣燭天光。

應庵初依蔣山圜悟會中、與此庵元爲友、及元住處之連雲、華從虎丘隆會中來、初到便令作首座、未久令立僧、元上堂云、西河有師子、連雲出虎兒、親從猛虎窟中來、文彩爪牙悉皆備、

雖未及驚群、已有食牛志、痛念楊岐宗令之如掃地、堅起鐵脊梁、與先師出氣、諸人還識麼、兩眼大如環、當頭立底是、後出世妙嚴、爲虎丘燒香、自後住十年、其道與妙喜相抗、李浩侍郎與師游久矣、嘗贊師眞云、平生波波挈挈、纔得箇院子住、便打脫、而今又向幀子上出來、知他是死是活。

木庵永禪師、福州童聖者小師、棄儒從釋、與法弟安分者爲友、同參懶庵需於洋嶼、皆有大發明、因作水寬頌云、路繞懸崖萬仞頭、擔泉帶月幾時休、箇中撥轉通天竅、人自安閑水自流、妙喜見之曰、鼎需有此兒、楊岐法道未至寂寥、後住鼓山、江浙兄弟盡入嶺、松源無用息庵諸老皆在座下、後終於泉南。

直道者安州人、初參妙喜於回雁峰下、喜問曰、上座甚麼人、直云、安州人、喜曰、我聞爾安州人、會厮撲、是否、直便作相撲勢、喜曰、湖南人喫魚、湖北人著鯁、直打翻筋斗而出、喜曰、誰知冷灰有粒豆爆、竟辭喜過江浙、嘗與三衢陸式二人爲同行、後住金陵保寧、嗣妙喜、法道大振、因留守陳丞相俊卿會諸山茶次、陳舉有句無句如藤倚樹、令諸山批判、諸山皆尖言巧語、以取丞相之意、惟師最後頌曰、張打油、李打油、不打渾身、只打頭、丞相大喜、未幾遷住蔣山。

或庵體和尚、台州黃巖人、賦性麤糙、遇事敢爲、受業上下號體亂擾、參此庵元於護國、一日在羅漢殿行道、忽聞庫下毆行者、大叫一聲、豁然契悟、走見元、元曰、這十一郎、今日如病得汗、未幾充典客、後令化塗田、頌送之曰、豎亞頂門三隻眼、放開肘後驗人符、杖頭殺活無多子、截海須還大丈夫、爾後依**瞎堂**、首衆于虎丘、出世蘇之覺報、嗣此庵、法道大振、後遷焦山、郡守曾侍郎仲躬、常問道焉、師既入滅、以石硯寄曾、曾以偈弔云、翩翩隻履逐西風、一物渾無布袋中、留下陶泓將底用、老來無筆判虛空、體之辭世云、鐵樹開華、雄鷄生卵、七十二年、搖籃繩斷、可謂眞臨濟種草也。

瞎堂遠、初住婺州金鱗山、復赴建上禪寂請、道過三衢、時雪堂行住烏巨、遠往講法眷、行與語奇之、且留遠旬欵、亟往郡中、見超然居士曰、師伯圜悟和尚有晚子川遠、昨至山中、將赴建上請、惜其居處山深地僻、居士能爲稟郡守、以一院留之、可乎、超然卽白郡守、俾其住子湖定業禪寺、師受請、示衆云、甘分金鱗困守株、誤他禪寂遠招呼、中途再領賢侯命、定業難逃住子湖、未幾遷報恩、時妙喜居衡陽、聞師名、以法衣幷偈寄曰、這川嘉苴、無眞無假、一條白棒、佛來也打、更有一般長處、解向鉢盂裡走馬、後歷住諸山、奉詔居靈隱。

密庵傑禪師閩人、初出嶺、至婺州智者、偶負暄次、有老宿問曰、上座此行何處去、曰四明育王見佛智和尚去、老宿云、世衰道喪、後生家行脚、例帶耳不帶眼、傑曰、何謂也、老宿云、今育王一千來衆、長老日逐接陪不暇、豈有工夫著實與汝輩發機、傑下淚曰、若如此、某今往何處、宿云、此去衢州明果有華嚴頭、雖後生見識超卓、汝宜見之、傑依教往明果、依華、華家風難入、傑不憚辛苦、一日室中問、如何是正法眼、傑云、直甚破沙盆、華再追云、虛空消殞時如何、傑云、著著類脫、華云、罪不重科、華卽升堂告衆云、有大徹堂前崖崩石裂之句、傑依華四年、窮盡千聖命脈、毋老歸鄉、華以偈送曰、大徹投機句、當陽廓頂門、相從經四載、徵詰洞無痕、雖未付鉢袋、氣宇呑乾坤、却把正法眼、喚作破沙盆、此行將省親、切忌便蹤跟、吾有末後句、

待歸要汝遵、後出世衢之烏巨、學者雲擁、上堂、從來不唱脫空歌、把火燒山拾田螺、白骼樹頭魚產子、急水灘頭鳥作巢、皆謂在明果夜聞樵者歌、因打破漆桶、蓋師之密機莫測、前後七住大剎、終于太白、應庵之道藉若大行、信之行脚見人固宜帶眼莫帶耳、雖雛脚下有箇漢、也須驗過始得、不可以院子大小衆之多寡趂慣過時、須知此事、若不負志、雖從釋迦老子肚裏過、也只是箇屎橛、可不擇哉。

旦庵仁和尚、越之上虞人、少習天台教、初自括蒼隨雪堂過衢之烏巨、因見雪堂普說、曰、今之兄弟做工夫、正如習射、先安其足、從習其法、後雖無心、以久習故箭發皆中、喝一喝云、卽今箭發也、看看、仁不覺身倒、作避箭勢、豁然大悟、夏罷、以母老歸鄉、辭雪堂、堂以偈送之曰、儼老昔年窮事相、脫履南游扣宗匠、石頭路滑不辭勤、腦後一槌曾兩當、仁禪勁志許誰儔、訪我蒼山白練州、萬浪千波洶湧處、果然呼喚不回頭、西山積老期同住、又說重尋越山路、歸時應是歲華深、趙州更有爐頭句、仁從是歸梅山、庵十六年、後天童覺和尚、出隱至上虞、夜宿其庵、連榻與語大奇之、既歸、夏末不請首座、主事白覺、覺云、我首座早晚來也、乃遣侍者往、越邀仁、仁纔至、卽請首座寮、衆訝之、未幾、令秉拂挂牌、衆服膺、後二年宏智入滅、妙喜主後事、兩班皆衣布、唯仁不肯成服、喜怪問之、仁乃密啓其事、妙喜曰、元來是見雪堂來、後住長蘆、法席大振、嘗頌臺山婆子話、學者爭誦之、曰、開箇燈心皁角鋪、日求升合度朝昏、只因霖雨連綿久、本利一空愁倚門、顯謨呂公正已嘗問道於師、既別覓偈、師援筆贈曰、君今親切到長蘆、抖擻衣衫一物無、此去逢人如借問、但言風急浪華麤。

白楊順和尚、綿州人、依佛照、數年、因普說舉傅大士心王銘、曰、水中鹽味色裏膠青、決定是有、不見其形、豁然有省、次日入室、照問、眞佛住在甚麼、順曰、住在不定處、照曰、既是眞佛、因甚不定、順曰、若定卽非眞佛、照頷之、後居臨川、其道大振、上堂曰、犬吠黃昏月、風吹半夜燈、屋頭猫捕鼠、世上道嫌僧、嘉苴招人怪、孤高擧世憎、山林眞實處、凡事百無能、任他霜雪上眉稜、又曰、水洗溪邊石、風吹古殿旛、於斯知落處、可必在靈山。

月庵果和尚、信州鉛山人、初見寧道者、寧問曰、上座鄉里、曰、信州、受業甚麼處、曰、鉛山七寶、寧曰、還帶得寶來麼、果展兩手、寧震聲一喝、便下參堂、後見死心、心擧雲門話墮話、深徹法源、然不忘開福、後室中擧此話、以頌示學者、叢林盛誦、曰、萬仞龍門勢倚空、懸崖撒手辨魚龍、時人只看絲綸上、不見蘆華對蓼紅。

谷山旦、初參佛性泰和尚、一日上堂擧、趙州云、臺山婆子已爲諸人勘破了也、意作麼生、良久云、就樹撮將黃葉去、入山推出白雲來、旦於言下釋然、次日入室、泰問、前百丈不落因果、因甚麼墮野狐身、後百丈不昧因果、因甚脫野狐身、旦曰、好與一坑埋却、泰徵之、語皆不凡、未幾令立僧、名勳、一時、妙喜南行、旦呈頌云、異類中行世莫猜、故教佛日暫雲羅、度生悲願還無倦、方作南安再出來、妙喜賞之。

懶庵需和尚、依佛心才、才居大乘、需已首衆挂牌、常問學者卽心卽佛因緣、時妙喜庵于洋嶼、需之友號光狀元者、與需書云、庵主手段與諸方別、可來、此少款、需咲而不答、光以計邀師飯、需往赴之、及門會妙喜開室、需隨衆、喜問曰、僧問馬祖、如何是佛、祖云、卽心卽佛、作麼生、

需下語、喜詬之曰、汝見解如此、敢妄爲人師也、鳴鼓普請、揭其平生所得力處、排撥邪解、需淚交頤、不敢仰視、默計之曰、我之所得既所排撥、西來不傳之旨、豈止如此耶、遂歸心弟子之列、一日喜問曰、內不放出、外不放入、正恁麼時如何、需擬答、喜拈竹篦劈脊連打數下、需豁然大悟、曰、和尚已多了也、喜又打一下、需作禮、喜咲曰、今日方知不汝欺、遂以偈印曰、身心一如、身外無餘、咄這瞎驢、付與鼎需、自是名振叢林、出世住泉之延福、遷西禪、嘗示衆云、太虛挂劍、用顯吾宗、據坐禪威、如何近傍、縱具地回天轉電卷星飛底手段、要且不堪勍敵、而今莫有別休咎底麼、出來相見、稍涉遲回、一搥直教粉碎、喝一喝下座、又至節示衆云、二十五日已前、羣陰消伏、泥龍閟戶、二十五日已後、一陽來復、鐵樹開花、正當二十五日、塵中醉客、騎驢騎馬、前街後巷、遞相慶賀、物外閑人、衲被蒙頭、圍爐打坐、風蕭蕭、雨蕭蕭、冷湫湫、誰管爾張先生李道士、胡達磨、又示衆云、橫按鏌鋣、虛張意氣、穿開碧落、徒費精神、直饒不動神鋒、坐致太平、堯舜之君、猶有化在。

紹興間有一仕宦、至焦山、題風月亭、曰、風來松頂清難立、月到波心淡欲沈、會得松風元物外、始知江月似吾心、前後觀者莫不稱賞、唯月庵果行脚到、此觀之曰、詩好則好、只是無眼目、同坐者曰、那裏是無眼目、果曰、小僧與伊改兩字、則見眼目、同坐曰、改甚字、果曰、何不道、會得松風非物外、始知江月即吾心、坐者大服、信之、做工夫、眼開底人、見所自是、別況月庵平昔不曾習詩、而能點化如此、豈非龍王得一滴水、能興雲起霧者耶、兄弟家行脚當辨衣單下本分事、不在攻外學、久久眼開、自然點出諸佛眼睛、況世間文字乎。

宏智禪師、住圓通時、夜夢作一聯云、松徑蕭森窈窕門、到時微月正黃昏、自是數年杳不省、此建炎間、避虜一笠過東浙、抵天童、適主者退席、師自舟中破曉入山、恰是天明時節、見松逕蕭森、月蒙烟靄、忽省向來夢中之句、及歸旦過、雖不言名字、而兄弟已有識者、曰、此乃長蘆長老也、胡爲至此、密報主事、主事即申使府、府喜不自勝、蓋夜夢神人報云、天童主人乃隱州古佛也、即出帖差官、至旦過請之、師堅不肯、乃被旦過兄弟硬舁歸方丈、一住三十年、洞上之宗由茲大振、信人之住院緣法自定、初不在苟求也。

圓極岑和尚、台之仙居人、抱節孤高、近世罕及、久依雲居如和尚、在書司十七載、如遷寂、一錫回浙、依正堂辨於道場、未幾、令董座元、出世雪之卞山、乃石林先生講易之地、辨意具此一瓣香、爲拈出、而岑竟嗣雲居如、叢林多高之、後歷董大刹、然福緣蹭蹬、涉世多艱、岑終不以介意、平生施利、未嘗經眼、後退常之華藏道場、而終焉、有語錄二十卷、行于世、侍郎曾公仲躬爲序、其首、岑有贊長蘆旦庵、一贊云、夜半推出日輪、天明把住桂轂、拈將四部州、放在一粒粟、奏無絃而非履霜之樂、唱胡歌而非白雪之曲、大冶鍛絕鑛之金、痛鎚碎無瑕之珠、東湖赤梢鯉魚、生出金毛鐵犢。

混源密和尚、住紫籜、上堂云、雲山漠漠、喬木森陰、古屋耿耿、叢林闃寂、混源於此、栽荆棘、布蒺藜、箭硬塞、誰敢正眼覷著、忽有箇漢、向這裏轉得身、吐得氣、釅茶三五椀、意在鑊頭邊、其或未然、青尖路險、瞰空碧、莫謂公公不道來、又曰、春日暖、黃鶯鳴、更聽斷崖流水聲、春山疊翠款作步、歸來烟島與誰爭、且歸來一句作麼生、擧曲肱拳作枕、臥聽夕陽鐘。

嘗鄭公弼、參投子顒禪師、盡弟子禮、謹厚如初學者、後因張比部隱之以勢位陵弼子、公乃與之書曰、禪家者流、凡見說事枝蔓不徑捷者、謂之葛藤、往往鄙誚、遂著葛藤歌載于集中、弼因嘗思其所以、今試與隱之商確、不知何如、大抵俗士與僧人性識始無纖毫差別、其事蹟甚用不同處、且僧人自幼出家、早以看經日久、聞見皆是佛事、及剃髮後結伴行脚、要到處便到、參禪問道之外、群衆見聞博約、又後無限、耳目薰蒸既熟、忽遇一明眼人摘撥、立便有箇見處、却將前後凡所見聞、自行證據、豈不明白暢快者哉、吾輩俗士、自幼小爲俗事浸漬、及長大、又娶妻養子、經營衣食、奔走仕宦、黃卷赤軸未嘗入手、雖乘閑翫閱、只是資談柄而已、何嘗徹究其理、且士農工商、各爲業資、纏縛、知有禪林法席、假使欲去參問、何由去得、何處更有結伴遊山參禪問道及衆中博約之多乎、萬一明眼人因事遭際、且無一味工夫、所聞能有多少、所得能有幾何、復無問之所見所聞自作證據、更不廣行採討、深加鑽仰、才得一言半句、殊未明了、便乃目視雲漢、鼻孔遼天、自謂我超佛越祖、千聖齊立、下風、佛經禪册、都不一顧、以避葛藤之誚、弼之愚見、深恐未然也、弼不學則已、若以辨身心學之、須是周旋委曲、深鈎遠索、透頂透底、徹骨徹髓、一切見成、光明潔淨、絕一點塵許凝翳、方敢下隱之、隱之此之一事不是小小、直要脫脚無始以來生死根本、與管生死底閻羅老子、作抵敵、始得、不可取人閑言長語、以當參學、便自瞞去、祝祝、弼啓上比部執事。

蚺堂清禪師、見晦堂有所得、後遍游江淵、歸居廬山、去見眞淨於泐潭、淨問、甚麼處來、清曰、下江、淨曰、將得什麼來、清曰、和尚要什麼、淨曰、一切盡要、清乃提起坐具、淨曰、閑家具、清曰、莫要急切底麼、淨曰、試拈出看、清擲一坐具便行、淨大駭之、後出世黃龍、上堂曰、昨日林間爲野客、今朝堂上住持人、放開揑聚都由我、萬象之中獨露身、越明年、卽退院事、結茆於寺之東隅、久之再住、上堂云、掩息茅堂過六冬、心忘境寂萬緣空、不知定業從何起、依舊令教繼祖宗、後居曹山疎山、殆居泐潭、已八十三矣、諸方龐鴻絕物之士、皆歸之。

慈航朴禪師閩人、禀質脩黑、狀若應眞、嗣無示諶、初住明之廬山、遷育王、未幾、被有力者移、居海下萬壽、應庵歸寂於天童、太守聞其風、命朴繼席、是夜太白耆舊皆夢、有鐵羅漢、自舟中而歸、方丈、有同衣者、上一啓、曰、昔去鄭峰、而身輕一葉、我無靦顏、今上長庚、而道重三山、人有喜色、快離佛髻、利涉鯨波、出幽谷、而遷喬木、光乎此道、登東山、而小魯邦、允也其時、自此以還、未知所措、一住二十二年、皇子魏王并史魏公、皆重其道德、淳熙初、孝宗皇帝親書太白名山四字、以錫之、朴住廬山、有上堂云、德山入門便棒、臨濟入門便喝、德山棒頭耳聾、臨濟喝下眼瞎、雖然一搦一擡、就中全生全殺、遂喝一喝、卓拄杖一下、敢問諸人、是生是殺、良久云、君子可八。

深己庵永和人、嗣妙癡禪、嘗有頌送之曰、送君還憶深師叔、兩眼依前聽轆轤、後住溫州報恩、有冬至小參云、一二三四五、五四三二一、寒風劈面來、籬頭吹鬱栗、下座、余時在旦過中、聞其舉揚、便知其得雲門向上之旨、惜無人嗣續之、韶陽之道、遂湮沒於此人焉、

月堂昌和尚嗣妙湛、孤風嚴冷、學者罕得其門而入、歷董名刹、後終于南山淨慈、智門祚禪師法衣、傳下七世、昌既沒則無人可擔荷、遂留擔頭交割、今現存焉、故瞎堂遠爲起龕有三十

載羅龍打鳳勞而無功佛祖慧命如塗足油雲門正宗如折襪線之句嗚呼可不悲哉。

龜山光和尚參妙喜於洋嶼時凡半年無啓口處一日入室喜問曰喫粥了也洗鉢盂了也去却藥忌道將一句來光曰裂破喜莊色曰又來者裏說禪耶師於言下大悟遍體汗下遂禮拜喜以偈印曰龜毛拈得咲哈哈一聲萬重關鎖開慶快平生是今日孰云千里賺吾來光作投機頌云當機一拶怒雷吼驚起法身藏北斗洪波浩渺浪滔天拈得鼻孔失却口喜見之曰此正是禪中狀元也因號爲光狀元。

自得暉和尚在長蘆祖照席下時一窩蜂發衆皆散去唯師與宗白頭者不動私謂曰參禪本爲敵生死豈可因此難便逃避況我色身又弱若至中路也則落他手賊既至見衆僧俱散唯暉在堂中坐禪爭以箭射之俱不中暉寂然不動末後一箭從袖射透函櫃暉方驚覺因此成顫病宗白頭者坐庫司賊見遂縛之欲射殺傍有直歲僧再三近前白賊乞代賊曰汝是他何眷屬僧曰此僧已參得禪了他時可出來爲大善知識教化衆生我未曾參得便死無緊要故乞代之賊奇其言二人俱放後宗居明之翠巖其道大振向所代命者亦來座下宗常謂曰此乃再生父母也信之參禪若具正因般若豈無驗哉。

開善謙和尚建寧人初之京師謁圜悟無所省發後隨妙喜庵于泉南喜領徑山謙亦侍行未幾喜令往長沙通紫巖居士張魏公書謙自惟曰我參禪二十年迥無入處更作此行決定荒廢意欲無行友人竹原庵主宗元者乃責曰不可在路參禪不得吾與汝俱往謙不得已而往在路泣謂元曰我一生參禪殊無得力處今又途路奔走如何得相應去元告之曰但將諸方參得底悟得底圜悟妙喜與汝說得底都不要理會途中可替底事我盡替得爾只有五件事替爾不得爾自家祇當謙曰甚五件事願聞其說元曰著衣喫飯屙屎送尿拖箇死屍路上行謙於言下大悟不覺手舞足蹈曰非兄某甲如何得此田地元乃曰汝這回方可通紫巖書吾當回矣元即歸建上謙到長沙留半載秦國夫人亦因師打發大事乃還雙徑妙喜策杖倚門而待一見謙曰建州子這回別了也只管怨老僧自是爾時節未到於是日益玄奧後出世玄沙示衆云竺土大仙心東西密相付如何是密付底心良久云八月秋何處熱又云說佛說法誰惑盲聾論性論心自投穽陷行棒行喝倚勢欺人瞬目揚眉野狐精魅總不與麽大似揚聲止響別有奇特也是望空啓告畢竟如何白雲盡處是青山行人更在青山外。

辨正堂嗣佛照初道價不振蓋初機罕識之渠家風聲令衆皆畏憚之凡遇供日但挂牌一次主事有白之者辨曰我已挂牌了也如何又虛費常住金剛圈栗棘蓬且又不會吞透恰要家常飯主事不敢進語後因贊達磨云昇元殿前慷慨洛陽峰畔乖張皮髓傳成話覇隻履無處埋藏咦不是一番寒徹底爭得梅華撲鼻香雪堂見之奇之曰先師猶有此人在只消此贊可以坐斷天下人舌頭由是衲僧競奔湊後居霅之道場山衆盈五百。

竹原庵主建寧人出參妙喜得旨之後竟歸桑梓結茆韜晦諸方累請不出嘗垂語云諸方爲人皆是抽釘拔橛解粘去縛我這裏爲人一味添釘添橛加粘加縛送向深潭裡教爾自理會又曰參禪須透徹這一著子始得悟了大法不明者固有之大法雖明脚跟下紅線不斷

者、比比皆是、諸方聞恁麼道、盡罵老僧云、既是大法明了、又安得脚跟下紅線不斷也、怪他不得、爲渠欠這一解在、儘教他疑著、又曰、者一些子、恰如撞著殺人漢相似、儞若不殺他、他便殺儞、奇哉、大丈夫見解如此也。

水庵一和尚、婺之東陽人、外行恂糙、叢林謂之一糙、久參月庵果、果嘗參雲門話墮詰之、一日下語云、靈山受記、須是和尚始得、又嘗頌曰、二八佳人美態嬌、繡衣輕整暗香飄、偷身華圃徐徐立、引得黃鶯下柳條、月庵器之、後與同列不和、遭人暗計擠之、月庵信其言、擯出院、臨行書偈譏之曰、稽首月庵藏裏佛、黃金妙相實堪觀、白面夜叉七八箇、推轉如珠走玉盤、後出世台之慈雲、爲佛智嗣、蓋從參政錢公之請、錢公於佛智爲俗門弟昆、然叢林中亦有短之者、室中常以西天胡子因甚無髭鬚話、諭學者。

如無明三衢人、參雲蓋智、悟汾陽十智同眞話、凡說禪、便說十智同眞、叢林號爲如十智、後住道場、水庵圓極皆依之、故圓極嘗贊之曰、生鐵面皮難湊泊、等閑舉步動乾坤、戲拈十智同眞話、不負黃龍嫡骨孫、後終思溪圓覺、其塔存焉。

西禪淨此庵、參妙喜、有大發明、宗眼明白、嘗示衆云、善鬬者不顯其首、善戰者必獲其功、其功既獲、坐致太平、太平既致、高枕無憂、罷拈三尺劍、休弄一帳弓、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、風以時、雨以時、漁人歌、樵人舞、然雖與麽、堯舜之君猶有化在、爭似乾坤收不得、堯舜不知名、渾家不管、與亡事、偏解和雲占洞庭、又曰、閉却口時時說、截斷舌無間歇、最奇絕眼中屑、既是奇絕、爲什麽却成眼中屑、屑屑時無可了、玄玄處亦須呵。

顏、卍庵川人、久參圜悟、一日商確古今、師每當仁不讓、悟喝云、汝參禪不求正悟、只管信口亂道、顏不覺汗下、歸堂坐禪、徹旦不寐、忽然猛省、走見圜悟、議論鋒發、略無礙滯、悟卽點頭、顏曰、昨日亦如是、今日亦如是、又却點頭、悟叱之曰、癡漢、儞昨日雜忘想心也、顏作禮云、元來釋迦老子無神通也、悟歸蜀後、依妙喜徹證、向上巴鼻、首衆於徑山、名播叢林、後出世卞山、次居東林、嘗示衆云、祖師巴鼻、列聖鉗鎚、駈耕夫牛、奪飢人食、眈眈虎視、凜凜全威、如商君法、如孫武令、有犯有死、除非久戰沙場、具七四機、望風決勝、知進退存亡者、聊通一線、若是己眼未開、以蝦爲目者、只管趂隊喫飯、無自在分、如今莫有定奪底衲僧麽、山僧性命盡在諸人手裏、又曰、法無定相、遇物斯形、事無固必、功成不宰、有時風高寥廓、不可得而親疎、有時退己屈他、不可得而玩狎、恁麽則易、不恁麽則難、世法佛法俱成戲論、須知老僧不在者裏、且道在甚麽處、披簑側立千峰外、引水澆蔬五老前。

全無庵姑蘇人、冶父川金剛小師、久依育王佛智、與慈覺眞爲友、商確古今無不明、唯室中機緣不發、晝夜哀泣不睡、未嘗與人說世間話、如是者累年、一日在室中擒住問曰、有句無句如藤倚樹、道道、全擬開口、智擘面一拳、豁然大悟、連叫數聲、屈屈、智便放、有頌曰、鼓笛轟轟袒半肩、龍樓香噴益州船、有時著脚弄明月、蹈破五湖波底天、出世遍匡大剎、終于虎丘。

尤延之侍郎於宗門甚注意、初自郎中出守台州、朝覲次、孝宗忽問曰、卿去南台、地里圖中有何勝槩、尤奏曰、國淸萬年、孝宗大喜、又戲問曰、朕聞、方廣有五百應眞大士、元來是强人、忽然一時出現、卿以何法治之、尤不覺竪起拳頭云、臣有金剛王寶劍、孝宗喜動天顏、尤旣至

台以寬慈御民民甚愛之但南台旱澇易得尤嘗作詩曰來雨一朝成汗漫纔晴三日人憂乾向來盡道天難作天剩台州分外難然黃堂政暇多過報恩與佛照論道佛照後赴冷泉之請繼請伊庵權住持衆常四五百。

無著道人妙總蘇太州之孤女徧參諸大老後謁妙喜于徑山因上堂舉石頭道恁麼也不得不恁麼也不得恁麼不恁麼總不得時馮濟川侍郎在座下忽有省趨方丈告曰和尚舉石頭話揖會也喜曰侍郎作麼生會馮云恁麼也不得蘇嚕娑婆訶不恁麼也不得悉唎娑婆訶恁麼不恁麼總不得蘇嚕悉利娑婆訶適總自外至喜舉馮語似之總咲曰向來郭象注莊子然有識者謂莊子注郭象喜私識之次日入室喜問云古德不出門因甚在莊上喫糍總云和尚放某過即向和尚道喜曰我放過個試道看總云某甲放和尚過喜曰爭奈油糍何總喝一喝而出乃作投機頌曰驀然撞著鼻頭伎倆氷消瓦解逢磨何必西來二祖枉費三拜更問如何若何一隊艸賊大敗喜搥鼓印證曰汝既悟得祖師意一刀兩段直下了臨機一一任天真世出世間無缺少我作此偈爲證明四聖六凡盡驚撓休驚撓碧眼胡僧猶未曉。

瓊首座四明人徧見諸老留象骨四十年不出山唯占禪悅寮一板頭冬夏一衲人莫能親疎之侍鐵庵閩帥趙汝愚仰其風累虛大剎請其出堅臥不應然須欲一見託鐵庵以計誘其入府大作供養面囑其受請瓊秉志不渝趙公愈敬乃以詩送歸山云萬仞峰頭雪作堆一枝寒木倚巖隈青青不改四時操任待春風吹不回府判以下幕職皆賀其光大法門不少與夫今之持書覔院住者不可同日語之也。

李侍郎德邁守南台日以鴻福萬年薦善請拙庵伊庵鐵庵三大老出世一時龍象駢集後以國清請密庵密庵當時住衢之烏巨是皆專爲應庵之故及開堂各有所稟信之此事各在當人故不可以人情取悅士大夫也後李公歸番陽閑居日嘗語人曰浩平生雖在仕路家貧不足以自給無資可以濟人唯在丹丘請得三員善智識出世續佛慧命其功德不可思議哉。

佛照光初在仰山璇野庵會中受台州鴻福之命道游三衢抵烏巨密庵以偈送之以謂必承應庵也偈曰瞎驢生得瞎驢兒齷齪聲名徹四維更把少林無孔笛逢人應是逆風吹及抵婺之寶林時月庵弟子遠和尚住復舉雲門話墮語令判之意謂其承嗣月庵也及末丹丘開堂恰嗣妙喜叢林皆短之以謂妙喜門戶高大而然初不知冤有頭債有主也。知亭祖璇嗣月庵果、

塗毒和尚住常之華藏一日忽頭痛如刀劈連三日不已門弟子以謂其生腦癰矣既痛止乃見伏犀骨聳起如插不旬日詔下領雙徑蓋人晚成果有換骨之兆將行有雪林慈光者久依佛智歲晚雙瞽寓止慧山以三偈送上五峰其一曰塗毒離微及盡典牛佛祖俱亡咲捧天書南去叢林千古耿光二曰台嶺奇峰壁立大湖雪浪華飛試問五湖禪衲如今天下有誰三曰衰殘正賴餘潤紫泥掇我賞音附驥觀光喝石攀龍徒有此心。

歸雲本和尚南台人嗣瞎堂遠自金陵長竿遷疎山道聲籍甚狀元劉堯夫嘗問道於本氣義

相得、有上堂云、一棒下痛領將去、樹頭驚起雙雙魚、一句下折合得來、石上迸出長長笋、便乃用無所用、常轉無盡法輪、爲無所爲普現無邊身相、古人無著力處、便了劃箇影子道、一月普現一切水、一切水月一月攝佛法若如此、又要歸雲出來作什麼、大衆良久卓拄杖云、如今坐立儼然、向千鈞不立、錐處立地證得麼、大海若知足、百川應倒流、下座、有叢林佞篇、論議當世搖尾乞憐者、詞意甚超卓、圓極岑禪師親爲跋之、後輩入衆不可不知、其文曰、本朝富鄭公弼問道於投子顒禪師、書尺偈頌凡一十四紙、碑於台之鴻福兩廊壁間、灼見前輩主法之嚴王公貴人信道之篤也、鄭國公社稷重臣、晚歲知向之如此、而顒必有大過人者、自謂於顒有所警發、士大夫中、諦信此道、能忘齒屈勢、奮發猛利、期於徹證而後已、如楊大年侍郎李文都尉、見廣慧璉石門聰幷慈明諸大老、激揚酬唱、斑斑見諸禪書、楊無爲之於白雲端張無盡之於兜率悅、皆扣關擊節、徹證源底、非苟然者也、近世張無垢侍郎李漢老參政呂居仁學士皆見妙喜老人、登堂入室、謂之方外道友、愛憎逆順、雷揮電掃、脫略世俗、拘忌觀者斂衽辟易、罔窺涯涘、然士君子相求於空閑寂寞之濱、擬棲心禪寂、發揮本有、而已、後世不見先德楷模、專事諛媚、曲求進顯、凡以住持薦名爲長老者、往往書刺以稱門僧、奉前人爲恩府、取招提之物、苞苴獻佞、識者憫咲而恬不知恥、嗚呼吾沙門釋子、一餅一盞、雲行鳥飛、非有凍餒之迫、子女玉帛之戀、而欲折腰擁篲、酸寒跼蹐自取辱賤之如此耶、稱恩府者、出一己之私、無所依據、一妄庸唱之於其前、百妄庸和之於其後、擬爭奉之自卑小之耳、削弱風教、莫甚於佞人、佞敏實姦邪欺僞之漸、雖端人正士、巧爲其所入、則陷身於不義、失德於無救、可不哀歟、破法比丘魔氣所鍾、誑誕自若、詐現知識身相、指禪林大老爲之師承、媚當路貴人爲之宗屬、申不請之敬、啓壞法之端、白衣登床膜拜其下、曲違聖制、大辱宗風、吾道之衰極至於此、嗚呼天誅鬼錄、萬死奚贖、其佞者歟、嵩禪師原敎有言、古之高僧者見天子不名、預制書則曰、公曰師、鍾山僧遠蠻與及門而牀坐而不迎、虎溪慧遠天子臨潯陽而詔不出、當世待其人尊其德、是故聖人之道振之、後世之慕其高僧者、交卿大夫、尙不得預下士之禮、其出其處、不若庸人之自得也、況如僧遠之見天子乎、況如慧遠之自若乎、望吾道之興吾人之脩、其可得乎、存其敎而不須其人、存諸何以益乎、惟此未嘗不涕下、禪師沒熙寧十五年、其書以大法衰替無人荷負爲憂、頗如波旬、今日入我法中、詐妄自欺、以諛佞爲得計、如師子身中蟲自食師子身中肉、此書不作可也哉、首楞嚴曰、我滅度後、末法之中、多此妖邪、熾盛世間、潛匿姦欺、稱善知識云云、又曰、云何賊人假我衣服、裨販如來、造種種業、皆言佛法、却非出家具戒比丘、爲小乘道、由是疑誤無量衆生、墮無間獄、淳熙丁酉余謝事顯恩、寓居平田西山小塢、以日近見聞事多矯僞、古風彫落、吾言不足爲之重輕、聊書以自警云、歸雲如本書、圓極岑跋云、佛世之遠、正宗淡薄、澆漓風行、無所不至、前輩彫謝、後世無聞、叢林典刑幾至掃地、縱有扶救之者、返以爲蠻子也、余觀疎山本禪師辨佞、詞遠而意廣、深切著明、極能箴其病、第爲妄庸輩知識暗短、醉心於邪佞之域、必以醍醐爲毒藥也、淳熙壬寅上巳、圓極彥岑書于江左五峯。

懶庵樞和尙、黃龍下尊宿、承嗣道場慧、初孝宗皇帝雖向佛乘、未知有宗門下奇特事、皆是此

老引進、故瞎堂拙庵然後印可之、要知其來歷、皆樞之力也、樞謝事靈隱、後居于明敎永安蘭若、逍遙自適、有絕句題于壁曰、雪裏梅華春信息、池中月色夜精神、年來不是無嘉趣、莫把家風舉似人、可見其胸次也

竦空谷者餘杭人、在象田演座下、充維那、爲人清苦貧甚、冬則蘆華當絮、自非本色叢林、斷不放復、故演爲頌其道號曰、谷空空谷谷空空、空谷全超萬象中、流水落華渾不見、清風明月却相容、後在天童沿流縛屋、號曰弔古、多有兄弟陪其勝遊、余時在玉几拙庵老人會中、以頌寄之曰、聞君縛屋傍山阿、遠弔龍湫諾詎羅、未必將身潛碧嶂、且圖繞足向清波、韻傳空谷人難到、門掩山華雪不過、我待秋風洗巖壑、杖藜相與傲烟蘿、竦以清氣入骨、成烟霞痼疾、遂終于太白。

五臺草衣文殊像、始自本朝元豐間、大尉呂慧卿因戍邊遊臺山、見其貌、嚴童子、體黑而被髮、以蒲自足纏至肩、袒右膊、手執梵夾、與呂論華嚴大旨、而呂不知其大士、洎呵呂以凡情測于聖意、呂方寤下拜、而童子乃化文殊形、跨金毛隱隱入雲中矣、呂從是悔恨、歸家逾月鬱鬱不樂、後家人告以至誠懇惻聖容必現、呂如其言、乃竭誠悔過、期於必現、而後已、一日早起、乃是大士現於香几間、呵云、胡爲住相貪著之甚邪、呂曰、正欲世人咸見大士示化之眞容耳、急命畫工圖之、頃刻不見、其像遂傳于京洛間、今在處或見之、余蓄一本、乃吳僧梵隆之筆、期終身以奉之、嘗記與牛和尚一贊最佳、其詞曰、潦倒南泉不識道、理大小曼殊室利、貶向鐵圍山底、至今頭又不梳、面又不洗、一箇渾身坐在艸裡、鈍根呂公猶不瞥地、指出金毛當下迷己、靠倒了也蘇盧啞咧。

水墨觀音像、自唐吳道子李伯時後、惟吳僧梵隆茂宗者尤爲妙絕、故孝宗嘗贊之曰、水波不動、火光不興、梵隆妙絕、授之德明、蓋賜中官黃德明也、隆有小師至叶、亦善作、此近有閩僧德源、筆猶臻妙、故當時鉅公如謝丞相趙大師彥逾、皆有贊其像、曰、收視返聽、結跏趺坐、邈出筆端、以色見我、千百億身、無可不可、重說偈言、依然話墮、趙曰、出意作觀音、筆間造玄妙、會得眞面目、慧光應徧耀、若以相貌求、覩相生善念、念念既純全、眞相縱斯現。

柏堂雅禪師閩人、嗣懶庵需、初住紫籜、以佛照居冷泉、叔姪之故、特往輔佐之、居座元二年、兄弟多歸之、然雅剛正、佛照憚之、後住龍翔靈巖、其道大振、示衆云、瑞峯頂上、棲鳳亭邊、一杯淡粥相依、百衲蒙頭打坐、二祖禮三拜、依位而立、已是周遮、達磨老臊胡、分盡髓皮、一場狼藉、自餘之輩、何足道哉、柏堂與麽道、還免諸方檢責也無、具眼者辨取、洎合停囚長智、又曰、紫巖伸拳筍破、梢、楊華飛盡綠陰交、分明西祖單傳句、黃鳥留鳴燕語巢、箇裡見得徹信得及、若到諸方、決定明窓下安排、龍翔門下直是一槌槌殺、何故、不是與人難共、住大都緇素要分明。

廣敎會和尚川人、嗣石頭回、初依此庵于護國、因行者幹鐵板、皆有頌送行、會曰、空奮雙拳與麽去、打成一片早回頭、歸來挂在三峯頂、惱亂春風卒未休、兄弟皆愛之、後住雲居薦福、常安三二百衆、蓋根本端正、下梢決定殊勝也。

三峯印禪師婺州人、見地超絕、嘗頌百丈野狐話曰、不落不昧、誣人之罪、不昧不落、無繩自縛、

可憐柳絮逐春風、到處自西還自東、叢林多傳之、淳熙初、余在山陰能仁、與今瑞巖草堂潤公同往見渠舉之、恨不見其人、後因見塗毒老人頌、曰、秉大火炬燒太虛空、遠磨不會、眼瞎耳聾、尤在印之頂顙之上打筋斗耳。

自得暉頃在長蘆祖照會中、衆寮栽竹、暉忽成一頌云、高節深雲藏不得、幽人移向矮窓前、靈根瑞葉驚群目、將著清風動碧天、一時之作出自偶然、人已爭誦之、殆晚年居乳竇、已八十餘、忽奉旨住淨慈、人皆以爲語讖、及辭衆、上堂云、一住山中四十年、老來無日不思閑、今朝誤被君王詔、珍重禪流出故關、雲無心而出岫、鳥倦飛而知還、他年得意歸來也、賓主相忘松石間、及來南屏、大興曹洞之道、後歸雪竇、雙塔作終焉計、果應去時之語、所謂在心爲志也。

鑑咸庵與賢在庵、俱嗣心聞賁、鑑嘗頌、罽賓國王斬師子尊者、公案云、尊者何嘗得蘊空、罽賓又下斬、春風桃華雨後恣零落、染得一溪流水紅、叢林爭誦之、乃賢頌勘婆話曰、氷雪佳人貌最奇、常將玉笛向人吹、曲中無限華心動、獨許東君第一枝、妙喜一見大稱賞曰、賁老有此兒、黃龍法道未至委地、觀夫前輩之汲引後進、唯是公論、初無宗黨之分耳。

佛性泰頌、龍牙參翠微臨濟公案、曰、子卿不下、單于拜、始末常遵漢帝儀、雪後始知松柏操、事難方見丈夫兒、可謂親切明白、余頃在玉几、嘗見佛照舉此、必再三稱賞曰、此乃頌古樣子也、後觀其語錄、又愛其頌婆子偷趙州筍話云、櫻桃初熟筍穿籬、林下相逢老古錐、忍後不禁行正令、得便宜是落便宜。

開善謙頌心不是佛智不是道云、太平時節歲豐登、旅不賫粮戶不扃、官路無人夜無月、唱歌歸去恰三更、妙喜最喜之、金山奇道者別峯印之嗣、亦嘗以遲日江山麗、春風華艸香、泥融飛燕子、沙暖睡鴛鴦、頌之、亦不易得、時以爲超師之作也。

圓通晏和尚與化仙遊人也、見泐潭乾、左丞范公致靈初自內翰出帥豫章、過候溪、因語次、范嘆曰、行將老矣、墮在金紫行中、知此事稍遠、晏卽呼內翰、內翰應諾、晏曰、也不遠、翰曰、好好、更望指示、晏曰、此去洪都有四程、翰佇思、晏曰、見卽便見、擬思卽差、翰大喜從此有所入。

樞密吳公居厚、擁節歸鍾陵、見晏曰、頃赴省試、過圓通趙州關、因問前住訥老透關底事如何、訥曰、且去做官、今不覺五十餘年、晏曰、曾明得透關底事麼、吳曰、八次經過、常存念、然未脫灑在、晏擧與之曰、請使扇、吳揮扇、晏曰、有甚不脫灑處、吳大喜曰、便請末後句、晏乃搖扇兩下、吳曰、親切親切、晏曰、咭嘹舌頭三千里。

陳諫議彭公汝霖、手寫觀音經施晏、晏拈起曰、這箇是觀音經、那箇是諫議底、彭曰、此是某親書、晏曰、寫底是字、那箇是經、彭咲曰、却了不得也、晏曰、卽現宰官身而爲說法、彭曰、人人有分、晏曰、莫謗經好、彭曰、如何卽是、晏擧經示之、彭撫掌大咲曰、嗄、晏曰、又道了不得、彭乃頂禮。

安相國南遷、經過見晏、嘆曰、一生做官、今日被謫、覺見從前但一夢耳、晏曰、相公覺耶、安曰、此皆是本有、但未甚明了、晏卽召相公、公擧首、晏曰、了也、安曰、奈被事使得、晏曰、離京幾程至此、安曰、四十二日、晏曰、甚處得來、安咲曰、得力得力、晏曰、直下受用去、安曰、如何受用、晏曰、

朝朝相似、日日一般、安乃合掌、晏曰、但空諸有、勿實所無、大率如此、眞得大自在也。

二靈庵主蘇人也、初見眞淨、後參泐潭乾、有所證、回東浙、居雪竇之中峰庵、常有虎蹲伏座下、初與天童交和尚同行、二人稟誓斷不出世、後交爽其盟、出尸太白、和遂與其絕交、居中峰歲久、其山秀絕、凡居不久、卽有他山之命、和乃鉏斷山骨、竟爲待制陳公以詩誘出、住二靈庵、不一二年、禪衲麕至、遂成小小法社、名聞九天、屢詔不起、至今遺蹟尚存、多有偈語、行于世、二靈乃居鄞江月波之中、淳熙中別峯印自乳竇赴徑山、徑從其所偈云、萬頃湖光瀲灩中、二靈山色翠重重、片帆我欲天邊去、回首和公有媿容、可想見其高風也。

仁宗皇帝、因大覺禪師入內論心法、有御製賜之曰、初祖安禪在少林、不傳經教、但傳心、後人若悟眞如性、密印由來妙理深。

孝宗皇帝、因詔徑山潛禪師入內、亦有頌賜之曰、信手拈來說、宗乘數百句、僧歸寺寂寥、一字無著處。

叢林盛事卷上　終

叢林盛事卷下

寶峰祥叉手爲童子時、聞二老宿夜話舉古德頌云、征輪軋軋過江南、暫把遺骸寄泐潭、秦嶺烟沙猶未息、月明空鎖定僧庵、祥不覺感悟泣下、老宿問其故、祥云、某近夢中得此句、當是前身之所爲者、宿曰、審爾他日必居泐潭主人、祥後爲僧、入衆有年、果出世泐潭、屢住名刹、續以靖康之亂、避地天台、與高庵悟相繼示寂于蓮華、此地乃詔國師入定之所、前後皆如前頌所言、敎中云、凡報土皆夙昔願力所現、擧有定分、豈偶然哉、世流庸妄、求院區區苟合於聲利之域、雖老且死、而莫知安分者多矣、余昔在太白密庵會中、夜夢作一聯、書于壁間云、雪點欄干、寺在翠瑠璃之下、雲橫霄漢、人歸紅菡萏之中、已彌年猶世中轉圜、抑不知報土果現於何方耶、咄、切忌說夢。

普慈聞禪師、豫章人、姿貌不凡、初見雪堂行于衢之烏巨、次入湖湘、見妙喜於回雁峯前、備歷烟瘴、與狀元汪聖錫厚善、汪上饒人、擧以住懷玉、乃南禪師受業處、汪後帥閩、卽以象骨招之、乾道間奉詔尸雙徑、累詔入內、大悅龍顏、特賜慧日禪師、暮年再奉旨歸雪峰、彭山昇老次山作疏云、璇璣不動、斯須回天上風雲、大用現前、縱橫挂域中日月、喜百世一時之遇、冀千齡再會之享、德叉日新人惟求舊、某人道在南閩二浙、緣符雪嶠五峰、前兄後弟而自得嘉聲、昔去今歸而皆奉詔旨、中興佛法、九州四海悉見天心、獨受主知、名公鉅卿咸尊師禮、

方逐丹墀鳳翥、俄驚合浦珠還、好看白馬來東、何待青衫拂地、一千餘龍象衲子、竚觀象軾言旋、三百年祖師道場、又見木毬再輥、請提密印、同副芹誠、聞福緣甚勝、近世罕及、但向上一著、叢林不全取信、抑身滅而名殞耳。

鐵庵一大禪師建昌人、與佛照曇道者俱同行、初見月庵果、次見應庵華、住歸宗時、嘗爲侍者、華頗喜之、其孤耿不與世接、嘗題其頂相曰、掛拂拂竪、拂全機出沒、一喝耳聾、三日屈屈、且道是馬祖屈百丈屈、宗一侍者但恁麼拈出、乾道間、出世住台之慶善、遷衢之祥符、竟嗣月庵、蓋不忘所得也、有贊其像曰、揭翻四大五蘊、徹證向上一竅、傾心吐膽爲人、暗裡返遭怪哭、眼裏瞳人吹鐵叫、持鑿酌海謾勞神、熨斗煎茶不同銚、其後自嘉禾遷疎山仰山、兩住雪峰而終。

雪堂行有法語示行者元友曰、雲居高庵老人、在龍門作首座、時凡臨衆、必曰、須知有識者在、他日侍誨次、嘗請聞其說、語曰、廣衆之中、鄙者常多、而識者常寡、鄙者易習、識者難親、自奮志於其間、如一人與萬人戰、庸鄙之習力盡、眞挺特沒量漢也、余從是終身誦其言、氣勝志則爲小人、志勝氣則爲端人正士、惟志與氣齊、爲得道賢聖、有人於剛狠不受諫曉者、氣使之然也、耆婆將死、百草皆泣曰、耆婆在世我等有用、耆婆死後世間無有識我者、此喩世間諸法、未出家時、將冠之年、見獨居士嘗謂余曰、中無主則不正、外無主則不行、余從是終身踐其言、在家立身、出家學道、以至終年、倚此如衡石之定輕重、規矩之成方圓、舍此則事事失準、元友其勉之。

潁濱先生蘇子由、嘗謫筠陽、與眞淨道契、嘗有頌寄香城順和尚曰、融却無窮事、都成一片心、此心仍不有、從古至如今、又曰、如見復如亡、相逢咲幾場、此間無首尾、尺寸不須量、欲識東坡老、堂堂一丈夫、近來知此事、也不識文書、東坡亦在貶所、聞公深向此道、榜其所居曰東軒、以詩戲之、有盛取東軒長老來之句、子由答之曰、縱使盛來無用處、雪堂自有老師兄、又嘗和淵明一詩云、佛法行中原、儒者恥論玄、功施冥冥中、而何負當時、此方舊染雜、渾渾無名緇、治生守家室、坐使斯人疑、未知酒肉非、寧與生死辭、熾然吾閩中、佛事不可思、生子多潁悟、得報不汝欺、時有正法眼、一出照曜之、誰謂邑中豪、請誦我此詩。

晁光祿迥精窮內外敎典、晚年自著法藏碎金、流行儒釋中、其語甚敦敎化、儒曰、士之有志不可無學、故佛書云、無學者其理無別、若會其語、因循自棄、猶可惜也、余觀三敎之書、粗見必學之意、儒周易曰、君子進德修業、道敎老聃曰、上士聞道勤而行之、釋寶積經曰、猶如大龍所作已辨、捨於重擔、殆得己利、余因會同參究、雖知其文句不類、而必德從於學無疑矣、加以耆年之志深、流於至窮、最後一說、雖萬劫之不可易也。

大圓智禪師四明人、嗣道林一、一見祐山寓、寓見黃龍南、故其親得黃龍宗旨、有三關頌并拈古、盛行叢林、初妙喜聞其坦率不事事、不甚樂之、及觀其拈古、乃撫几稱賞善、曰、眞黃龍正傳也、掇筆大書四句於後曰、七佛命脈、諸祖眼睛、但看此錄、一切現成、由是學者方知二師用處初無二致、然智嘗謂人曰、杲妙喜作用不減巖頭死心、可謂百世之師也、但未與老僧商確那事、若見老僧一回、定敎他光前絕後、然二師竟不相見、智終于石霜、預旬日受弟子

生祭、就法座上、端然化去、方知妙喜不輕肯人也。

妙道道人延平黃氏女也、徧見尊宿、後謁妙喜于徑山、因妙喜室中問僧、不是心、不是佛、不是物、是什麼、僧罔措、道立門外聞之、豁然明契、乃告喜、喜曰、桑樹著箭楮樹出汁、因印其所解、後開堂於洪福、示衆曰、禪非意想、立意乖宗、道絕功勛、建功失聞、聲外句不向意中求、持照用機關、握佛祖鉗鎚、有佛處互爲賓主、無佛處風颯颯地、心寧意泰、響順聲和、似恁麼人、且道什麼處安著、良久曰、披簑側立千峰外、引水澆蔬五老前、又曰、貶上眉毛蹉過、大似開眼尿牀、現成公案放行、正是黠兒落節、恁麼不恁麼總不得、曳尾靈龜、不是心、不是佛、不是物、虛空釘橛、離得許多閑門破戶、猶是死水裏藏龍、傾湫倒嶽一句作麼生道、巨靈擡手無多子、分破華山千萬重、後水庵見僧舉似、以手加額曰、箇事可謂非男女等相、多少丈夫漢、十年五年在衆中、討頭不著、他雖是箇女人、宛有丈夫之作、勝却多少杜撰長老也。

機簡堂初住饒之筦山、十七年、火種刀耕、備嘗艱苦、其所住者皆四方本有、故能同受寂寥、不以世間榮耀爲事、而布素一節、故世謂之機道者、後居九江圓通、大行此庵之道、示衆有云、圓通不開生藥鋪、單單只賣死猫頭、不知那箇無思算、喫著通身冷汗流、自是遷太平之隱靜、衆雖多堂厨淡薄、兄弟罔敢言之者、凡請執事、必遵老黃龍之法、粥罷挂鉢向堂、令侍者白槌曰、請某人執其職、兄弟靡不從之者、倘有違者、卽叱之曰、簡堂這裏不做爾向甚處做、噫前輩道重、用人如此容易、豈若今時七跪八拜、下情無任、猶被渠踍跳上三十三天去、苦哉佛陀耶。

證西林號老衲、長沙人、月庵之嗣、月庵居道林、證爲察元、已爲兄弟、挂牌入室、其爲人至誠鄭重、雖處暗室、如臨大賓、兄弟見之、其容必莊、後居西林道行、有頌話墮公案曰、石火光中立問端、不能透脫、幾多難、頂門若具金剛眼、肯被傍人把釣竿、蓋其親得月庵說話、又且甚脫窠臼耳、始保安封亦見月庵、見地尤別、亦嘗頌曰、歲暮抱琴何處去、洛陽三十六峰西、生平未知先生面、不得一聽烏夜啼、可謂善學柳下惠、終不師其迹、頂門具爍迦羅眼者、分明辨取。

詢罵天見地明白、嘗侍佛鑑、鑑以其形容醜黑而談天者又曰、其福寡、一日偶謂詢云、可惜一顆明珠、被儞者乞兒拾得、詢云、和尚且牢收取、又一日謂曰、一切衆生何嘗悟來、詢曰、一切衆生何嘗迷來、忽有一行者面前過、鑑曰、如何是祖師西來意、行者罔措、鑑曰、何嘗悟來、詢亟呼行者曰、放參也未、者曰、放參了也、詢曰、何嘗迷來、鑑叱曰、業種出去、詢曰、和尚且低聲、恐外人聞得、我父子二人在此說迷說悟、鑑大咲。

劍門分庵主閩人、早歲於道自有發明、竟剃髮走鄉里、時人謂之狂僧、分不恤、初見懶庵需、後謁妙喜雙徑、聞其風顚決不令參堂、分乃乘憤下山、將求歸計、因抵錢塘江上買舟、竚立於浙江亭畔、泣下曰、我波波吒吒、出嶺來見妙喜、又不得預衆、是夙無般若緣也、忽聞喝道者云、侍郎來、分豁然大悟、乃有頌云、幾年箇事挂胸懷、問盡諸方眼不開、今日肝腸忽然破、一聲江上侍郎來、徑歸洋嶼依懶庵、懶庵印其所得、未幾、忽辭去、懶庵以偈送之曰、江頭風急浪華飛、南北相逢不展眉、獨有分禪英俊手、等閑奪得錦標歸、後徉狂七閩、或入酒肆、或在

魚行、人莫能測、唯同參木庵永、每見必以師事之、嘗示衆云、這一片田地、汝等諸人、且道、天地未分已前、在什麼處、直下徹去、已是鈍置分上座了也、更若擬議思量、何啻白雲千里萬里、驀拈拄杖打散大衆、又曰、十五日已前、天上有星皆拱北、十五日已後、人間無水不朝東、已前已後總拈却、到處鄉談各不同、乃以手指屈云、一二三四五六七、八九十十一十二十三十四、復云、諸兄弟且道、今日是幾、良久云、本店賣買分文不賒。

伊庵權臨安昌化人、嗣無庵余、出世萬年、一坐九年、法席大振、然權律身奉衆、言行俱有準繩、大率効佛智裕誰庵粹之爲人、座下常安五百衆、有自贊云、鼻如鷹觜、對面千里、要識萬年、只這便是、叢林俱愛之、後遷常之華藏、結夏示衆云、今朝結却布袋口、明眼衲僧休亂走、心行滅處解翻身、噴嚏也成獅子吼、栴檀林任馳驟、剔起眉毛頂上生、剜肉成瘡露家醜。

高宗孝宗皆有彌勒大士贊、叢林有道之士、無不和之者、少有愜二帝意者、贊曰、碧落片雲、長天孤月、能棲物外、妙分幽絕、慣隱市廛、奇哉英傑、隨行分惟有拄杖布袋、充飢分何妨酒肉腥血、別別玉殿瓊樓更加雪、又云、袋貯乾坤、杖挑日月、嘉嘉蓋蓋聖中絕、憨憨癡癡僧中傑、令行分一棒一條痕、逗機分一摑一掌血、別別恰似紅爐一點雪、乾道間直道者住保寧、嘗和之曰、量包太虛、眼懸日月、住天宮分天中之絕、居人間分人中之傑、放下布袋分坐斷四大部州、拈起拄杖分直得大地流血、別別明明有理難分雪、范使李公爲奏上、孝宗大喜之、賜錢五百萬米五百斛、以助供衆。

別峰印自金山遷乳峰、有鑿生陸安者、夜夢神人報云、師卽達觀穎之後身也、師天資閑暇、嗣華藏珉、自出蜀卽抵雙徑、見妙喜、喜問云、甚處來、印云、西川、喜云、未離劒關、與儞三十棒、印云、合起動和尙、喜館於楞伽室、待之甚厚、得歷居大刹、晚奉詔居徑山、一住九年、每以華嚴作佛事、紹興庚辰示寂於菖蒲田、辭徑山塗毒、毒曰、和尙幾時行止、印曰、水到渠成、卽更衣端坐而逝、其年臘月八日也、臨行門人覓偈、卽大書曰、千偈萬偈、總是熱荒、我有一句、死後擧揚、塗毒亟捧龕返、歸法堂正寢、七日以當代禮送之、時感之、後二年塗毒示歸寂、人懷報德之心、印有山中書懷、一味林間飽黑甜、儘教氣焰日炎炎、不將無病自求病、多是解粘添得粘、粗有芋煨如懶瓚、更無錐卓似香嚴、枕邊留得青山在、雨後層層翠滴簷、又嘗題農夫醉打圖、一絕、農夫何事損天和、醉後依前擊壤歌、不似當年劉項飲、胸中各自有干戈。

塗毒老人居鑑湖日、與放翁最厚、紹興壬子七月二十七日示寂、放翁以詩哭之、曰、岌岌龍門萬衲傾、翩翩隻履又西行、塵侵白拂繩牀冷、露滴青松卵塔成、遙想再來非四八、應當相見是三生、放翁大欠修行力、未免人間愴別情、又贊其眞云、骨格瓌奇、精神瀟灑、貌肅而和、語盡而簡、畫得者莫氣逼人、畫不得者頂門上一隻眼。

石窓恭禪師徧參諸方、久依黃龍忠道者、後依宏智、靖康中自湖湘歸東越、忠以頌送之曰、閑思昔日戲沙洲、屈指于今四十秋、君到石窓閑借問、許多風月付誰收、恭出世越之報恩、後居瑞巖、其道大振、然克苦爲人、布素以禦寒暑、事無細大、必親臨之、叢林整齊、衲子望風而服、嘗有佛生日頌、曰、五天一隻蓬蒿箭、攪動支那百萬兵、不得雲門行正令、幾乎錯認定盤星、叢林沸傳之、有徹白頭者、三衢人、與恭同出宏智門、操履孤潔、不與世接、嘗典賓於太白、

妙喜見大俊敏、私喜之、以計誘其過玉几、徹秉志不渝、竟依老天童、乾道初恭欲羅籠之以爲嗣、退明之報恩、與之出世、住二年、四方龍象每歸之、然徹竟嗣宏智、恭以不樂、徹亦不卹、後遷婺之華藏、將發而示寂、臨行書遺偈云、當陽一句、更無巳互、月落寒潭、烟迷古渡、是眞得洞上之宗、惜其不久住世間耳。

孝宗皇帝在位二十七年、每宣諸山長老論道、唯佛照禪師最爲知遇、淳熙初住冷泉、宣入選德殿、論宗門事、五宿禁園、從古未有也、故佛照嘗奏曰、陛下前後宣諸山長老論道、如何、孝宗曰、難得似長老直捷、佛照又奏曰、臣生長山林、語言麤疎、伏乞陛下寬貸、孝宗曰、不妨這裏與長老忘懷論道、前後賜諸山偈語不爲不多、賜佛照者最爲尊敬、聖語曰、大暑流金石、寒風結凍雲、梅華香度遠、自有一枝春、佛照嘗和之、一日又批問佛照曰、世尊雪山修道六年、所成者何事、請師明說、時佛照坐施主家齋、天使忽到、便請回奏、照著語云、將謂陛下忘却、可謂無師自然之智也。

誰庵演闐人、初參妙喜於回雁峰下、洞明宗旨、喜曰、這猢猻子以後須括搔人、去在、後辭妙喜、偈曰、倒騎鐵馬度瀟湘、礪草巖華不覆藏、回雁峰高親到頂、更無佛法可商量、後住江上龍翔、兄弟多依之、水庵有偈曰、江上如今得白眉、爲人偏用截流機、然演善作偈語、宗眼端正、題新昌石佛曰、積念有年瞻石佛、今朝一見絕疑猜、都盧面目只如此、却謂三生鑿出來、又題龍湫曰、詎羅坐斷大龍湫、伎倆却無錯路頭、只見高巖傾瀑布、那知碧嶂外清幽。

別峰雲嗣少溪淨、淳熙間住福之支提、江浙志道者罔不依之、嘗有善財南詢頌云、鬟角分明者小兒、肚皮好待彌勒知、賺他五十三知識、敗闕都盧納向伊、叢林競傳、後遷莆陽華嚴而終。

洪首座臨川人、嗣佛照、出世洪之光孝、蓋應漕使尤延之之命、次任太守、旦望公參須要諸山就公廳下長揖而退、洪聞之不樂、以謂、天下無此道理、卽擊鼓升堂、退院而去、頌曰、祖翁活計元來大、誰敢區區謾折腰、珍重豫章賢太守、芒鞋竹杖任逍遙、太守聞之慚甚、遣使再請、洪竟不回、江西諸山從此增氣、後住吉之祥符、遷開福而終、尤延之侍郎親爲作傳。

一和尚自號村僧、嗣草堂清、久住平田、後長蘆力命不赴、以皎如晦一疏而往、其詞曰、這般梵刹、固非些小叢林、箇樣村僧、豈是尋常種草、要得門當戶對、還他境勝人奇、某人、生鐵面皮、潑天聲價、盡大地揑成院子、未稱全提、將河沙都做衲僧、不消一喝、且看光火菩薩面、掉却蹤跡羅漢家、來撑沒底船、激起蘆華千尺浪、宜擧向上句、祝延玉葉萬年人、巢既住一葦、次年復歸萬年、未幾示寂于觀音院、先自入龕落鏁、說偈曰、今年七十五、歸作庵中主、珍重觀世音、泥蛇吞石虎、居平田衆常五百、時江西渤潭有化士、修大寂塔、兄弟皆作頌、時有一座主、初更衣入衆、因成一頌曰、寄語江西老古錐、從他日炙與風吹、兒孫不是無料理、要見氷消瓦解時、又作冬日卽事云、朔風也解知人意、吹落巖前古樹枝、憑我一爐深夜火、轉教心性懶趂時、雪巢見之、大稱賞曰、禪和子三十年在衆噇飯、未必有此作、他日必成大器、後果如言、住東掖、大興南台之教、是謂神照師也。

松源在東湖日、幹佛殿者乞頌、源大書云、黃面瞿曇眼瞪瞪、千方百計討便宜、于今無著渾身

處、却要兒孫蓋覆伊、示官人云、說禪說道說文章、林下相逢唉幾場、踏著吾家關棙子、白衣拜相也尋常、湖海爭誦之。

曇廣南者久依密庵、後在佛照會中爲寮元、有化鹽頌云、合水和泥一處烹、水泥盡處雪華生、便能索起遼天價、公驗分明誰敢爭、佛照喜曰、這廣南蠻也、弗廣、後住雪之道場、其道將振而爲有力者攘之、未幾終于冷泉。

雷庵受首座平江人、道貌脩偉、久依月堂拗堂諸老、曾集普燈三十卷、又註楞伽、庵于雪之曹氏庵、與抒山居士劉季高之姪平氏者最善、慶元初、復庵于西湖、劉公任丹丘、以巾子峰報恩招之、以頌謝云、結茆方喜倚長松、一枕清風睡正濃、禪道尚無心理會、肯將身入鬧藍中、劉見大喜、再遣使迫之、亦和前韻云、昂藏骨相倚喬松、晚歲清陰只自濃、好向紅塵姑著脚、何妨都在唉談中、竟不赴、時皆高之、當今搖尾乞憐之時、寧復有此人邪。

大惠在雙徑時、一千七百龍象、有行者祖慶、爲母設忌、乞頌、慧見其骨相不凡、與之一頌曰、透過那一著、佛亦不能容、猛虎當路坐、狐兎自潛蹤、慶妙年而出世南源、移道林、一夕夢寶公以二十隻筯與之、既覺罔測、時劉樞密洪父帥金陵、以鍾山招之、一住二十年、中間因回祿復新之、豈偶然者哉、慶元初、佛照自五峰歸育王、慶遂繼踵、二年而沒、信妙喜之言不謬矣、

晦庵光和尚嗣雪堂行、住龜峰、遷泉之法石、蓋赴參政周公葵之命、臨終以頌授小師元聰曰、

叢林毒種、元聰侍者、耐耐吾宗、滅汝邊也、吾今高枕百無憂、聰汝時撾塗毒鼓、聰久依密庵、首衆於徑山、出世洪之報恩、遷雲居隱靜雪峰、晚被旨居徑山、時謂晦庵不妄許可也、抑亦雪堂慈悲行門之所遺蔭邪。

圜悟初在成都講肆、范丞相伯才見其器質不凡、因作長篇、激其往南方行脚、其詞曰、觀水莫觀汚池水、汚池之水魚鱉卑、登山莫登透邐山、透邐之山艸木稀、觀水直觀滄溟廣、登山直上泰山上、所得不少所見高、工夫用盡非徒勞、南方幸有選佛地、好向其中窮妙旨、他年成器整頹綱、不負男兒出家志、大丈夫兮休擬議、豈爲虛名滅身計、歡諸時節苦無多、却被光陰暗添歲、成都況是繁華國、打住只因華酒惑、吾師本是出塵人、肯隨齷齪同埋沒、吾師幸有虹蜺志、切莫蹉過向泥水、君不見吞舟之魚不隱小流、合抱之木豈生丹丘、大鵬一展九萬里、肯同飛燕著沙鷗、何如急流千里驥、莫學鷦鷯戀一枝、直饒講得千經論、也落禪家第二機、白雲本自戀高臺、暮罩朝籠不暫開、爲赴蒼生霖雨望、等閑猶自出山來、又不見荊山有玉石、瓊瑤良工未逢居、蓬蒿當年若不離荊楚、爭得連城價倍高。

本朝士大夫、與當代尊宿撰語錄序、語句斬絕者、無出山谷無爲無盡三大老、今代有蜀人馮當可者、於宗門深有造入、與石頭回禪師撰語錄序、江湖沸傳之、其詞曰、五祖晚得南堂、糙暴生獰、凌跨懃遠、天道地窄、投老大隋、回道者以運鎚攻石之手、仰擊堅高、出力既麤、一鎚便透、歸坐釣魚山上、乖崖峭壁十倍其師、狠毒砒礪不容下口、其徒彥聞更不瞥地、要收餘毒散施諸方、余恐後人不著便宜、自取僵仆、故爲標其茶毒、以示來者、縉雲野老序。

無垢居士張九成、參妙喜有大發明、而宗眼明白、嘗以老大而又大言、三乘十二分教、八萬四千餘卷、到者漢面前不消一唾、十信十住十行十回向、等覺妙覺到者漢面前不當一放、多

年臘果養得五箇虎子、橫行四海、向大唐國裡日本國裡新羅國裡、拋屎撒尿、直得乾坤漆黑、日月奔忙、須彌岌嶪、四海揚波、慢調絲竹、打箇小坐、看渠面皆、大似三家村裏田庫兒、而其用處、猶如烏風黑雨、天雷閃電、霹靂聲中、臀栗撥刺、拖去一大猛火、咄、是甚閑公事。

蔣山元嗣慈明、元後得雪竇雅、雅得慈覺印、混融然實嗣之、乾道間、然住金陵天禧、時妙癡禪住保寧、明大禪住蔣山、明薄然、以其流派非黃龍楊岐直下也、嘗與庭諍、然口辯捷、明頗遭所困、竟得癡禪解之、然器量過人、但出世太早、不歷諸方門戶、宗眼混淆、故叢林多以此薄之、後住南華、滅於五羊、臨行脫灑、邦人積沈香以茶毘之、一段殊勝、非小小、余與然生緣同處、恨不識其慈範、最愛其祭慈覺一文、甚佳、曰、建炎三年我忽顛怪、拈下幞頭、把斷腰帶、夜盜師庭、遭師捉敗、既無一物、空禮三拜、自是退忠、恨不小小、人或罵師、老不唧嘟了無能解、我卽舉首仰天慶怪、人或譽師、道超佛祖、量廓滄海、我卽持杖擊其頭碎、如何若何、錯會者多、敬陳薄奠、師咲婆婆、然有小師大驥者、淳熙間住衢之靈曜、時朝廷方行役法、二浙江淮處並差定、驥乃糾率衢婺處三州僧尼道士、造朝免之、今天下僧由此獲安、不爲國家之差役者、蓋驥之力耶、後之圓頂方袍者、當知所自耳、驥後住天台平田、而卒。

肯堂充見卍庵顏、性識敏利、博達古今、前後所作語句甚多、送僧訪簡初居士尤侍郎、求典牛和尙語錄序、其詞曰、岷峨山下三角虎、跳入南方誰敢侮、泐潭老凖眼放光、背手暗發千鈞弩、一箭中的死復活、從此咬人齒不露、武寧山中四十年、豈獨坐斷江西路、徑山塗毒遭一口、至今有理無雪處、却遣弟子往毘耶、問訊居士覓轉語、居士贊之曰卽啞、居士爲之目卽贊、居士贊罵不及處、請爲渠作語錄序。

公安珠川人、亦嗣卍庵、爲人骨骾、人莫能親疎、乾道間道行湖湘、嘗有自贊曰、月色照山容、泉聲落斷崖、水光山色裡、一塊爛枯柴、又曰、老鶴入枯地、善解藏羽翮、點著背摩天、壺中天地窄、

瑞巖順嗣水庵、號葦堂、初在池之梅山、嘗有上堂云、今朝五月十五、一夜淋淋下、雨不知林下道人、相逢作麽生擧、擧得全攔胸劈面拳、爲甚麽如此、精金若不經爐冶、爭得光華徹底鮮、又十日入室、五日陞堂、千醜百拙、無處堆藏、咄、相牽入鑊湯、後終於台之瑞巖。

萬壽脩闔人、初依應庵、後見或庵於常之無錫、出世雪之上方、遷雙塔、其道未振、因塗毒自鑑上能仁、持盞過吳門、衆善友請小參、脩引坐云、正法眼藏向這瞎驢邊滅却、直得盡大地人扶持不起、是以曹溪路上荊棘參天、少室峰前髑髏遍野、非盧扁不能起膏肓之疾、非孫吳不能全殺活之機、塗毒一撾聞者皆喪、要津把斷風骨旋生、既有如是宗師、佛法不怕爛却、然雖與麽、且道、因行棹臂、普照羣機、一句、作麽生道、三尺靈光摩竭令、滿城和氣暖如春、下座、塗毒握手云、將謂或庵其後無人、元來有吾姪在、自此道行吳中矣。

咲庵悟蘇之常熟人、弃俗出家、初見無庵全、後見密庵于烏巨、淳熙間首衆於冷泉、專以供養爲心、時歲大飢、密庵持盞未回、知事約束方來、悟坐在山門、一例放入、洎密庵回、知事沮之、密庵見悟似不悅、因辭云、有但得院子如揲大盡情供養五湖僧之句、不逾時、住衢祥符、歷董數刹、果以供養爲務。

鴈山枯木元禪師、嗣妙喜、示衆頌曰、鴈山枯木實頭禪、不在尖新語句邊、背手驀然拈得著、長鯨吞月浪滔天。

溈山寶亦嗣大慧、叢林老成、晚居大溈、有頌云、八十翁翁輥繡毬、輥來輥去不知休、如今輥向千峰頂、坐看溈山水牯牛。

空東山福人、初見艸堂清、後見妙喜、喜見其姿氣超卓、意欲羅籠、至爲頂相贊云、慧空抓著吾痒處、吾嘗箭著他痛處、痛處痒痒處痛、不與千聖同途、豈與衲僧共用、誰知掃帚竹裏無錢筒、蒿枝叢內無梁棟、如今各自不知己、一任畫出這般不唧嚼底老凍膿、從教挂向壁角落頭、使盡夜燒兜樓婆畢力迦沈水膠香、作七代祖翁供、然空秉志不渝、竟嗣艸堂、叢林有識者輩、皆仰羨之、空善作語句、有東山外集、行于世、如曰、東山送人只一句、纔擬欽承、喝出去、如今更向紙上求、大似蒼鷹拏狐兎、上人上人知不知、端坐守之無了期、趂取秋風霜木落、泐潭百丈在江西、有昇次山、住幽巖、鏤空之集、流于江浙。

庵堂道號、前輩例無、但以所居處呼之、如南嶽青原百丈黃檗是也、庵堂者始自寶覺心禪師、謝事黃龍退居晦堂、人因以稱之、自後靈源死心艸堂皆其高弟、故遞相法之、眞淨與晦堂同出黃龍之門、故亦以雲庵號之、覺範乃雲庵之子、故以寂音甘露滅自標、大抵道號有因名而召之者、有以生緣出處而號之者、有因做工夫有所契而立之者、有因所住道行而揚之者、前後皆有所據、豈苟云乎哉、今之兄弟纔入衆來、未曾夢見向上一著子、早已各立道號、殊不原其本、故瞎堂遠禪師、因結制次問知事云、今夏俵扇多少、知事曰、五百來柄、遠曰、又造五百所庵也、蓋禪和庵、纔得柄扇子、便寫箇庵名定也、聞者罔不大笑、余以母氏夢梵僧頂一月而投之懷中、既覺遂有、因以古月自號、以安穩眠呼之、蓋彷覺範甘露滅也、二號維摩寶積所出、故橘洲曇公爲余作古月說云、萬古長空、一朝風月、慚愧古人、模寫得成也、融禪未生之夕、其母夢得月、是爲生子之祥、愧今人不去刼模子也、融禪不負其母、兼不忘古人、古月名庵、不爲忝矣、塗毒老人亦有四句云、萬古長空月、何曾有晦明、此心元一體、隨處燭精靈。

安定郡王號超然居士、頃在東京、時卽留意空宗、見長靈卓禪師、有打發處、後因事謫江西、及虜人陷東京、宗室諸王多隨二聖北陷、居士因此得免、乃居三衢、與馮侍郎至道幷雪堂行禪師、爲方外友、衢人知信向佛乘、多自茲始、嘗有南嶽法輪省行堂記、最高妙、又撰戒欲文、今錄于此、嘗謂世人無始時來、有大苦惱惑亂身心、不求出離、所大苦者淫欲之事也、此苦能昏塞精神、戕賊性命、障德敗道、妨廢修行、每念私心潛散、邪見動搖、不以境緣有無、不分去處淨穢、便起顚倒、恣行觸汙、淨眼觀之、有何快樂、且情塵流轉、慾火燒然、自古迨今、老幼貴賤無不被其害也、蓋世人廣貪財利、追求爵祿、如意之後、唯是耽著色欲、又有緇素之間百念灰冷、惟此一事多爲魔惱、至於造妖作竊傾國亡家、或善和眷屬因此紛爭、或久遠夫婦因此乖離、信之壞人根本、累人深重、奸妬欺昧、不可名言、是故佛說諸業易斷、此苦難除、苟能滅盡無不成道、大抵男女二根、初無分別、邪妄發生、互起愛染、結習牽纏、遂有思想驚夢之苦、蠹費破散之苦、寃結離間之苦、遭刑染疾之苦、直到天亡終未省悟、明知穢汙非清

淨因、如蛾投火自受燋然、如來明誨、若不斷淫欲、求聖道、無有是處、當知情愛爲災難之端、狐媚乃殺人之賊、起煩惱因、入地獄種、悞人損德、喪身失命、常於一切處泯絕男女相、究竟眞實、誰受欲事、當知革囊臭穢、敗壞總成白骨、念欲境界、復有何樂、雖在夢中、亦生怖畏、普願一切含靈具識、盡生厭捨、如冤家想、當遠離也、如大火聚、不可近也、如毒蛇來、當急避也、果能一發悔念、俾此纏縛自然消釋、變垢濁而獲法身、散婬火而爲智慧、互相敎化、同行淨道、證安樂行。

傳曰、盡信書則不如無書、此語均然、何也、儒家經史例有監本證據、語竟已定、吾門廣衆、鄙者常衆、識者常寡、故多以臆見改易、遂失先聖玄妙之旨、可不哀哉、如紹興間四明再開傳燈統要、乃雙溪庸僧思鑑幹緣、鑑者素無學識、誠謬故尊宿問答之言、甚多、此眞法門大罪人也、嗚呼此書乃本朝楊文公大年、奉詔爲吳僧道原校定、一旦見易於妄庸之手、可謂水潦鶴也、叢林負志之士、不可不知、當以橘州湖州之學二本爲正。

癡禪妙禪師婺州人、少在敎庠、已有打發、卽更衣遍見當代尊宿、久在石室光佛子會中、出世杭之靈石、遷中竺保寧、嗣石室、有石室眞贊、曰、我也不重儞禪、我也不重儞道、但重一雙手眼、別得儂家恰好、然禀性疎逸無檢、凡陞座小參、必先青原百家之事、隆興乾道間、其道盛行、與妙喜爭抗、有得法子無學忱已庵深、皆叢林白眉、更有哀可庵、小年住徑山、大慧禪師示寂、卽主其後事、時妙術亦居東堂、卒以法衣拄杖授之曰、三尺烏藤本現成、箇中毫髮不容情、佛魔俱搥殺、方顯金剛正眼睛、妙後入滅于嘉興之祥符、預定時日、親書遺偈、別時官道俗、儵然而往、有王梵志韈已脫、一任橫拖倒拽之句、眞得大自在也、

保安封七閩人、嗣月庵、幼年入衆、赫赫有聲、自首衆紫金、出世楊之建隆、遷常之保安山、乃赴大參周公之命、封與大參有夙緣、雖一時小刹、賓主相得、一居逾十五年、諸方大刹屢招不往、然封氣蓋諸方、開口卽貶剝、間不容私、淳熙末、乃坐脫、頌曰、五十七年幸自好、無端破戒作長老、如今掘地且活埋、既向人前和亂掃、又有滑稽語、譏後世後生不求淡素、惟務衣裝、今併記于此、曰、紡絲直裓毛段襖、打扮出來眞箇好、驀然問著祖師關、却似東村王太嫂、呵呵。

圓通永建上人號柏庭、久依密庵、一翁松源輩爲伍、後以鄉人老居蔣山、永充座元、擧以出世、住長竿天禧、與密庵在衆有隙、不令其承嗣、竟爲其薙髮師光晦庵拈香、未幾、遷信溪、遂卒、平日與無一居士侍郎王漑厚善、有唱酬語、謄行于世、但來處不分曉、兄弟亦少、有信之者、亦可爲後輩幾間破屋、不原所得者、爲深誡、故松源嘗有頌曰、林下相逢知幾年、好因緣是惡因緣、雖然不受靈山記、鼻孔依然著那邊、

常樂和山主、三衢人、久依密庵、見處穩實、不在松源曹源之下、有法華二十八品頌、行于世、其在青山時、密庵嘗以伽陀戲之曰、一拶當機伎倆窮、故鄉回首爛柯峰、人間天上誰知否、會見曹溪正脈通、然和一生辛苦、自知福尠、諸郡多以名山招之、俱不起、暮年與居士汪公父子、卜築於龜嶺之南、火種刀耕、恬然自樂、況味不減老龐丹霞、亦一代奇事也。

震山堂昇州人、初見丹霞淳、明洞上宗旨、有頌云、白雲深覆古寒巖、異艸靈華彩鳳銜、夜半天

明日當午、騎牛背上著靴衫、又抵大海、作插鍬井頌曰、盡道海山父子和、插鍬猶自帶干戈、至今一片明如鏡、時見無風匝匝波、後見艸堂於疎山、師資道合、因稟承焉、初居百丈、後住黃龍、其道大振、是爲龍峰四世也。

崇野堂四明人、久依天童宏智禪師、以大事不決、竟上江西、見艸堂、未幾、果有所得、後住育王、乃拈香爲艸堂之嗣、雪竇持以四句戲宏智曰、收得一宗、翠巖宗白頭也、失却一崇、面前合掌、背後搥胸、聞者莫不大咲、崇幼年多攻詩、嘗題廬山三峽橋曰、蕭蕭石徑蟠蒼松、山腰忽斷來悲風、坐寒欲作暮天雪、人靜似發山林鐘、落崖千古流寒玉、眩眼百丈飛長虹、倚欄深省十年夢、坐看雲吞五老峰、後安國按部見之、大加稱賞、遂徹去諸家詩牌、唯留此一篇、自玆雖道譽不甚四馳、唯有詩名流于世、後進當以崇爲戒、所謂齊己貫休名重地也。

龍丘法師慧仁、夜夢作偈曰、裩既破袴又迭、多少氷清玉潔、一條藜杖劃斷、天地更無殘闕、別別、不須擊胡蘆磬鐵、超然居士見之大喜曰、鵲有巢而鳩居之、良可咲也、雪堂曰、不然、從上尊宿多有自教乘中打發者、如百丈大珠洞上輩、皆是也、超然點首。

姑蘇有尼曰祖懃者、少依或庵、咨決大事、旦暮精勤、久而有省、有俗官伸紙討偈、懃書之曰、終日爲官不識官、終年多被吏人瞞、喝散吏人官自顯、掀翻北斗面南看、多處請出世、堅臥不赴、終于楓橋李氏庵。

雲堂舒和尚有垂誡文、傳布叢林、專警諸方主法者安存老病、不應揀擇、少年挂搭大傷風化、所謂枯樹老僧山門景致也、因記得、有一老僧抵吳門萬壽、時主者不肯挂搭、却云、儞老矣、何不小院裡去、若儞只是種一根樹、老僧對云、儞當初若時緣不偶、不出住院也、須到處種樹始得、主慙無以對、其僧乃書偈而去、曰、江湖幾度氣吞牛、年老方知總是愁、奉勸後生宜勉勵、看看種樹在前頭、時太守王公佐聞已下令諸山、挂搭僧人不得揀擇、所謂斷佛種子也。

金沙灘頭菩薩像、有畫作梵僧肩拄杖、挑髑髏、回顧馬郎婦勢、前後所贊甚多、唯四明道全號大同者、一贊最佳、其詞曰、等觀以慈、鈎牽以欲、以楔出楔、以毒攻毒、三十二應、普門具足、只此一機、奪千聖目、雲鬟霧鬢、輕紗薄縠、大地橫陳、虛空摩觸、靈骨鎖金、寒沙埋玉、驚鴻縹渺銀漢斜、缺月東西挂疎木、時余在丹丘見之、余嘗爲蛇畫足云、先以欲鈎牽、後令入佛智、有利與無利、元不離行市、黃金靈骨再挑來、試問汝今何面背、阿呵呵、囉囉哩、三箇之中那箇是、剔起眉毛塞耳觀、圓通門戶堂堂啓、吽吽、隱山璨和尚贊云、丰姿窈窕髻欹斜、賺盡郎君念法華、一把骨頭挑去後、不知明月落誰家、璨住泉之法石、木庵永之嗣也。

黃龍楊岐二宗、皆出於石霜慈明、初黃龍之道大振、子孫世之、皆班班不減馬大師之數、自眞淨四傳而至塗毒、楊岐再世而得老演、演居海會、乃得南堂三佛、以大其門戶、故今天下多楊岐之派、紹興末、塗毒既沒、而雙徑交代、乃育王佛照禪師、入院之初、首詣巖主塔頭置祭、有義銛書記者、爲其文、兄弟甚推其公、因筆錄于此、使後之學者知祖宗流派其有、自云、昔慈明老人得黃龍楊岐、猶一體之有左右手也、子孫派出各世、其家典牛不負泐潭、其敬妙喜猶敬師也、德光實嗣妙喜、惟巖主因稟典牛、雖平生出處不同、幸今日交承有在、道誼所

在存沒難忘要源委其來皆慈明屋裡人也若巖主平日道德超邁談辯軒豁鉗鎚學者有大手段江湖間特有定論茲不事多語以溷圓識謹差伊蒲率大衆詣寧堵一奠巖主其臨之。

曇橘州者川人乃別峯印和尚之法弟學問該博擅名天下本朝自覺範後獨推此人而已住蜀之無爲山遭橫逆來于江丞相史公尊其學業舉以住明之杖錫初入院時二相親送其後史公復造竹院以延之凡有質疑事必問故別峯自金山來雪竇諸山一疏乃曇撰之其詞曰住雪竇好住翠峯好老子當斷自胸中爲法來耶爲牀座耶此行殆出人意表無愧乎東山直下四世望之如西湖雪後諸峯但得心同道同出處同休問佛界魔界衆生界新乳峯禪師聲飛吳越價重岷峨住海門國逾一十有二年肆瀾繇口說八萬四千偈如山屹屹有陣堂堂與其據滄波而掩蛟龍未曷依蕙帳而友猿鶴載念伊蘭之世冀一現於優曇計其師子之家當盡接其種類歸來及早慰我同門此話江湖競傳之時自得暉交代然曇賦性坦率不事拘檢在竹院日復以酒事遭太守林侍郎追至出對與之曰酒曇過界住無爲而無所不爲蓋曇曾住無爲故也而曇卒不能對復爲林流過丹丘二年回寶奎一日沐浴更衣請史魏公叙平日行紀談咲中而化闔城士俗皆送之茶毘獲舍利無數。

唐虞世南通曆有問曰梁武夷凶剪暴克成帝業南面君臨五十餘載蓋有文武之道焉至于留心釋典桑門比行以萬乘之君爲匹夫之善熏修不保危亡已及豈其之所非耶何福謙之無効先生對云夫釋敎者出世之津梁絕塵之軌躅運於方寸之間超於有無之表塵累既盡攀緣已息然後入於解脫之門至於化俗之法則有布施持戒忍辱精進禪定智慧是爲六波羅密與夫仁義禮智信亦何異哉蓋以所修爲因所報爲果人修此六行皆多不全有一缺焉果亦隨減是以曬明醜於貌慧於心趙一高於才下於位羅褒福而無義愿憲貧而有道其不同也如斯懸絕興喪得失咸必由之下士庸夫見比干之剖心以爲忠直不必爲也聞偃王之亡國以爲仁義不足法也若然者盜跖高枕於東陵莊蹻懸車於西蜀老終厥命良足貴乎又問曰周武帝毀滅二敎是耶非耶先生曰非耶或曰請問其說先生曰釋氏之法則是空有無滯人我兼忘超出生死歸於寂滅此象外之談也老氏之義則谷神不死玄牝長存長生久視騰雲駕鶴此區中之敎也至於止惡尙仁勝殘去殺並有益於王化無乖於俗典今以常僧犯律道士遺經便謂其敎可棄其言可絕何異責檮杌而廢堯怨有苗而黜禹見瓠子泛濫遠塞河源覩崑嶽方偶遽投金燧曾而不知潤下之德有利已深變腥之用其功甚博井蛙觀海跼於所見輪囷長夜之迷自貽沈溺之苦疑悞後學良可痛哉。

雲居如號雲中受經於台之護國在雲屋最久上堂云山下熱如火山間凉似秋得居山上者知是幾生修卓拄杖云急著眼腦。

佛印示衆云莫挂袈裟便要閑七條中有鐵圍山幾多放逸縱橫者失却人身瞬息間。

前輩贊佛祖偈句幷自贊語各有矜式今之例多杜撰如自贊亦如贊佛祖之語良可咲耶唯密庵最得其體贊云在家不讀書行脚不參禪隨流閑打閧掘地覔青天如今老矣空追悔捻人痛處力加鞭塗毒亦云眼瞎耳恒聾鼯鼠技已窮要見巖中主白雲千萬重咄具眼者

宜辨之。

佛心才示衆云、三千劍客獨許莊周、百萬鳳毛點也自肯、若也兩頭坐斷、中間不留、只是打淨潔毬子、未知向上一竅、若也隨波逐浪、帶水拖泥、孤負己靈、未具頂門正眼、總不恁麼、又作麼生、不入驚人浪、難逢稱意魚、又云、寶劍不失、虛舟不刻、朝游羅浮、暮歸檀特、若謂本光之地理合如斯、正是坐井觀天、持蠡酌海、若謂言發非聲色前非物、非唯迷宗、亦乃失旨、宗明旨的、又作麼生、密把鴛鴦閣綉出、從他人自覓金針。

長蘆祖照禪師道和莆陽人、初負篋至京、有中貴見之姿質不凡、以度牒與之、和不受、自謂同學曰、吾大丈夫、豈可出他黃門之下、苟一旦受其恩、則終身被其攔絆、吾佛幸有廣大法門、又國家開發人之路、吾當自勉勵、因銳志誦法華經、當年於試經得度、爲大僧、徧見諸方、後住長蘆、座下常滿千衆、眞歇了自丹霞會下來、時年尚幼、和見其敏利、令首衆、後退院與之、意其承嗣、及拈衣乃云、得法丹霞室、傳衣祖照庭、恩深轉無語、懷抱自分明、和不樂、下座抵奪其衣、了自此終身不搭法衣、竟嗣丹霞淳、江湖有識者、皆雅其不忘本也。

或庵示衆云、紹興初山野色力强壯、所至撥艸瞻風、見善知識懸囊挂盞、擊節扣關、莫不忘飡廢寢、寅夜不輟、又得偉人哲匠朝暮不倦、苦口點化錐箭、尙收拾舊貨、不得上手、況當今之際、在處叢林據位禪師者、但占名字陞堂入室、聊表不空、師家見學者、學者見師家、邪正不分、互相混淆、更說甚麼一言半句、超脫常情、到大不疑安樂田地、拈斷貫索、穿天下人鼻孔、大道相將滅也、間有負笈擔簦、寄人烟焰之下、多是求飽暖溫和、游泳外典、圖資談柄而已、正宗下事杜口不講、加之尸席望刹、有福緣趁陪上位、結識貴人、以爲外護、得其自便之計、遂致習以成風、遞相倣傚、鮮有知非者、衆中本色黃面老衲、雖證道果、密追古風、退步潛藏、守分不能、親近權貴、無力救弊、冷處危坐、袖手想見、點頭咨嗟、其荒寒薄伎紛紜耳、願得具眼正因有力量上人、努力猛省、圖遠不圖近、於己躬下、了辨西來不傳之妙、施設凡聖不測之機、異日他時、爲後輩作、則免有鈴塼道路千里之嘆耶、明眼人前吐露胸臆、亦望痛念祖道下衰、踊躍高舉六合之外、貴得英衲子、光明於世、千古萬古之下、金剛王寶劍、凜凜不墜矣。

東坡到京口、佛印渡江、謁見、坡云、趙州昔日不下禪牀、金山因甚今日渡江、佛印以頌答曰、趙州昔日缺謙光、不下禪牀接二王、爭似金山無量相、大千沙界是禪牀。

曾文清公贛州人、乃寶文侍郎天游之弟、於宗門甚進步、與心聞賁禪師爲方外友、嘗有世尊拈華一頌、江湖多賞之、頌曰、華枝拈起大家看、迦葉無端却破顏、從此春光都漏泄、桃紅李白滿人間、又贊心聞像曰、是心聞叟、寂然無聲、非心聞叟、儼然其形、視之非無、聽之非有、能如是觀、非心聞叟。

婺州靈應法淨講主、因被晚學攙其院事、告於葉丞相、以求借援、葉回書云、專使辱書、懃懃、知公與余先世之契、同里巷桑梓、詢之同袍、知公是本分講人、住靈應四十年、變瓦礫之場爲輪奐、使魚鼓之聲歲晚不絕、可謂肯與供養於寺庭、出臂力寶殿崇成之際、乃爲破戒後學、起貪癡心、巧計攘奪、怪公不得使終圓勝事、若以世情論來、鵲有巢而鳩居之、誠難堪處、若

以公分上觀之、身非我有、萬法皆如夢幻、則靈應道場亦豈是公久居活計、所以古人道、住則孤鶴冷翹松頂、去則片雲忽過人間、去住灑然、何有拘礙、要當住、而未嘗不住、方知是去住底人、又況一飲一啄皆自前定、或行或止、豈是人爲、毋有意必同異、若如此境界不能洞然明白、則末後一著、未免拖泥帶水、此去便好青松下明窓內、安坐不動了自家大事因緣、誠爲得計、若欲借一言於五馬、有挾山超海之難、能悟萬法皆空、於公有變凡成聖之易、其或未然、快請腰包急去、防他新婦底。

混源密台人、嗣龜山光狀元、俗素貧、然守分不自張大、自浮山遷大舍、道由俗舍、將見其弟昆、戒約人從、勿過其家、唯帶親隨一二人而已、又曰、若見我兄、切勿聲諾、恐驚他村人也、其顧分如此、有頌曰、托迹來蓬屋、三椽種不深、如何微賤質、也解震雷音、種粟不生豆、拈鉛却是金、只因誤失脚、終不落沈吟、叢林皆服其識度高遠、與夫詐稱張王李趙豈可同日而語哉。

故監部甄公龍文、爲龍翔疏、請密公曰、十三人透洋嶼之關、先爲上首、二千里趂黃梅之盞、密在汝邊、可謂正法、克膺公選、某人脚跟峭措、眼腦玲瓏、起紫籜說洪福之禪、諸方山仰、過石橋持七閩之盞、萬衲雲隨、唯六龍曾御於中州、故二淛獨誇於勝刹、次當補處、宜莫放公、孤嶼而住兩峰、話頭在在、一句而涵三要、衆目團團、後被旨住西湖淨慈。

紹興間、象田梵卿禪師秀之華亭錢氏子、初參圓通秀投子青、次見昭覺總、有契、上堂云、春已寒落華紛紛下紅雨、南北行人歸不歸、千林萬林鳴杜宇、我無家兮何處歸、十方刹土奚相依、老夫有箇眞消息、昨夜三更月在池。

慈恩法師唐尉遲將軍之子也、始年十歲能造戰策、父賢之、玄奘以計欲其出家以大教乘、密竊其所造戰策、教小行者諷之、携訪遲、遲極口稱賞其子善能作文、奘請一看、而乃曰、此文者小行童亦能誦之、遲驚呼來誦之、果不差一字、遲大怒、此子以古文謔戲、卽欲誅之、奘師告云、佛有救護衆生之說、若君不救、吾非佛弟子矣、可捨出家、何如遲從、用是奘師得之卽爲大僧、衆莫能及、常對御講論、賜以玉環、見天子更不致禮、但入出有經論酒食婦女之三車、隨行、宣公服而疑之、法師亦薄其小乘、而疑其神供之說、一日訪宣、特求天供、語論終日、而不見其供、法師歸後初至、宣公責之、非時而到何也、神告曰、非懈怠也、今日師與大乘菩薩議論、毫光罩定徧界、竟無路得入、從此更傾心敬之、故知大乘所非小根之能測底也。

遯庵演閩人、初見元枯木、後參妙喜於徑山、與最庵印同庵璉、袁集大慧廣錄三十卷、盛行于世、慧既沒、演不復出遊、一衲寒暑、居經三十年、數董板首、閩帥趙汝愚、待以福之秀峰、堅臥不起、別峰作疏勸請、有幽蘭林下豈無人而不芳、至寶道中蓋具眼而始識之句、一時罔不高其節、暮年竟被塗毒推出於常之華嚴、一坐十九年、法席盛興於三吳、其乃緣法有地耳

最庵印川人、初依寂室、後參大慧、出世京口鶴林、自贊云、克體委羸、當行嚫苴、袖手儼然、可知禮也、美惡猶來不自裁、參方分付俯觀也。

滎陽郡王初居嘉禾、官職未登、家居零落、時誰庵粹禪師住報恩、與王交遊、凡有所疑、靡不應對、及孝宗卽位、王累開大藩、以諸方名刹多命粹主之、晚請何山爲功德寺、亦命粹主之、特賜紫服圜悟禪師、其子孫亦爲大法金湯、謂是互乘大願力來者也。

叢林盛事卷下終

予昔首衆於五峰、時古月融禪師實典賓職、既叨同事、日數從遊、爲山間水邊之樂、續以業緣來居青山、逾十年矣、一日翩然過我、坐間娓娓談前言往行、頗清老懷、徐出叢林盛事一篇、皆命世宗師與賢士大夫、酬酢更唱之語、誠可以警後學而補宗教、大率與先師武庫相類、殆將鋟梓以惠後世、其利豈不博哉、因援筆以題于後。

慶元己未　　華藏遯庵宗演跋

國譯興禪記

解題

興禪記一卷は、鎌倉淨智寺の僧無象靜照禪師の撰述に係る。本書の著はされたる動機は、文永の頃、江州延曆寺の衆徒が、當時、禪宗の興隆を憎み、之を破却せんと欲し、狀を朝廷に奉りて禪宗を誹謗したることありき。時に靜照之を聞いて大いに歎じ、我が宗の絶滅せんとするを慨き、書一篇を草して正宗の眞價を宣布發揮し、以て山徒の壓迫に抗して禪門のために萬丈の氣を吐きたるもの即ち本書是れなり。蓋し本書は一小册子に過ぎずと雖も、禪三宗の竺華的々相承して、西天二十八祖より東土の二三（六祖）に至り、六祖より靑原と南嶽とに分れ、十傳して五家（臨濟・曹洞・雲門・潙仰・法眼）となり、應機酬對して各々家風を建立せし次第を述べ、以て禪の決して虛妄の敎に非ずして、佛の所傳、釋迦所承の血脈たる所以を論じ、之を證するに先哲の所論及び諸經論の所說を以てし、而も架空の論に非ずして、一々其の確乎たる典據を明かにせり。是を以て本書は、當時に於ける禪門宗論中の白眉と稱せらるゝ所以なり。

著者靜照の傳を案ずるに、師、姓は平氏、無象と號す。相州鎌倉の人、文曆元年（皇紀一八九四）を

以て生る。幼にして出家し、京の東福寺に入りて聖一國師に侍し、博く內外の典籍を學ぶ。尋いで四方に游び、諸師に就いて習研倦むことなし。適々宋に大善知識ありと聞き、建長四年、年十九にして支那に航し、徑山に上りて住持石溪心月に參ず。石溪、「趙州放下著」の話を究めしむ。一日、室に入り見解を呈するに方り、溪に一掌せられて當下に大悟し、因つて法を石溪に嗣ぐ。服勤すること五年、大休正念、無學祖元等と首を聚めて酬唱す。此の時、北條時賴の書至る。宋の寶祐四年三月、徑山を辭す、石溪、送行の偈あり、佛光國師も亦無象の號頌を記して贈る。景定元年（我が文應元年）錫を育王山に掛けて知賓の職を司る。同じく三年秋、天台の石橋に躋りて茶湯を五百羅漢に供じて、靈洞に梵鐘を聞くことを感ず。依つて偈二篇を作る。一時の名衲琪横川、度虛舟等四十二人、韻を採つて之に和す。五年の秋、洞庭に遊び、偈を作つて曰く、

雁落洞庭蘆岸秋。　楚天雲淡畫圖幽。
孤舟遊泳波心月。　七十二峰一目收。

宋の咸淳元年（我が文永二年）虛堂和尙に天童、慈淨の間に隨つて益々琢磨す。又偈あり、曰く、

十載從レ師幾話拳。　到頭一法不二曾傳一。
有無句蕩二家私一盡。　萬里空歸東海舡。

此の年、歸朝の途に就く。宋に在ること十四年、獲る所甚だ多かりき。靜照、曾て育王に在りし時、朝廷より臨時の禳災祈禱の命あり、疏語を調へて行者に付す。宋人、靜照の機鋒を試みんと欲し、白紙を卷いて可漏（疏語を入るゝ紙袋）に入る。歎辭畢つて、疏を開いて之を見れば白紙あるのみ。靜照、本疏の如く之を暗誦す。官人あり、潛かに彼の疏本に對して之を見るに、一字も差ふことなし。卽ち疏を擎げて座に入り、之を賀せしといふ。因つて諸大老の賀頌あり。

時に日本の僧圓海なるものあり、之を聞いて誓つて云はく「我れ歸朝の日、寺を建てゝ師に歸し奉らん」と。果して靜照と船を同じくして歸朝し、圓海は京に留り、靜照は鎌倉に歸る。因つて鎌倉の常磐に一寺を建てゝ居り、之を龍華山眞際精舍といふ。今の淨智寺是れなり。又翌年、圓海、京に於て六孫王遺廟の地を買ひ、平安山佛心寺を創建し、靜照を請じて開山第一世たらしむ。師は嗣香を石溪和尙に供ず。又佐野氏、寶林寺を丹波に創め、靜照を聘して開山始祖となす。文永九年、相州に歸り、鎌倉胡桃谷の法源寺に住す。此の頃、建長寺の開山道隆蘭溪、跡を甲州に寄せ、或は奧州の松島に行く、靜照又之に隨ふ。偶々常州の太守吉原入道善行なる人、興禪寺を建てゝ以て靜照を請じて之に居らしむ。建治三年十月、衆請に應じて博多の聖福寺を董し、居ること二年にして相模の大慶寺に遷る。到る處、僧俗の景附する所となる。弘安五年、佛光國師の鎌倉に圓覺寺を開くや、靜照を屈して分座となし、衆のために說法せしむ。正安二年、執權北條貞時の請によつて復た淨智寺に入る、歸崇日々に熾んなり。德治元年五月十五日、諸徒を集め、喪儀を條劃し、遺偈を書して曰く、

諸佛來也如是。　諸佛去也如是。
諸佛來去一般。　今我說也如是。

と。端坐して化す。世壽七十三、法臘五十五、勅して法海禪師と謚す。著書は本書の外、四會の語錄『無象錄』二卷あり。

國譯興禪記

㊀沙門㊁靜照述

佛祖の正法、㊃華竺に流る、的々として相承し、綿々として斷えず。㊂傳燈に曰へるが如きんば、㊄如來まさに化しなんとして、預め㊅摩訶迦葉に命じて曰く、「吾れ清淨の法眼、涅槃の妙心、實相無相、微妙の正法を以て、今汝に付す、汝まさに護持すべし。」幷に㊆阿難に勅して、「其れを貳けて傳化す、斷絕せしむることなからしむ」と。㊇廣燈に曰く、「大迦葉阿難に謂つて曰く、㊈婆迦婆未だ㊉圓寂せざる時、多子塔の前にして、正法眼藏を以て我れに密付す、我れ

㊀沙門は梵語、譯して勤息と云ふ、善を勤め、惡を息むるの義なり。
㊁靜照、相模の人、無象と號す、幼にして出家、東福寺聖一國師に師事し、後ち宋に入りて、臨濟下の石溪心月禪師に參じて印可を受く、亦虛堂和尙に請益す、咸淳元年歸朝して、鎌倉淨智寺等に住す、勅して法海禪師と謚す。
㊂華は中華卽ち支那、竺は天竺卽ち今の印度なり。
㊃景德傳燈錄、僧道源の纂。
㊄如來、佛十號の一、眞如より來生するが故に如來と云ふ。
㊅摩訶迦葉、佛十大弟子の隨一、佛の衣鉢を嗣ぎて西天の初祖たり。
㊆阿難、佛十大弟子の一、佛弟子中聰明第一と稱せらる。
㊇廣燈、五燈の中の一也。
㊈婆迦婆は梵語、世尊と譯す、佛十號の一。
㊉圓寂とは梵語、涅槃の譯語なり、涅槃は種々の義を包含す、今は佛の滅度を指す。
㊊涅槃、大般涅槃經。

今汝に傳付す。」と、是の二の者を原ぬれば、蓋し㊫涅槃及び㊬阿含等の經に述す。爾後祖々授受す。凡そ㊭西天二十八傳して、㊮菩提達磨に至る。達磨より㊯震旦に來り、五傳して㊰曹溪に至る。曹溪より一傳して、㊱覺樹條を分ち、惠燈焰を列ぬ。水を器に傳ふるが如くにして、佛の惠命を續ぐ。是を㊲青原となし、是を南嶽となす。十傳せずして分れて五宗となる、各家風を擅にす。是れを㊳臨濟と曰ひ、是れを㊴曹洞と曰ひ、是れを㊵雲門と曰ひ、是れを㊶潙仰と曰ひ、是れを㊷法眼と曰ふ。應機酬對、建立同じからずと雖も、會歸すれば則ち一なり。箭鋒相拄へ、鞭影齊しく施し、攝物利生啓悟多からしむ。其の竺土の佛祖密傳の奥旨化行の機緣、粲然として備に㊸傳廣續等の諸錄に載せたり。重ねて記するに遑あらず。達磨の兒孫相傳の禪とは、如

㊬阿含、四阿含經。
㊭西天二十八傳、釋尊より迦葉・阿難乃至馬鳴、龍樹等を經て般若多羅より達磨大師に至る、天竺に於ける禪の相承二十八代に及ぶ。
㊮菩提達磨、支那禪宗の初祖、南天竺、香至王の第三子、出家して般若多羅に嗣法す。梁の普通元年支那に來り、武帝に謁す、嵩山の少林寺に入りて面壁九年す、二祖神光を得て衣鉢を授け、大通二年十月五日示寂、後ち唐の代宗、圓覺大師と謚す。
㊯震旦は支那。
㊰曹溪は惠能大鑑禪師、支那南海新興の人、五祖弘忍大滿禪師に參じて其衣鉢を受く、六祖大師と稱す。曹溪は師が住院の地名なり。
㊱覺樹條を分ち云々、六祖の下法脈二派に分るゝを云ふ。
㊲青原行思禪師、南嶽懷讓禪師共に六祖に嗣法す、青原の下より後に曹洞宗起り、南嶽下より次で臨濟宗を出す。
㊳臨濟宗、南嶽下、臨濟惠照禪師より起る。
㊴曹洞宗、青原下、洞山良价禪師より起る。
㊵雲門宗、青原下、雲門文偃禪師より起る。
㊶潙仰宗、南嶽下、潙山靈祐禪師より起る。
㊷法眼宗、青原下、清涼文益禪師より起る。臨濟以下法眼に至る、是れを五宗或は五家といふ、支那禪宗の分派なり。
㊸傳、廣、續、是等は五燈の各名なり。

來秘密微妙の禪なり。傳燈に曰く、㊹「是れ諸佛萬德の源なり、故に佛性と名く。亦㊺是れ衆生迷悟の源なり、故に如來藏識と名く。亦㊻是れ菩薩萬行の源なり、故に心地と名く。之れを悟るを惠と名け、之れを修するを定と名く。定惠通ずるを名けて禪となす。」と、凡そ禪定の一行能く性上の㊼無漏の智惠を發起す。一切の萬行萬德、皆定より發す。故に㊽聖道を求めんと欲せば、必ず須らく禪を修すべし。然も禪に多種あり、謂く異計を帶びて、上を欣ひ下を厭ふて修する者は、㊾外道の禪なり。正に因果を信じ、亦㊿欣厭を以て修する者は、是れ凡夫の禪なり。(1)我空を悟つて、(2)見處偏眞にして修する者は、是れ(3)小乘の禪なり。(4)人法二つながら空じて眞理を所顯して修するものは、(5)大乘の禪なり。若し頓に自心本來清淨にして元より(6)煩惱なく、無漏の智性本より具足し、此の心卽ち佛なりと云ふことを悟れば、靈明湛寂にして廣大融通す。畢竟して異なし。無異無住、無修無證なり。塵の染むべきなく、垢の磨すべきなくして、一切法門の宗源たる者は、是れ最上乘の禪なり。亦如來清淨禪と名く。亦一行秘密王(7)三昧と名く。亦眞如三昧と名く。此は是れ一切三昧の根本なり。

㊹涅槃經等に出づ。
㊺楞迦經に出づ。
㊻梵網經に出づ。
㊼無漏、煩惱妄想を離脫せるを云ふ。
㊽聖道は佛道なり。
㊾外道、印度に於て佛敎以外の諸敎を指して云へるもの、九十六種の外道などと云ふ。
㊿欣厭、淨土を欣び穢土を厭ふ。
(1)我空、我は常一主宰の義、斯かるものなしと悟るを我空と云ふ、又人空とも云ふ。
(2)見處偏眞、我空のみを悟りて法空の理を知らず、故に偏と云ふ。
(3)小乘、佛敎中の初門、乘は運載の義なり、小人の所乘にして、小苦を滅し、小利益を與ふるが故に云ふ。
(4)人法二空、人空は前に出づ、法空とは一切萬法は假有にし

此の三昧の根本を證しつれば、何れの法門としてか開けざらん、何れの三昧としてか現ぜざらん。㋓風柯月渚、並に心を傳ふべし、煙島雲林、咸く妙旨を提ぐ。念々㋖威音の前に超え、歩々㋗毘盧の頂を蹈む。達磨の門下、展轉して相承するもの是れなり。㋘圭峯の云く、「諸家の高僧の解する所の教義、最も圓明なりと雖も、然も趣入の門戸を立てゝ次第の階差を分つ、只是れ前に擧する所の、諸禪の行相なり。唯達磨の所傳は、頓に佛體に同じ、迥かに諸門に異なり」と。故に㋙維楊の法愼大律師云く、「教乘の極談は、一切の經義を包ぬ。㋚東山の法門は是れ一切の佛乘なり。色空兩なから忘じ、定惠雙べ照す、得て稱すべからず。所以に文字を立せず、直に心源を指す。階梯を踐まず、徑に聖域に登ること、此の宗に過ぎたるはなし。」斯れ乃ち佛祖冲密の幽旨、群生靈覺の本源なり。相に卽して觀ること なければ、空々として其の眞際を測ること能はず。慮に卽して知を絶すれば、玄々として其の指歸を窮むること能はず。永く證知を脫し、全く言象を超えたり。靈明恢廓にして、虛凝淡佇なり。淸宵際を絶して、明月孤圓なり。神輝潛に映じて滅せず、萬相俱に應じて生せず、顯れて既に有にて、其體空無なりと悟るを云ふ。

㋐大乘、小乘に對して云ふ、大苦を滅し、大利益を得、自利利他共に成ずる大なる法門を云ふ。

南方佛教は小乘教に屬し、日本佛教は大抵大乘教に屬す。

㋛煩惱、又惑とも云ふ、心身を惱亂する精神作用なり、百八煩惱、八萬四千の煩惱などと云ふ。

㋜三昧、心を一境に安住せしめて動ぜざるを云ふ。

㋓風柯月渚―煙島雲林云云、眼見耳聞悉く妙法ならざるなきを云ふ。蘇東坡曰く、「山色淸淨身、溪聲廣長舌」と、此謂なり。

㋖威音、法華經常不輕品に曰く、無量無邊、不可思議阿僧祇劫の昔、佛あり、威音王と名く云々と。

あらず、隱れて豈無とせんや。寂にして動じ、動にして寂なり、天眞の自性、本より淨くして明妙なり、出沒方なく、應化礙無し。㋝少林の花五葉に開け、㋞曹溪の燈十方に分れしより以降、蓋し格高く調古り、言峻しく理幽なるを以て、等閑に一機を垂れ、一境を示す。盡く是れ人のために、㋟釘を拍き楔を拔きて、泥水を離却して、人の眼目を活す。眞に㋠博地を して、頓に全心是佛なりと悟らしむ。果位を經ずして、㋡三身四智本來具足す。是れ聖、是れ凡、圓かに一體となる。厥後、子孫直指單傳殺活自在、一模に脫出す。皆其れ英徽の士、奇傑の流なり、之れを法藏に列すること、日の天に經たるが如し。此の宗に依つて道を得るもの、古より今に至るまで周知を以て悉に數ふべからず。其の法雨、天上人間に灑いで廣く、㋢諸有を霑し、其の道風、他方此土に扇いで普く群惑を濟ふ。善盡し美盡すの法要、比無く儔無きの正宗と謂ふべし。蓋し㋣大雄付囑の旨、正眼流通の道、教外に別行して、不可思議なるものなり。不立文字教外別傳とは、世尊㋤青蓮の目を以て、㋥飲光を顧視す、飲光但一たび微笑するのみなり。達磨、門弟子に命じて、各其の所得を言はしむ、㋦二祖唯禮三拜す。

㋣毘盧、毘盧遮那佛。

㋤圭峰、宗密禪師、禪を道圓に參得し、華嚴を淸涼に學ぶ、著書多く世に重んぜらる。

㋥維楊の法愼大律師、律宗、唐明州の人、鑑眞に從ひて來朝す、大和に佛國寺を建つ、戒律及び天台の教義に通じ、又儒書に通ず。

㋦東山の法門、禪宗を云ふ。

㋧少林は達磨大師面壁九年の舊跡、禪の五家に分れて世に盛んなるを云ふ。

㋨曹溪の燈、曹溪は六祖大師を云ふ、其法孫十方に化を擧ぐ。

㋩釘を拍き楔を拔くとは、羅縛を解くの意なり。

㋪博地、下賤の凡夫を云ふ。

㋫三身、佛身に三種の別あり、曰く法身、報身、應身。

四智は大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智を云ふ、大悟の境に入りて得る智慧な

其の旨、文字義說を以て宣示すべからず。㋐正宗記に云く、「達磨、佛の所傳を承けしより、今に至るまで絶えざるものは、蓋し謂みるに、此の法秘密にして、言なく示なければ信じ難く到り難し。唯是れ己證の者、乃ち其の所以を知つて、究竟とするを以ての故なり。若し其れ究竟の理とは、則ち佛の境界なり。秘密微妙にして、文字言義の至るべきにあらず、必ず密傳妙證して、以て至るべきなり。直に心を以て證す、豈經敎、語言、文字の間にあらんや。」㋑馬鳴曰く、「離念の境界なり、唯證して相應するが故に。」㋒龍樹の曰く、「說くべからざるものは是れ實義、說くべきものは皆是れ名字」と。斯の二祖師、其の心に證するの親密を尊びて、以て其の迹に循つて情解することを別ふ。離念とは圓明の覺了、虛明にして自照するのみ。㋓清涼國師澄觀大法師の曰く、「果海、念を離れて心傳す。」㋔圭峯乃ち之れを釋して曰く、「此れ卽ち達磨心を以て心を傳ふる不立文字の意なり。」大聖人果して其の正宗、默證微密なるを以て後世に遺す。其れがために正印を標して驗なるもの、固に亦已に吾が佛の當時に見たり。㋕摩竭に室を掩ひ、㋖毘耶に詞を杜づ。若し有ることを知るものは、默して其の趣向を知り。

㋐諸有、三界二十五有の迷界を云ふ。
㋑大雄、佛を云ふ。
㋒青蓮の目、眼の氣高く淸さを形容す、青蓮華は天竺にあり、其葉の形長く、青白の色則かにして大人の目に似たりと。
㋓欽光は摩訶迦葉。
㋔二祖は神光慧可大師なり、祖達磨の骨髓を得て、其衣鉢を受けて東土禪宗の第二祖たり。
㋕正宗記、契嵩の著、傳法正宗記。
㋖馬鳴、西印度の人、初め外道に歸して盛んに佛法を破す、後ち富那夜奢尊者に論破せられて佛敎に歸し、大に大乘佛敎を鼓吹す。大乘起信論、大莊嚴論經、佛所行讚經等の著あり、釋尊より第十二代の祖師たり。

る、學者亦尊んで之れを信ずるものなり。㋗智度論に曰く、「禪最も大いなること王言の如し。」禪は則ち一切皆攝す。佛菩薩の諸〳〵の三昧及び佛の得道捨壽、是くの如き等の種々の勝妙の功德、皆禪の中にあり、此の義を謂つて解脫禪と曰ふ。三昧をば皆名けて定となす、定を名けて心となす。其の所謂心とは、乃ち諸〳〵の禪祖の傳ふる所の者なり。正宗記に云く、「吾が佛、正法の要を以て、大敎の宗となす、密傳受を以て、一大敎の祖となす。其の宗は乃ち聖賢の道源、天地生靈の妙本なり。其の祖は乃ち萬世戒定惠を學する者の大範㋘十二部說の眞驗なり。是を以て龍樹祖師、禪門を名けて宗門となす。」卽ち謂く、「吾が宗門は乃ち釋迦文、一佛敎の大宗の正趣なり。」所謂の意義は、皆㋙大藏の間に見えたり。且㋚廬山の遠公の統序と、㋛禪經・智度論・涅槃經・四者の說とを以て、其の奧旨を詳かにす。夫れ㋜三業の興り、禪智を以て宗となす、經に曰く、「道は禪智より㋝泥洹に近し」と。豈禪は敎律論の三學の者の宗とする所たりと謂ふにあらずや。㋞八萬四千の法門、此の密傳極證を以て、眞要とせずと云ふことなし。所以に道く、三世の諸佛の所證、蓋し此れを證す。如來一大事のために出現する、

㋗龍樹、印度の人、釋尊より傳法第十四代の祖師、大智度論百卷、其他多くの著あり、八宗の祖師と崇めらる。
㋘淸涼國師澄觀大法師、華嚴宗の第六祖、又五台無名に逢じて禪旨を得、著書多し。
㋙圭峰、前に出づ。
㋚摩竭に室を掩ふ、摩竭は摩竭陀國にして世尊の多く說法せられたる地なり、或時說法を止めて一室に閉ぢ籠り默座せらる。
㋖毘耶に詞を杜づ、毘耶離は維摩詰居住の地なり、文殊大士、維摩に菩薩の入不二法門を問ふ、居士默然として言無し、文殊歎じて曰く、文字語言なき、眞に是れ菩薩の入不二法門なりと。
掩室、杜詞共に妙法の不可說を示すなり。
㋜智度論、龍樹の著、大智度論。

蓋し此れが爲なり。一切衆生妙圓覺の心、本より生滅なく、圓かにして㋙大虛に同じ、㋚淨瑠璃の内に寶月を含むが如く、大明鏡の萬珠を照了して、光體無二なるが如く、㋛大摩尼の五色に映じて、方に隨つて各現ずるが如し。百千燈の光の一室を照して、其の光圓滿、壞なく雜なきが如くなるば、此の宗旨なり。道ふことを見ずや、此の門に歸せざるものは、言を執し旨に滯つて、名を守り實を失ふ。葉を攀ぢ根を亡じ、寶を棄て薪を負ふことは、謬の甚しきなり。智度論に曰ふ、㋟「般若波羅蜜秘密の法は、其の旨亦驗なること禪の中にあり。」涅槃經に曰く、「我れ今の所有の無上の正法は、悉く以て摩訶迦葉に付囑す、此の迦葉能く汝等がために大依止とならん」と。此れを校ふれば則ち大聖人の遺意、豈果して妙密清淨の禪を以て、其の敎の大宗とするにあらざらんや。故に先德、吾が禪門を命けて之れを宗と謂つて、敎外の親證を尊ぶ。佛心宗と曰ひ、亦は諸佛頂上の宗と名く。然も此の禪要、既に是れ吾が一佛敎の宗なれば、則ち其の法要を傳ふるものは㋠三十三祖なり。大迦葉より阿難、暨び龍樹、達磨相繼いで曹溪に至る、乃ち皆一釋敎の祖なり。淺識のもの妄りに達磨、曹溪を分つ

㋖十二部說、佛の說法の體裁に十二種あるを云ふ、十二部經又は十二分經とも云ふ、即ち一切の佛經を指す。
長行說、重頌說、授記說、孤起說、無問自說、因緣說、譬喩說、本事說、本生說、方廣說、未曾有說、論議說是れなり。
㋗大藏、一切經を云ふ。
㋘廬山の遠公、惠遠と稱す、東晉の代、廬山に白蓮社を結びて其徒一百二十三人と共に念佛を修す、後世之を支那淨土敎の第一傳とす。
㋙禪經、達磨多羅禪經。
㋚三業、身、口、意の三所に於て起す吾人の所作を云ふ、身業、口業、意業。
㋛泥洹、涅槃に同じく梵語の音譯なり。寂滅、圓寂などと譯す、迷妄を脫して眞如に歸するを云ふ。
㋜八萬四千の法門、衆生の煩惱

て獨り禪門の祖とすること、亦甚だ謬ならざらんや。今時の學者、各師習を私にし、其の所學に黨して、法要の元祖を顧みず、審かに其の大宗の正趣を求めず、反つて宗門の單傳心印のものを忽にし、吾が宗の勝れたるにはしかずと謂ふ。是れ唯だ佛意に違ひ叛くのみにあらず、亦乃ち自ら其の道本を昧ます、實に悲傷しつべし。若し具眼の禪者の示す所は、語默動靜、展縮殺活、機を以て機を奪ひ、用を以て用を破る。羅籠を出で、言滯を掃ひ、金剛王劍を操り、獅子の全威を奮ふ。一機一境、一棒一喝、轉轆々、峭巍々、酒器を持り圓相を示し、赤幡を執り、明鑑を擎ぐ、皆先佛の妙用、迅捷の風規なり。正眼を具せざれば、輙く此の妙用を見るべからず。聖意獨り遺屬して、吾が密傳の宗、乃ち發明することを得たり。何を以てか此くの如くなる、其の相宜しきを以ての故なり。然らずんば奚んぞ達磨祖師より已來、其の風大いに天下に振ふものならんや。達磨とは觀音の㋡應化、大法の正主なり。直に本心是れ佛なりと云ふことを示す、豈亦信せざらんや。若し夫れ㋢修多羅の敎は、乃ち大聖人の㋣權巧、機に應じて迹を垂る、而して張本なり。且く世の名字言說を假つて、理を發して以て人の悟證を待つ。文字言敎は、是れ依憑の處にあ

㋠三十三祖、釋尊、大迦葉より達磨其他の諸祖を經て曹溪に至る禪の傳法相承三十三代に及ぶ。
㋡應化とは佛菩薩の衆生の機緣に應じて、世に化現し之を濟度するを云ふ。
㋢修多羅は梵語、契經と譯す、一切の佛經を云ふ。
㋣權巧は方便なり。

らず、唯言外に契證せんことを要す。然も理妙にして敎ふる所なし、說き及ぼして語ると雖も、終に其の所謂を極むること能はず。敎外別傳と云ふは、果して佛敎に別なるにあらず、正に其の敎迹の到らざる所のものなり。㋐大論に曰く、「言、言ひ及ぼすに似たれども、而も其の旨幽邃なり。之を尋ぬること深しと雖も、而も之を失すること逾遠し」と、其れ此の謂なり。㋑楞伽經の序に云く、「學佛の弊、經文に溺れ、句義に惑ふて、而して人、玄を體せざるに至つて、則ち禪を言つて以て之を救ふ」と。其の理窮まれば則ち能く變ず、變ずれば則ち能く通ず、其の變通を善くするもの、其れ始めて吾が正宗を發す。隋の㋒智者大師の曰く、「佛法の至理、言を以て宣ぶべからず。」豈言方、語本、十二部に存せんや。智度論を按ずるに、曰く、「諸佛は㋓法愛を斷じて、經書を立せず、亦語言を莊嚴せず」と。此くの如くならば則ち佛祖の其の意、何ぞ嘗て敎に在らんや。又經に曰く、「修多羅の敎は、月を摽す指の如し、若し復た月を見つれば、摽す所畢竟して月にあらざることを了知す」と。是れ豈人をして其の敎迹を執せしめんや。禪門に證入しつれば、則ち一切敎門の月を摽す指の如くなることを知る。所以に㋔經に曰く、「始め㋕鹿野苑より、終り㋖跋提河に至るまで、中

㋐大論は龍樹の著、大智度論の略稱。
㋑楞伽經、佛楞迦山にありて大惠菩薩のために說かれし經文なり、經中、佛語心を宗となし、無門を法門となす等の語あり。
㋒智者大師は支那天台宗の開祖、天台四敎義、摩訶止觀、法華玄義、法華文句、等多數の述作あり。
㋓法愛、似て非なる法に執着すること。
㋔涅槃經に出づ。
㋕鹿野苑、印度波羅奈國にあり、釋尊最初說法の地なり。
㋖跋提河、釋尊入滅の地。

間五十年、未だ曾て一字をも說かず」と。若し意識の知解を以て、强ひて辯ずることをなさば、益々辯ずと雖も益々疎なるものなり。龍樹の論に曰く、「若し分別憶想は、卽ち是れ魔の羅網、不動不依なる、止是れ卽ち法印となす」と。子が分別戲論の心を潔淸せんを待つて、始めて吾が敎外の所傳、乃ち眞佛の法印なりと云ふことを信ずべし。斯れ固に敎外默傳の旨、圓極秘密の謂なり。密は言にあらず、默にあらず、識々の及ばざる所、智の至らざる所なり。此の奧密、經敎に載すと雖も、而も經敎は但言說するのみなり。心を以て心に傳ふる最上乘の禪、天下之れを宗門と謂ふ、亦宜ならずや。㋗太宗皇帝の修心の詩に曰く、「初祖安禪は少林にあり、經敎を傳へずして但心を傳ふ、後人若し眞如の性を悟らば、密印由來妙理深し」と。是れを以て諸佛之れを得て㋘等妙に昇り、衆生之れを證して本源に歸す。頓圓速疾の門、此の宗に過ぎたるはなし。故を以て㋙梵釋、龍鬼心を傾けて擁護し、菩薩賢聖、世に應じて紹隆す。㋚般若多羅、達磨大師に告げて云く、「汝が所化の方、菩提を得るもの數に勝ふべからず、其の道行修すること潔うして、燈々相續ぎ、光明世を照す、宗風益振ふて傳法利生、八千年に及ぶ」と。是れを以て之を念ふに、未來の流通、㋛涯涘すべからず。法此の土に流はりて、年世久遠なり、今の時中興すること、豈難きことあらんや。龍

㋗太宗皇帝、唐の太宗。
㋘等妙は等覺、妙覺なり、等覺は菩薩の最上位、妙覺は佛位なり。
㋙梵釋、龍鬼、梵は大梵天王、色界初禪天の主にして亦三界の主なり。釋は帝釋天王、須彌山上忉利天の天主にして佛法の守護神なり。龍は天龍、鬼は鬼神。
㋚般若多羅、東印度の人、達磨大師の師なり。
㋛涯涘は限界なり。

興れば雲集り、神動ずれば天隨ふ。故に歷代の聖帝、明王、賢臣、儒道、服膺して宗門を歸與するもの殫く紀すべからず。唐の太祖、神武を以て廣く㋓度門を開き、太宗、欽明を以て深く禪奧を究む。宋の眞宗、孝宗に至るまで、皆眞乘に歸して以て至化を助く。萬邦を典御し、普く群品を濟ふ。則ち㋒服を散じ戈を韜て、㋔無爲の道を扇ぎ、㋕澆を移し樸に反つて、不言の化を弘め、㋖瀚海天山の地、盡く提封に入り、㋗龍庭鳳穴の鄉、咸く法雨に霑ふ。㋘二儀澄清にして、國康く民樂し、㋙六合廓清にして、歲稔に時和げり。猶ほ㋚最勝王經に說くが如きは、「八萬四千の城邑、八萬四千の諸王、各其の國に於て、諸の快樂を受く。是則ち有惠の法師に親近して、如來の正法を信受するが故なり」と。佛の明言豈君臣と釋氏と共にして、正法を興すと云ふことを謂はざらんや。國土衰微し人民澆惡にして、淳なる者は日に漓く、厚き者は日に薄く。邪は强く正は弱く、愚を崇び智を棄つ。皆是主法の眼、古に及ばざればなり。此旨を解らずして、輒く謗毀するもの、覺王の本を負いて、迷者の末を取る。㋛桀を助けて虐をなす、其倒錯豈甚だしからざらんや。一言を毀謗するを以て、則ち百劫千生、佛の種性を斷ず、正法流通の門を塞ぎ、邪惡顚倒の道を開く、其逆罪必ず感ずることあらん。豈道ふことを見ずや、一切の重罪は皆㋜懺悔すべし、

㋓度門。衆生濟度の法門の略。
㋒服を散じ戈を韜む、軍馬の事を捨て、德を以つて治むること。
㋔無爲の道、無爲にして人を化するは、聖人の事なり、卽ち、聖人の道といふ意。
㋕澆を移し樸に反す、澆は薄也、樸は質朴なり。
㋖瀚海天山、共に邊僻の土地也。
㋗龍庭鳳穴、及び難き土地の形容也。
㋘二儀は陰陽の二儀なり。
㋙六合、天地と四方を合せて稱す。
㋚金光明最勝王經。
㋛桀、夏國の王、暴君なり。

佛法を謗するの罪、懺悔すべからず。誠なる哉是の言、佛法を謗するもの、是れ自ら其の心を昧し、自ら其の罪を招くこと決せり。古聖の云く、「聞いて信ぜざる、尙ほ佛種の因を結び、學んで成ぜざる、猶ほ人天の福を益す。」と、聞かずや、佛を廢毀するもの、禍踵を旋らさずして罪其の身に萃る。惜しい哉、味くして學すること能はず、謗して其の罪を招いで、永く佛種を斷ずることを。此の宗、是れ識學詮文の解する所にあらず、宗乘を擧揚すれば、十二分敎、氷の如くに解け、水の如くに消ゆ。祖令を全提すれば、盡大地の人、鋒を亡ぼし舌を結ぶ。譬へば㋝金翅鳥王の阿盧大海に入つて、雪浪を劈開して、直に龍を取つて呑むが如し。眼睛定動するの間、早く已に喪身失命す。機前に薦得するも、㋞二に落ち三に落つ。言外に拶透するも、㋟泥を拖き水を帶ぶ。況んや乃ち意識をもて卜度し、敎を披いて和會し、言に隨つて義を取り、文を析けて解を生ずるをや。何ぞ啻に㋠白雲萬里のみならんや。所以に道く、靈鋒の寶劒、常露にして現前す。亦能く人を殺し、亦能く人を活す。衲僧の眼目、世界に函蓋し、乾坤を把定す。穰邦を指して淨土となし、地獄を呼んで天堂となす。位を轉じ機を回し、星を移し斗を換ふ。通天の作略を逞しくし、跨海の神機を用ふ。終に惡水坑頭、葛藤堆裏に向つて着到せず。淨裸々、赤灑々、天四壁なく地㋡八荒を絕す、萬機不到、聖眼も窺ふことなし。故

㋜懺悔、懺は梵語、悔過と譯す、更に悔を加へたるは梵漢幷擧したるなり、過去の罪惡をさとりて悔い改むること。
㋝金翅鳥王、鳥類の王、龍を取りて食ふと云ふ。
㋞二に落ち三に落つ、第一義を失すること。
㋟泥を拖き水を帶ぶ、醜きを云ふ。
㋠白雲萬里、遠く隔たること。

に㋕同安の察の云く、「㋖三賢尚ほ未だ斯の旨を明らめず、㋗十聖那んぞ能く此の宗に達せん。」と、㋘緣覺辟支、㋙四果の聲聞、尚ほ其れと列せず、況んや其の下なるものをや。聖にあつては則ち大乘の菩薩、天にあつては則ち帝釋梵王、人にあつては則ち王臣僧尼、皆群を超ゆる決定の信あつて、方に能く透徹す。豈籠檻に局促するの量を以て、深密方外の旨を測らんや。經に曰く、「思惟の心を以て、如來圓覺の境界を測度せば、譬へば螢火をもて㋚須彌山を燒くが如し」と。正に此れを謂ふなり。佛法東に來つて至らずと云ふ所なし、千古萬古、宗綱墜ちず、㋛北辰の位に據り、百川の朝宗するが如し。其の徒に預るものは、道㋜三界を超え、德、神明に貫き、㋝馬祖、百丈、臨濟、德山等の如きんば、大機を闡き、大用を發し、卷舒擒縱、皆本分に據る、萬世拔けず、獨り天下に盛なるものなり。㋞裴休、陸亘、李玄、龐老の輩の若きんば、皆宗猷を探り、淵源を體究して、脚實地を踏む。㋟塵中に在りと雖も、宰官の身を現じて、內外護となる。法海の中に於て、能く津濟を致す、慾に在つて禪を行ず、火中に蓮を生ずるものなり。是れを以て諸王群臣、或は寺宇を建て、或は田園を置いて、如來の

㋚八荒は八方に同じ、四方と四隅なり。
㋕同安の察、察禪師ならん歟。
㋖三賢、とは十住、十行、十回向の菩薩の三位を云ふ。
㋗十聖、十地の菩薩の位、三賢位を經て十地の位に上る。
㋘緣覺辟支、飛花落葉等の因緣を觀じて、自然に獨悟したる聖者の位、小乘に屬す。
㋙四果の聲聞、佛の說法を聞いて悟る小乘の聖者を聲聞と云ふ、四果は預流、一來、不還、無學の聲聞の四位をいふ。
㋚須彌、梵語なり、妙高と譯す、世界の中央金輪の上にあり、諸天之に居り、六道、四生、二十五有の衆生皆之れに住すと。
㋛北辰、北斗星なり。
㋜三界、欲界、色界、無色界。一切衆生の生死輪廻する迷界

付囑を忘れず、其の眞正の釋子をして、安心行道して、方に隨つて化を設けしむ。則ち諸天善神、誓願力に乘じて、來つて其の國を護る。其の冥助に依つて、王臣、災を消して福となし、士庶、凶を變じて吉と爲す。信に是れ群惡を除くの神符、千祥を聚むるの祖宗なり。此の法、興らざれば、則ち諸天其の國を守らず、諸天其の國を守らざれば、則ち諸難競ひ起つて、上下安んぜず。誠に所謂國家の盛衰は、佛法の興亡に在るものか。然も法は人に由つて興り、道は緣を待つて顯はる。法あれども㋟僧寶なければ、其の名を存すと雖も、而も其の法、傳はることなし。道あれども㋠檀資なければ、其の志を立つと雖も、而も其の道興り難し。佛經を聞くに、曰く、「昔世尊、靈山會上に在つて、諸大弟子に告げて曰く、我れ滅度の後、清淨の正法、悉く以て國王、大臣、有力の檀那に付囑す、能く外護を致し、能く興持をなし、正法の化益をして、未來世に及ぶまで、斷絕せしむることなからしむ」と。此の言に由らば、佛敎の損益弛張、國王、大臣、有力の㋡檀那の慈明にあり。吾が佛の正法、源々相續いで、此の國に流はる。忝く佛の徒に預つて、今に其の法を以て、云爲する所あらんと欲せ

なり。
㋝馬祖、南嶽懷讓に嗣ぐ。百丈、馬祖道一に嗣ぐ。臨濟、百丈の法嗣黃檗希運に嗣ぐ。德山、青原下の龍潭に嗣ぐ。
㋞裴休、黃檗希運に嗣法す。陸亘、南泉普願に嗣法す。李玄、龐老、馬祖道一に嗣法す。以上の四人は在俗の顯官にして世事繽紛の間、禪に參じて各其蘊奧を極む。
㋟塵中は在俗の間にあるを云ふ。
㋠僧寶、三寶の一なり、僧は法を傳持して自利利他の利益を行ずるが故に、佛及び法と共に寶と稱せらる。
㋡檀資は檀越の資助なり、檀越は梵語、譯して施主と云ふ。
㋢檀那は梵語、布施と譯す、能く大利益を施すを云ふ、轉じて能く此布施を行ずる者を云ふ。

ば、豈王臣、檀那の主張を賴まざらんや。而も今時、敗群の邪輩、如來の衣を假つて、名を禪門に寄せ、師子の皮を披て、㋑野干鳴をなす。內には眞證なく、外には邪惡を馳す。縱に奸巧を振つて、世間を誑惑し、諸の醜惡を擧げて以て佛祖を裨販す。守る所は塵俗の匹夫の如くにして、畧羞恥なし。便ち瞎禿子の、衆盲を引き盲惑を執するものあり、㋒人を爭ひ、我を爭ふ。譬へば蒼蠅の臭肉を聞いで、頭を聚めて鬪ひ嗟ふが如くに相似たり。吾が宗の凋喪、皆此れに緣つて得。㋓少林の苗種、豈嗟傷せざらんや。貴書に云ふが如きんば、禪侶中或は戒律に乖き、名利を好んで、國家の費を顧みず、威儀法則に課せて、華美過差を致すの族、甚だ要樞に非ざるかと。擧る所の過惡は、皆不律の邪輩に在るか。凡そ如來の法服を濫にして、而して如來の重戒を犯すものは、之れを制するに、國家に刑憲あり、之れを律すに、㋔叢林に規矩あり。能く禪律の法式に依つて、一を罰し百を戒むれば、則ち信ずるものは、善に遷り罪を消す、眞なる者は、心を悟り聖を證す。釋氏の徒、豈佛祖の慈を念はざらんや、亦自身の惡を恥ぢざらんや。眞正の禪流は、定を以て身となし、惠を以て心となし、慈を以て本となし、己を忘れて佗を救ふ。世家を營まず、形骸を修せず、止㋕三衣一鉢、一粥一飯、破を補ひ寒を遮るの外、費す所寡し。

㋑野干、狐に似て稍小なる獸。
㋒人を爭ひ我を爭ふ、我見、我慢を張りて相爭ふを云ふ。
㋓少林の苗種、禪家の法孫、少林は達磨の舊跡。
㋔叢林、梵語、貧陀婆那の譯、僧侶の集まる處を云ふ、今は參禪の道場を指して叢林と呼ぶ。
㋕三衣一鉢、三衣は僧の着すべき衣、卽ち袈裟なり是れに三種あり、故に三衣と云ふ。鉢は梵語、鉢多羅の略、應量器と譯す、此二者は共に僧侶の必携品たり。

聲色を視ること浮塵に似、名利を視ること谷響の如し。佛祖の法式を守り、無上道を求むる者、豈幻世の華美を取るを志とせんや。噫、一向邪を掃ふを本と爲して、返つて毀を正に加へんや。是れを以て邪を化して正に歸すれば、則ち㋖悲を含んで必ず智を發するが故に、㋗無緣の慈を布き、悲を含むが故に同體の心を運ぶ。同體を以てすれば、則ち人を棄つることなし、何の樂としてか與へざらん。無緣を以てすれば、則ち物を遺すことなし、何の苦としてか救はざらん。利鈍齊しく觀、寃親普く利す、是れ佛の大慈悲なり、何ぞ皇道無爲の化に異ならんや。是れを以て十輪經に云く、「若し諸の比丘、佛法に依つて出家せんに一切の㋘天人、阿修羅等、皆まさに供養すべし。若し破戒の比丘、諸の煩惱㋙結使の爲に壞らるゝことありとも、猶ほ能く開示すべし。是れを以て我に依つて出家せば、若しくは持戒、若しくは破戒、我れ悉く輪王大臣の、鞭罰繫閉して鞭杖を加へ、乃至命を斷つことを聽さず、況んや復た餘の輕々しく小威儀を犯すをや。破戒の比丘、禁戒を犯すと雖も、其の戒勢力猶ほ能く無量の人天を利益す。譬へば香を燒くに香體壞れたりと雖も、佗を薰じて香ばしからむるが如し。破戒の比丘も亦復た是くの如し、自ら惡道に墮すれども、能く衆生をして、善根を增長せしむ。是の因緣を以て一切の㋚白衣、皆まさに守

㋖悲は慈悲なり。
㋗無緣の慈、仁愛を有緣、無緣の一切に及ぼす大慈悲なり。
㋘天人、天界の衆生、阿修羅は梵語、非天非類などと譯す、常に鬪爭を事とする鬼畜の類なり。
㋙結使、煩惱の異名なり、結は心身を纏縛するの義、使は之を驅使するの義。
㋚白衣、僧の緇衣なるに對して在俗を凡て白衣と云ふ。

護して、尊重供養すべし。」佛偈を說いて曰く、㋐「薝蔔の華萎めりと雖も、諸餘の華に勝れり。破戒の比丘も猶ほ諸の外道に勝れり」と。薩遮尼犍經に云く、「若し沙門あつて戒を破らんに、或は繫閉して打ち、或は還俗せしめ、或は其の命を斷たん。若し是くの如き根本の重罪を犯さば、㋙決して地獄に墮して、無量の苦を受けん。王の國土、此の不善を行ずるを以て、諸仙、聖人國を出でて去り、大力、諸神其の國を護らず、大臣諍ひ競ふて、水旱調はず、劫賊縱橫にして、人民飢饑し、疫癘疾病して、死亡すること無數ならん。自ら作すことを知らずして、諸天を怨む」と。信なる哉斯の言、明、皎日の如し。㋚經に曰く、「如來は是れ眞語者、實語者、如語者、不誑語者、不異語者」と。今時の護法の檀那、釋氏僧尼、如來の遺囑に違して、而して如來の禁戒を犯さんもの、㋛寶所歸ること無うして、㋜鐵城、待つことあり。孟子の曰く、「堯の言を誦して、堯の行を行はば、是れ堯ならまくのみ。」㋝張無盡の云く、「佛の言を信じて、佛の行を行せば、是れ佛ならまくのみ」と。誠なるかな、佛の言を信じて、佛の行を行ずれば、則ち皇基、固くして文武榮を敷き、國土豐かにして人民樂を受け、萬邦來庭す。何れの福か臻らざらん。嗚呼㋞末決惡時、聖を去ること浸く遠し、其の純一

㋐薝蔔は梵語なり、黃華と譯す樹形高大にして海岸に生ず、其華香氣殊に優れたり。
㋙決しては必ずの意なり。
㋚經、金剛經を指すなり。
㋛寶所は淨土。
㋜鐵城は地獄。
㋝張無盡、名は商英、宋人なり、徽宗皇帝の時、丞相たり、初め東林總禪師に參じ、後又兜率悅禪師に師事して宗乘を究む、護法論を著はす。
㋞末法惡時、正、像、末三時の第三、佛滅後千五百年の正像の二時を過ぎて、後一萬年は佛法漸次衰微に歸するが故に、末法惡時と云ふと。

なることを求むること、亦難からざらんや。此の弊佗なし、情想の浮塵の爲に惑され、利慾の妄境の爲に使はれて、己を忘れて、物を逐ひ、眞を棄て、僞を取る。境を取ること既に熟すれば、心源混濁して、見聞聲色を出でず、迷妄に自縛するを以て、㋟諸趣に流轉して、本源に返らざるもの、舉世皆是れなり。若し能く一念非を知つて、性の本に復り、心の源を悟らば、則ち情想利慾、皆吾が妙用たらん。卽ち此の無窮の妙用を以て、無爲の皇化を助けて、能く佛祖の德を報じ、能く君臣の恩を酬いなば、則ち亦善からざらんか。凡そ佛法の興廢は、係ること君臣にあり、則ち豈㋠釋子を草芥に棄てんや。其の法を扶持せんことを欲して、聊か禪宗の本末を書して、以て大法萬分の一を補ふ、其の淺を量らずと謂つべきのみ。嘗て聞く、㋡能仁氏の敎を垂るゝ、必ず禪を以て其の宗と爲し、佛を其の祖となす」と。祖と云ふは、乃ち其の敎の大範、宗と云ふは、乃ち其の法の大統、大統明かならざれば、則ち天下學佛の者、其の所說を一にすることを得ず。大範正しからざれば、則ち其の所證を質すことを得ず。夫れ古今㋢三學の輩、競ふて其の所學を以て相勝つことは、蓋し宗明かならず、祖正しからずして、其の患を致すなり。我が朝の㋣山王院大師の云く、「諸法の至極は禪を以て源となす、諸宗の奧義は、敎內の理法なり。」宗門と云ふは、修心の敎外なり、敎法の至極を以て禪

㋟諸趣に流轉す、諸趣とは迷界の六趣、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上なり、衆生は各業に引かれて、此間に生死流轉す。
㋠釋子は佛弟子なり。
㋡能仁氏、梵語、釋迦を譯して能仁と云ふ。
㋢三學は敎、律、論なり。
㋣山王院大師、智證大師の別號なり、智證は園城寺の開祖。

を推すべきにあらず、何ぞ況んや自餘小乘をや。諸流は海を以て極となす、萬法は空を以て極となす、群生は佛を以て極となす、諸佛は禪を以て極となす。故に ㋑傳敎大師、㋺慈覺等の若きんば、在唐の時、㋩神秀門下の宗師に參じて、傳法受衣して、此の禪を以て內證となして、秘して諸佛頂上の宗と曰ふ、又佛心宗と曰ふ。其の事碑の文に載せて、宋域㋥天台山の大慈寺に在り。㋭安然和尙の敎時諍に云く、「傳敎大師の佛法を撿ふるに、乃ち三譜あり、一には達磨の付法、二には天台の相承、三には眞言の血脈、禪門の付法は、以て佛心を傳ふ。釋尊一代多く㋬筌蹄を施す、最後佛心印を傳へて、敎文に滯らず、是れ諸佛の心處なり。」と㋣弘法大師、禪宗秘法記を述して云く、「自證は㋠曹溪の流を酌み、化佗は㋡惠果の旨に在り」と。故に本朝孝德の御宇、白雉四年癸丑、㋢元興寺の㋛道昭和尙、法を求めて入唐す。尋で㋒玄奘三藏に遇ふて、益を請ひ業を受く、藏、特に以て寵恭す。謂つて曰く、「經論義廣し、一生二生にも究竟すること能はじ、佛心宗は、乃ち直に聖位を超ゆる究竟の頓法なり。汝禪門を學して、東土に傳ふべし」と。昭、敎を奉けて禪を習ふ、悟る所稍多し。

㋑傳敎大師、最澄は本朝天台宗の開祖、比叡山延曆寺を開く、桓武帝の勅を奉じて入唐し、天台山國淸寺の道邃、佛隴寺の行滿に一宗の玄旨を受け、亦北宗の禪を唐興縣の翛然に嗣ぐ、註法華經等數十部の著書あり。

㋺慈覺大師、圓仁は初め最澄に師事し、後入唐して諸敎を研め、歸朝して天台座主となる、顯揚大戒論等凡そ百部の著述あり。

㋩神秀、支那北宗禪の祖、法を五祖弘忍大滿に嗣ぐ、五祖の嫡嗣六祖大師惠能の頓悟を主とするに異なりて、漸悟を唱ふ。

㋥天台山、浙江省台州府天台縣の北、天台宗の根本道場にして智者大師の開く所。

㋭安然和尙、天台宗、叡山の學僧なり、圓仁、遍昭に學ぶ、五大院大德と云ひ、阿覺大師と謚す、其著百餘部あり、敎時諍は其一なり。

藏を辭して歸朝して、元興寺の東南の隅に於て、別に禪院を建てゝ住す。行業の輩、多く從つて習禪す。種々の神異、日本記に備なり。聖德太子、昔㋟片岡の路の垂に於て忽ち飢人に逢ふ、乃ち達磨大師の應變なり。曾て問答歌詠を遺す、傳あつて記す。嵯峨の聖代、㋜橘の太后、禪寺を建て田地を寄す。弘法大師、唐朝の㋝義空、㋞契元、㋟惠蕚等の禪師を請じ、衆を安じて行道せしむ。興禪碑刻、今に及んで東寺に存す。昔より禪法此の國に傳はる、年世積むこと遠し。凡そ㋠般若多羅指頭の光明の到る處、聖賢出世して、廣く群品を利す。近ごろ禪師あり、其れ號して、㋡大覺、㋢兀庵、㋣無學、㋤大休と曰ふ、皆是れ宋土の英傑、法門の棟梁なり。慈惠外に宣べ、神機內に湛ふ、㋥弘法を務となし、玄奘に師事す、歸朝して天武天皇二年大僧都となる。

㋟玄奘三藏、譯經の大家、唐の貞觀三年萬難を排して入竺し遊歷研學十七年間、歸りて諸經論を譯述す、其數凡そ七十五部一千三百三十卷。

㋠片岡、大和國葛下郡にあり。達磨大師飢人の身を現じて此里に於て聖德太子に逢ふ、其歌詠は、

太子、しなてるや片岡山の飯にうゑて
伏せる旅人あはれ親なし。
飢人、いかるがやとみの小川
のたえばこそ
我が大君の御名は忘れじ。

詳くは元亨釋書にあり。

㋜橘の太后、嵯峨天皇の后、嘉智子、檀林皇后と稱す、深く佛法に歸し、空海に見えて密敎を聞き、又唐土に禪宗のあるを聞きて義空等を請ぜしめ

㋛道昭和尙、白雉四年唐に航し

度生を懐となす。鯨波を憚らず、遠く此の國に來り、夙縁を以て檀那の信心に契合す。誓願に乗じて、大いに覺王の ㋐ 梵刹を啓く。禪河の餘潤を酌んで、普く枯槁を霑し、佛日の末光を輝かして、廣く ㋑ 昏識を照す、皆聖位の中より來る。言、 ㋒ 多羅の讖に叶ひ、法、流通の時に應ずるものなり。今時の人、寡識にして其の本を推詳すること能はず、是を以て經論、諸錄、正宗記等の要語を撮摭して、以て宗祖興禪の本末を校へて、編して一卷となして、名けて興禪記と曰ふ。其の證據する所、固に臆記にあらず、明文皆大經大論より出でたること、最も詳かなり。ある者問うて曰く、「宗旨を明かさんと欲せば、只純ら祖意を提ぐべし、何の用ぞや、兼て諸佛菩薩の言教を引いて、以て ㋓ 指南とするや。」答へて云ふ、「從上是れ一向に教を看るを許さゞるにはあらず、恐らくは佛語を詳かにせずして、文に隨つて解を生じて、佛意を失せんことを慮る。或は詮に因つて旨を得て、心境對治を作さず、直に佛心を了らば、又何の過あらんや。佛祖の弟子、本師の語を引いて、學徒に訓示して、言に因つて道に薦み、法を見て宗を知らしむ。」故に圭峰の云く、「諸宗の始祖は、卽ち是れ釋迦、經は是れ佛語、禪は是れ佛意、諸佛の心口、必ずしも相違せじ。」達磨、楞伽經を以て衆生の心を印し、佛語心を宗となし、無門を法門となす。心を宗となすとは、卽心卽佛なり、無門を法門となすと云ふは、本性の空性に達して、相あることなく、亦門あることなし。但義上の文を執して、語に隨つて ㋔ 見を生ずること莫れ。意を得て言を忘じ、理を悟つて教を越ゆる、正に是れ魚を得て ㋕ 筌を忘れ、兎を得て ㋖ 蹄を忘るゝの謂なり。直に須らく詮下の旨を探つて、本宗に契會すべし。則ち無師の智現前し、天眞の道味からず。 ㋗ 華嚴經に云く、「一切の法は、卽心自性なりと知らば、悳身を成就して、佗に由つて悟らず」と、是れなり。諸宗は乃ち教理行果なり。所謂、諸聖の所說の ㋘ 名言、之れを教と謂ふ、名言に依つて趣向する、之れを理と謂ふ、名言に依つて行ずる所、之れを行と謂ふ、名言に依つて證する所、之れを果と謂ふ。皆是れ ㋙ 功用、因果、次第の法を出でず、果して本來清淨天眞の佛にあらず。纔に玄を說き妙を談ず、大いに ㋚ 好肉に瘡

㋐ 梵刹は寺院を云ふ、其語は淸淨なる國土の義。
㋑ 昏識は迷心なり。
㋒ 多羅の讖、多羅は般若多羅尊者、讖は豫言なり、尊者が後世禪法の廢んなるを告げられたるは前に出づ。
㋓ 指南は證據の意。

らる。
㋙ 義空、唐人、法を鹽官齊安に嗣ぐ、來朝して嵯峨檀林寺に住す、寺は檀林皇后の建立。
㋚ 契元、唐僧、後、來朝せる人。
㋛ 惠曇、入唐して齊安に參禪し、義空を伴ひて歸朝し、初め東寺に居り、後檀林寺に移る。
㋜ 般若多羅は達磨大師の師。
㋝ 大覺、鎌倉建長寺の開山、蘭溪道隆和尙、宋西蜀の人なり、無明惠性に嗣法す、寛元四年來朝す、北條時賴建長寺を建てゝ師を請ず、大覺禪師と勅諡す。
㋞ 兀庵、普寧は無準師範に嗣法す、宋西蜀の人、文應元年來朝す、時賴の尊信を得て建長寺の第二代となる、後ち西歸す、宗覺禪師と諡す。
㋟ 無學、祖元は兀庵と同じく無準に嗣ぐ、宋人なり、時宗の請によりて來朝す、時宗鎌倉に圓覺寺を建てゝ師を開山とす、佛光國師と勅諡す。
㋠ 大休、正念は宋溫州の人、石溪心月に參じて其法を嗣ぎ、來朝して鎌倉淨智寺に住す、佛源禪師の諡號あり。
㋡ 弘法は佛法の弘布なり。
㋢ 梵刹は寺院を云ふ、其語は淸淨なる國土の義。
㋣ 昏識は迷心なり。
㋤ 多羅の讖、多羅は般若多羅尊者、讖は豫言なり、尊者が後世禪法の廢んなるを告げられたるは前に出づ。
㋥ 指南は證據の意。

㋔ 見は見解なり。
㋕ 筌はうへ、漁りの具なり。
㋖ 蹄はわな、禽獸を捕る具、魚兎を得れば筌蹄には用なきなり、恰も河海を渡り終れば、舟船に執着するの用なきが如し。
㋗ 華嚴經、大方廣佛華嚴經にして、華嚴宗所依の經典なり。
㋘ 名言は名字、言句なり。
㋙ 功用、因果、次第の法、漸漸に修行の功を積み、其因緣によりて次第に佛果の聖位に上る法門なり。

を剜るに似たり。顯を立て密を論ずる、正に是れ㋔大圭に瑕を生ず。古聖之れを情に聖量を存し、解、果因に在りと謂ふ。未だ聖情を逾越し、諸の影迹を過ぐること能はず。若し一念緣起無生なれば、頓に㋕三乘一切の諸位を超えて直に自心の本佛を證す。其の性、虛空に等しく、其の體、法界に同じ。㋖三明、本圓かにして、㋗六度、虧くることなし。靈機、待を絕し、眞常、運に任す。衆を鑑みるに心なし、照にして常寂なり。所以に道く、「靈光、洞かに照して、迥かに根塵を脫す、體、眞常を露して、文字に拘らず、心性染むることなし、本自ら圓成す、但妄緣を離る、是れ㋘如々の佛なり。」と、予、草礫の賤軀、年運んで老いたり、世に於て誠に望む所なし、但此の法、微せず昧せずして、㋙流通窮りなからんことを。

國譯興禪記終

㋔好肉に瘡を剜る、疵なきに疵をゑぐるなり。
㋔大圭、圭は瑞玉にて之を作ること、寶玉なり。
㋕三乘、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘なり、乘とは運載の義なり、衆生に上中下の三種の根機あり、三乘の內各自己の適する敎法によりて佛道に悟入す。
㋖三明、宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明にして過去、現在、未來を知る神通力なり、六神通中の宿明通、天眼通、漏盡通に同じ。
㋗六度、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠の六波羅密なり、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意にして、大乘の菩薩の修する行なり。
㋘如は本來變異なきの義。
㋙流通、佛法の流れ弘まること。

興禪記

沙門靜照述

佛祖正法流於華竺、的的相承、綿綿不斷、如傳燈曰、如來將化、預命摩訶迦葉云、吾以清淨法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙正法、今付於汝、汝當護持、幷勑阿難、貳其傳化、無令斷絕、廣燈曰、大迦葉謂阿難云、婆伽婆未圓寂時、多子塔前以正法眼藏密付於我、我今傳付於汝、原是二者、蓋體涅槃及阿含等經、述之、爾後祖祖授受、凡西天二十八傳、至菩提達磨、自達磨來於震旦、五傳而至曹溪、自曹溪一傳而覺樹分條、慧燈列焰、如水傳器、續佛慧命、是爲青原、是爲南嶽、自青原南嶽不十傳、則分爲五宗、各擅家風、是曰臨濟、是曰曹洞、是曰雲門、是曰潙仰、是曰法眼、應機酬對、雖建立不同、而會歸則一、莫不箭鋒相拄、鞭影齊施、攝物利生、啓悟多矣、其竺土佛祖、密傳奧旨、化行機緣、粲然備載於傳廣續等之諸錄、匪遑重記、達磨兒孫、相傳禪者、如來祕密微妙禪也、傳燈曰、是諸佛萬德之源、故名如來藏識、楞伽經 亦是菩薩萬行之源、故名心地、梵網經 悟之名慧、修之名定、定慧通名爲禪、凡禪定一行能發起性上無漏智慧、一切萬行萬德皆從定發、故欲求聖道者、必須修禪、然禪有多種、謂、帶異計、欣上厭下而修者、是外道禪、正信因果、亦以欣厭而修者、是凡夫禪、悟我空、見處偏眞而修者、是小乘禪、悟人法二空、所顯眞理、而修者、大乘禪也、若頓悟自心本來清淨、元無煩惱、

無漏智性、本自具足、此心卽佛、靈明湛寂、廣大融通、畢竟無異、無爲無住、無修無證、無塵可染、無垢可磨、爲一切法門宗源者、是最上乘禪、又名如來清淨禪、亦名一行祕密王三昧、亦名眞如三昧、此是一切三昧根本、證此三昧根本、則何法門而不開、何三昧而不現、風柯月渚、並可傳心、煙島雲林、咸提妙旨、念念超於威音之前、步步蹈於毗盧之頂、達磨門下展轉相承者是也、圭峯云、諸家高僧所解敎義、雖最圓妙、然立趣入之門戶、分次第之階差、只是前所擧諸禪之行相也、唯達磨所傳者、頓同佛體、迥異諸門、故維楊法愼大律師云、敎乘極談、包一切經義、東山法門、是一切佛乘、色空兩忘、慧定雙照、不可得而稱也、所以、不立文字、直指心源、不踐階梯、徑登聖域、無過此宗者也、斯乃佛祖冲密之幽旨、群生靈覺之本源、卽相無觀、空空不能測其眞際、卽慮絕知、玄玄不能窮其指歸、永脫識智、全超言象、靈明恢廓、虛凝淡泞、淸宵絕際、明月孤圓、神輝潛映而不滅、萬相俱應而不生、顯旣非有、隱豈爲無、寂焉而動、動焉而寂、天眞自性、本淨明妙、出沒無方、應化無礙者也、自少林之花開五葉、曹溪之燈分十方、以降、蓋以格高調古、言峻理幽、等閑垂一機、示一境、盡是與人拍釘拔楔、離却泥水、活人眼目、直使博地頓悟、全心是佛、不歷果位、三身四智、本來具足、是聖是凡、圓成一體、厥後子孫直指單傳、殺活自由、一模脫出、皆其英徽之士、奇傑之流、列之法藏、如日經天、依此宗得道者、從古至今、不可以周知、而悉數也、其法雨灑於天上人間、廣霑諸有、其道風扇於佗方此土、普滌群惑、可謂盡善盡美之法要、無比無儔之正宗也、蓋大雄付囑之旨、正眼流通之道、敎外別行、不可思議者也、不立文字、敎外別傳者、世尊以靑蓮目顧視飮光、飮光但一微笑、達磨命門弟子各言其所得、二祖唯禮三拜、其旨不可以文字義說、宣示正宗記云、達磨自承佛所傳、迄至于今、不絕者、蓋謂此法祕密無言無示難信難到、唯是已證之者、乃知其所以、以爲究竟、故也、若其究竟之理、則佛之境界、祕密微妙、非文字言義可至、必密傳妙證可以至矣、直以心證、豈在乎經敎語言文字之間耶、馬鳴曰、離念境界、唯證相應、故、龍樹曰、不可說者是實義、可說者皆是名字、斯二祖師尊其心證之親密、以別其循迹而情解也、離念者、圓明覺了、虛明自照耳、淸凉國師澄觀大法師曰、果海離念而心傳、圭峯乃釋之曰、此卽達磨以心傳心、不立文字之意也、大聖人果以其正宗默證微密、遺於後世、爲其標正印驗者固亦已見於吾佛之當時、摩竭掩室、毘耶杜詞、若知有者、默識其趣向矣、學者亦尊而信之者歟、智度論曰、禪最大如王言、禪則一切皆攝、佛菩薩諸三昧及佛得道捨壽如是等種種勝妙功德、皆在禪中、謂此義曰、解脫禪、三昧皆名爲定、定名爲心、其所謂心者、乃諸禪祖之所傳者也、正宗記云、吾佛以正法要爲大敎之宗、以密傳受爲一大敎之祖、其宗乃聖賢之道源、天地生靈之妙本也、其祖乃萬世學戒定慧者之大範、十二部說之眞驗也、是以龍樹祖師禪門名爲宗門、卽謂吾宗門乃釋迦文一佛敎之大宗正趣矣、所謂之意義者皆見於大藏之間、且以廬山遠公統序與禪經智度論涅槃經四者之說、詳其奧旨、夫三業之興、以禪智爲宗、經云、道從禪智近、泥洹豈非謂禪爲經律論三學者之所宗乎、八萬四千法門、莫不以此密傳極證爲之眞要、所以道、三世諸佛之所證、蓋證此也、如來爲一大事出現、蓋爲此也、一切衆生、妙圓覺心、本無生滅、圓同大虛、如淨瑠璃內含寶月、如大明鏡照了萬殊、光體無二、如大摩尼映於五色、隨方各現、如百千燈光照一室、其光圓滿無